
捕獲大作戦

鶏 庭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捕獲大作戦

【Nコード】

N0942S

【作者名】

鶏 庭子

【あらすじ】

『とある地方の とある会社の 恋話4』

男×男を愛でるBL大好きな私（女子デス！）。上司にウツカリ同人誌用の原稿を見られちゃってあら大変！ だってそれは上司をモデルにしちゃってましたからね！ えっと、私、どうなっちゃいマスか??

※BLというもののその成分はほぼ出てきません。出たとして

もプラトニックです。基本ノーマル恋愛です。でももしBLというだけで拒否反応ある方は回れ右でお願いします。

まずは立ち位置の紹介デス（前書き）

ノリと勢いで書いたらウツカリ長くなりましたので短編じゃ収まらない（汗）暫くお付き合いください。

まずは立ち位置の紹介デス

上司と部下のイケナイ関係…… 萌えですなー!!!

私は乱雑に書類が積まれた机の隙間から、ずり下がる眼鏡を押し上げてこっそりと二人を眺めた。

カチョー————はかまだけいじ袴田圭吾、三十一歳、バツイチ独身。課長（仮）だったけど、来月から正式に課長昇進となる。大人の魅力がムンムンで、前の奥さんが昔の男と逃げたって言うのがまず信じられないハイスペックな男性。

清水センパイ————しみずひろゆき清水博之、二十七歳、独身。次期係長に内定出ております！ こちらも将来有望株のイケメンだー！ ひゃっほう！

私は誰にも見られないよう後を気にしつつ、メモ用紙の片隅に二人の談笑する姿を絵に書き記す。カチョーが清水センパイとよく話すのは、引継ぎがあるからなのだ。

ああ、堪らんですよ！ この二人が……っ！ くうううー！

私は世間で言う所の『腐女子』である。ボーイズラブBLが大好物の二十二歳新入社員。ややつ、しかしこれは公表してはならぬことなど重々承知の上デス！

こういったものは、世間体悪いことこの上なし！ ひっそりと社会の片隅にて生息中なのであります。

私はこの二人をモデルに書いた、めくるめく愛の世界を同人漫画

へとしたため、同人誌即売会やサイトにて絶賛販売中。

はー、就職活動の最中、面接官としてこのカチョーがいたのには衝撃を受けましたですよ。「これぞ理想のS彼氏！」ってね。

絶対この人は攻めだな。言葉でも体でも、技巧を尽くして相手を陥落させるのですよ！ もう帰りの電車ではもらったパンフにモリモリ設定書いちゃったもんね！

はー、眼福であります。この会社はステキ男子ステキ女子、よりどりみどりでパラダイスー！ 創作意欲が湧くってもんだよ有難う皆さん！

割と社内恋愛に関しておおらかな社風のせいか、何組か見受けられる。

係長内定の清水センパイと美穂センパイ、それから百合センパイとマメ橋……もとい高橋センパイもラブですね？ どうしてこの私が恋愛事情に聡いのか？ 伊達に長いこと創作活動してないっすよ、こと他人に関してはね！

——ただ悲しいかな、只今彼氏いない歴イコール年齢という悲しい現実。というか、よくあるこのテンプレがリアルに使えてしまうのも如何なものでしょーカ。

恋の一つも芽生える思春期黄金時代に、とある漫画に出会ってしまったのが運命のイタズラっていうかなんていうか。しかも不健全なBL。

西に即売会があれば小遣いとバイト代をつぎこみ、東にオフ会あれば予定最優先で参加。いやー、脳内は充実してたな、ビバ青春！

ま、そんな訳で。リアル男子の絡みはほぼイメージで描いているんですがね。

最近、ちょっとばかり悩みがあるんデス。

ちっともリアルに感じられない！ とコメント貰いまして……ア

イタタタッ！

ばれてますよ世間の方々に！ 私がソレ知らんって事！！ そりゃーリアルさを出さねば「抜きどころ」が空々しく感じるでしょうからネ。

ああ、どうしたものか。

まずは立ち位置の紹介デス（後書き）

ちなみにBLがよく分からないまま書いてるんですけど、なにか「そうじゃない！もっとこういうもんだ！」という熱い思いがありましたらメッセージでコッソリお願いしますw

カチョーにバレたの巻であります

「滝浪^{たきなみ}さん、あの会社に送る封筒はどこにあったかな？」

「あ、ハイ。こちらにあります！」

終業間近、カチョーに言われ私は角型0号サイズの茶封筒を取り出した。明日取引企業に送る封筒に、私が資料を揃えて入れて置いたのだ。その最終チェックをする為、カチョーは私が渡した封筒の中身を取り出……

「なんだこれは？」

「え？ ひ、ひやああああっ?!」

カチョーが出したものだ。それは……私の趣味モリモリの漫画原稿!!! やややばし! 私が所属するサークル『BARA☆たいむ』に送る為の封筒を、間違えてカチョーに渡しちゃった!!

一旦手にした原稿を封筒に戻したカチョーは。

「……滝浪さん? 会議室まで来てくれるかな」

「……はい」

死刑宣告のような絶対零度の冷たい声に私は逆らえるはずもなく、トボトボとカチョーの後についていった。

会議室、といっても十人ほどが入れる小さな小部屋。カチヨーはパチパチつと電気のスイッチを押し、私には椅子へ座れと促したけれど自身は行儀悪くも机に腰を預けた。

こんな状況なのに、あーその姿、様になるなーなんてジックリ観察しちゃったよ。

カチヨーはさっきの封筒から中身を取り出し、私の渾身の力作である原稿をパラパラと見だした。

——くっ！ 何の羞恥プレイなのデスカ！！

私は自分の描いた漫画にはそれなりに自信を持っている。同じ趣味を持つ相手だけにはね！ ノーマルで、異性で、上司に見られるなんて想定外！ しかしこのシチュ使えるな、と頭の片隅で思う私は芯まで腐ってるんじゃないかね、ほんとにさ！

「————この登場人物の名前に見覚えがあるのは気のせいかな？」

うぐっ、気付かれましたかっ！

読み終えたらしいカチヨーは、トントンと原稿を揃えて封筒に再び仕舞った。そして、軽く腕を組んで私をじつくりと眺める。

「さ、さあ？ 気のせいじゃありませんか？」

「袴田、清水……課長と係長……三十一のバツイチと二十七の……」

しらばっくれてみたものの、カチョーがそらんじて読み上げるその設定に、私は恐怖で慄いた。

ひよええー！　こんなマニアックな世界で会社の人絶対読まないしと思って『そのまんま』の設定で気軽に描いちゃったんだよー！
モロバレじゃん！

「あの……えーと……見なかった事には……」

ギロツとひと睨み。

「ああそうですよねハイ。なりませんよね」

シュンと肩を落とす。――終わったな、私。

上司達をモデルにコテコテなBL描いちゃ、そら……良くって自己都合退職でしょーか？　即売会とオフ会参加や製本代の資金の為の社会人、ここで終了？！

「私はいたって健全な趣味を持ちこの分野に全く興味の欠片もない。このように私をそのまま投影したかのような作品は非常に気分が悪い」

「はい、そうですね……」

分かります、分かりますって。だからごめんなさーいっ。

「これは世に出すものなのか？」

「――えー、えっと……これは何人か趣味を同じくする者が集まってサークルを作り、アンソロジーとして一冊の同人誌という自費出版物を作り上げ、んーと、こういった同人誌の即売会なんか

で手売りをしたりネット販売したり……ああでもこのジャンルは腐女子が好んで読むものでありそこまで……」

「ふじよし？」

「つまり……男性同士の恋愛が堪らなく好みであるという女子達です。ザックリ言えば『やおい』または『薔薇』でしょうか？ 私
の所属するサークルはそんなに有名ではないし、そもそもBLの同
人誌を買うという人もそんなにいるわけじゃないし、世に出回る部
数も大した事がないからなんと言うか……」

最後はゴニョゴニョと口ごもる。そう、大した事がない。本当に
売れてるわけではないのだ。いいんだよ好きでやってるんだからね
っ！

カチヨーは一つ溜息を零し、私の原稿が入った封筒をコンコンと
ノックするように叩く。

「この件に関して。本当ならば重役会議のちに処分を決定するも
のだが……。しかし私としては自分が望んだわけではないにしても
モデルとなっていて、それをお偉いさん方に見せる勇氣はない。よ
ってこの件に関し、私の胸に収めておく」

「え！ いいんですかっ？！」

やた！ まさかの不問？

「まだだ、最後まで聞け。それには三つの条件があるが、飲める
か？」

「三つ？ 何ですかソレ」

「飲むと約束できるまで言わない」

ひいっ！ それ、二択のフリして一択ですぜ！ 拒否権ないじゃないデスカ！

「そそ、その条件って、命までは取りませんよね？」

「はあ？ どうしたらそんな突飛な発想が出てくるんだ。当たり前だが命の危険はない。そして仕事もこのままだ」

条件の内容は気になるが、そんなマンガ的な無体はないだろう。見た目S上司だけど普段のカチヨーは紳士だし？ ってことで、深く考えずにとりあえず了承した。

すると、カチヨーは「ここにサインと拇印」と一枚の紙を差し出した。なんて抜け目のない！ カチヨーの本質はこちらサイドでしたか！ 流石私の見込んだSキャラですね！ 俺様キャラですね！ 私の目に狂いはありませんでしたよ……はあ。

ちよつ、オッソロシー条件っ！

「待たせたな」

「あ、いえいえ。ネタ書いてたんで全く問題ありませんデスよ」

と、カチヨーが来たので私はネタ帳を畳んだ。

「ふふーん、この喫茶店で少し痴話喧嘩的な雰囲気のカポー（注・カップル）に聞き耳を立てて居りましたので！ いやー、いいネタ拾えました！ というわけで、待ち時間など全く気になりませんでしたのです」

カチヨーはそう言う私のネタ帳を腐ったものでも見るかのようにした。あははそれ正解！ 大分腐ってますからねっ！ 異性カポーは私の脳内ではBLに変換デス！

時刻は午後七時。

私は定時上がりだったけど、カチヨーは残業の為にこの時間。それでもかなり早い方らしいけどさ。

あのおっそろしー『三つの条件』の内容を聞く、その為にこの場へ待ち合わせたのだ。だって会社じゃ私もカチヨーも色々まずいからね。

うう……どんな条件を提示されるのかな？！ はっ！ まさかカップリングに問題が？！ 清水センパイじゃ萎えるとか、実はその相手は元彼で、本命はマメ橋センパイだとか？！ そっちのフラグ回収ですかカチヨー！ 奉仕キャラが好みですかカチヨー！

それはそれでアリですな！ とネタ帳に書き付けるため広げようとしたら、ピンツと私のオデコにデコピンが当たった。

「痛っ！ 何するんデスか！」

「お前今話聞いてないだろ。いいか、その腐った脳みそでよく聞け」

わーん、何気に失礼！

「まず一つ目。その小学生のまま時代が止まったような見た目全て変えろ」

「え、えええっ?!」

「今時探す方が大変なガラス製の太枠黒縁眼鏡。前髪と後ろ髪すべて同じ長さを真ん中で分けた、二つ縛りの昭和初期な髪型。化粧がドヘタクソのその顔、彩りが一つもなく逆にかわいそうに思えるその残念な服装。どれもこれも最初から気に食わないんだ。変えろ」

ちよ、私をまるっと全否定?! いやいや、しいて言えば私ってナチュラリストなんですけどねっ！

猛然と抗議をしたものの、カチヨーは「条件その一」と譲らず。くっそー、パワハラだああ！

「それから条件その二」

私の反論を何事もなかったかの様に流したカチヨー様は、続けて二つ目を切り出す。

「私の家に住み込み、家事全てやること」

「ちょ……困われる！　ぐむむ……」

「バカッ！　人聞き悪い事いうな！」

慌てて私の口を塞ぐカチョー。ええー、だって住み込むだなんてそんなああ。

私の口に手を当てながら、「いいか、よくその腐った耳で聞け！」と脳内の妄想が暴走しがちな私を理解した(?)カチョーは視線で私をギッチギチに縛りながらようやく手を離してくれた。

っていうか、カチョーの手は大きくて固いんですね。いい手です。これをアレすれば萌えるな。それでもって、こう……。

「腐った意識を現実へ戻せ！」

「いたたたたたた！……」

カチョー酷いです！　私の耳はそんなに伸びませんって！　あまりの痛さにじんわりと涙が出ちゃったよ、もうっ！　さすりながら抗議を視線に込めてカチョーを見たら、何故か少し怯んだ様子だった。

「とにかくよく話を聞け！　まず期限は一ヶ月と定める。理由はお前知ってるだろ？　今独り身でありそして残業続きの為家事まで手が回らず、非常に困っている」

「ああ、奥さんに逃げられ……いたたたた！！　は、はい。そうですねそうですね！」

「そして一カ月後に……客が来るんだ。それなりの部屋にして迎える為、人手がいるから丁度言いかと思ってな」

「えー、家事代行サービス使えばいいじゃないですか」

「却下」

即答デスカっ！

「まあ丁度いいタイミングで、お前が条件を飲むと言ってくれたから任せよう」と

飲むっていうか、飲まされましたケドね！！

とつくに注文してあった紅茶は飲み終えてある。ぬるくなった水滴がびちちよりついたグラスを掴み水を一口飲んで、はああつとこれみよがしに溜息を吐いてみた。

ピクリと片眉を動かしたけど、特に何も言わなかったよカチョー。そこはなんか言ええ！

「じゃあ、なんで住み込みなんデスカ？」

むーっと唇を突き出し座席の背もたれに思い切り体重を乗せた。

態度悪い事この上なしデス。

「簡単。お前の家は通勤に時間かかるからだ。その時間すら惜しい。キリキリ働け」

「暴君め！」

なんてこったい！　どんだけ散らかしたんだ、カチョー！

カチヨーサマのお宅訪問であります！

『私は研修の為、一ヶ月合宿をすることになりました』

って家族には伝えました。ええ、私は実家暮らしですからね。建前は必要なんです。

カチヨーのサインの入ったキッチンとそれっぽく書いた書類に騙されんな、オール！

えー、ほんとカチヨーって私の見立て通りのSキャラで俺様でしたね……。こんなの当たっても嬉しくないやい！ 妄想だから楽しいキャラクターなんだい！

旅行用（主にオフ会参加で趣味詰め込む為無駄にでかい）キャスター付きのスーツケースをノロノロと引きずりながら辿り着いたのは、一戸建てでした……。

———で、でか！

繁華街に程近く、それでいて閑静な住宅街。会社まで……そうだな、徒歩で二十分もかからないかな。カチヨーの長いおみ足ならば、十分もあれば着いてしまうでしょうね。ちえっ。

会社休日の本日から一ヶ月、ワタクシこちらに住み込むことになりました……えーん。

何風だかよく分からないけど、とにかくオサレな玄関の表札を見

れば間違いなくカチヨーですね。『袴田』って書いてあるしね。間違いないですね……。

回れ右して帰りたいよマミー！

しかしここで帰ったら……あの私のステキ原稿が取り上げられてしまうのだ。そう、あの原稿はカチヨーに没収されてしまった。生活指導の先生かつ！

幸い締め切りにはうんと余裕を持っていたため、ギリギリ期限に間に合うだろう。つい筆が進んで早めに描き上げたのが功を奏したというか何というか……いやそもそもそれが原因でこうなった訳であり……。

ゴッ。

「いったあああああああ」

「遅い」

「ちょっとおお！ ドアをいきなり開けるだなんて酷いじゃないデスカ！」

「早く入れ、そして仕事しろ」

人の話聞けって、昨日おっしゃってませんでしたか？ カチヨー！！

いやいや、それにしても……。

休日のカチヨーはなんというか。『THE☆色男』デスねっ！
眼福デスねっ！ ————これが妄想の中だけなら最高なんデスけどねえ……。

綺麗に整えられている髪と、パリッと着こなしたスーツ。輝いた靴。仕事中のカチヨーはどれをとっても一流の男性なのに、オフモードは大人の余裕をどこ感じさせる、それでいてすこし隙のあるような……。

ハッと気付いたら目の前にデコピン発射一秒前がありました！ 慌てて後に下がり、オデコガードしましたよ！ 危ない危ない。

「妄想に耽るのも結構だが、時と場所を選べ」

「は、はひっ！ 失礼致しました」

カチヨーの先導でお邪魔しましたこのお宅は、まだ新しい匂いがした。広い玄関、上がり框の低さ、作りつけの飾り棚。どれをとってもオサレで私は、ほおおっと見惚れてしまった。

「カチヨー、いいおうちですね！ ここに独りで……あわわ」

「……とにかく荷物を置け」

うわー、うっかり地雷を踏みましたね、私！ 最初の沈黙がオソロシー！

つといますか……あれ、あまり想像より散らかってませんよ？ 想像では腐海の森でしたからね！

カチヨーに案内されるまま、二階へと上がり一つの部屋のドアを開けた。

「ここで一ヶ月寝起きしてもらう」

その部屋は八畳ほどの広さがある洋間で、ベランダに続く履き出

し窓と出窓がついた、とても日当たりのよいステキなお部屋。客用と思われる布団一式と小さなテーブルが片隅に置かれていた。

「……あ、あれ？　なんか待遇いいすね？」

もう私のイメージでは階段下とか物置とか……暗い部屋でコッソリと過ごすのかと思ってましたよ！　なんてったってメイドですからね！（脳内イメージアップ）

カチヨーは腕時計を見て「ああ」と声を洩らした。

「もうこんな時間か。今日の所は条件その一をクリアしてもらおう。行くぞ」

「ええええ、どこへっ」

「……トリミング？」

ぎ、疑問形デスカ！　いや、私ペットじゃありませんけどおお？

ゴハンは意外に庶民派デス！

その前にまずは腹ごしらえという事でお昼近いこの時間、カチヨ
ーの運転する車で食事を取るようになりました。

「カチヨーはこういうの食べないと思ってマシタ」

「そうか？ 俺は好きだぞ。ほら、早く決めろ」

「イエッサー！ ではでは私め、こちらのキムチ牛丼で！」

「却下」

出たな暴君！ 即却下デスよ！

「何ですかっ！ 私これが一番好きなんデスよ?!」

「これから人に会うのに何故臭うものを食べる？ 少しは考えろ
阿呆」

阿呆とな！ 漢字読みで来ましたね?! くっ、だからデキる男
っていかんだ！

渋々二番目に好きなネギ玉牛丼を選んだけれど、それもまた却下。
トホー、なんて可愛そうなワタシ。三番目のチーズ牛丼ミニサイズ
でひとまず許可が下りてホッとした。

いやいや、しかしカチョーが牛丼チェーン店が好きとはねえ。なんとなくハイカラでオサレな洋食のお店でランチなんか頼んじゃって軽く二千円コース食べちゃって。なーんてそんなイメージ持つてマシタ。

……なにその牛丼大盛り味噌汁卵付きって！ 食べ盛りのお子様デスカ！

丼を食べるその姿。カウンターに座りながら横目でチラリとみると、とても男らしく見えますねっ。おすました料理じゃなく、丼物を食べるイケメン……こういうのはギャップ萌えというのでしょうかあっ！

ああ、いいネタまた一つ拾えましたぞ！ そうだよ、こういった場面でキュンと落ちればいいんだ。大きな手で持つから丼が小さく見える、とか、味噌汁飲むとき上下する喉仏にムラっとするとか！ 忘れないうちにメモ、メモ！

慌ててバッグの中からマル秘手帳を出そうとした私の手を、いつの間にかぎゅうっと捕まえたカチョー。え、なに、その笑顔……怖いデスよ？ 目も笑ってください……！

「は・や・く・食・え」

うわーああ、私のネタよサラバ！（覚えてる自信がない）

お腹一杯になった所で車に乗ると、もれなく眠くなりますよね？ それは仕方がないってもんです。気付いたら目的地に到着してマシタ。

「————おい」

「ふえ？ 彼はまだモノを握っただけで……イダー……ッ！」

デコピン炸裂！ こっ、これ、地味に痛いんデスよっ！

「寝ぼけるのも大概にしろ。着いたぞ、降りろ」

言われるがままシートベルトを外し降り立つそこは、なんともセ
レブ臭漂う店構えの美容室。私は見た事ないケド、カリスマ美容師
というものがいそうだよ。一人見つけるとあと三十人はうじゃうじ
ゃ出てくるに違いない！

カチョーは私の事などお構い無しにごく自然と店のドアを開ける。
うをうっ！ まだ心の準備が！

すると、「お待ちしておりました。袴田様ご来店有難うございま
す———そちらの方がご予約時に申された……？」

わ、その目！ 『どんな関係だよお前そしてどこの山奥からタイ
ムスリップしてきたサルなんだ』とおっしゃってますね？！

幾分怯んだものの、私はオサレ魔人に値踏みされる言われはない
ので黙ってカチョーの隣に立っていた。

「ああ、店長よろしく頼む。見れる格好にしてくれ」

「畏まりました」

そしてカチョーは私の首根っこ捕まえて店長へと引き渡した。

———ちょ、トリミングで正解なんデスカ？！

毛先のエアリー感ハンパねえデス！

「ほお」

私は完成のちにカチョーへと引き渡されました。ええ、それはそれは死闘の末にね！

まず私のロングゲストなヘアーを（頑張って英語デス！）を、しょーとぽとかいうオサレな髪型にされちゃいまして！

短く切るの、頑張って抗議したんデスよ！

———ちよ、縛れる方が楽なんデスよ！ 切らないでええ！

———「条件その一」、そう伺っております。

———ぎよええ！

有無を言わせぬその営業スマイル！ 目、笑ってませんよー！
何よ何よ何なのよー、仕事だからって忠実にこなさないでください
い！

仕事仕事って、たまには僕の事も構ってよ！ 仕事と僕どっちが
大事なんだよ？！ ———あ、このフレーズ使える！ じゃなく
てっ！

そう脳内で妄想していたらいつの間にかザツクリと切られてまし
たね……グッバイ☆私のヘアー。

そして完成したその姿。私の蚤ほどの心臓が飛び上がりマシたね
！ 誰よコレ！！

「ふむ。大分マシになったな」

「かっかっかっ……」

「水戸の御老公か？」

「かちよおおお……」

ナニコレなにこれ、目の前の私はステキ女子に仕上がってマス！
（顔以外）

うわーお！ どうやったらこんなサラサラ『風を弄びヘアー』になるんデスカっ！ そうね、こんな髪型は受けのタイプが多いデスねっ！ 攻めはモチロン硬派がいいのだ！ 黒髪短髪う！

ベチッ！

「イッターーーーーーイ！！」

「次行くぞ阿呆」

くっ！ 折角いい波が来てたのに！

またもやデコピンされて、どうやらまたどこかに連れて行かれる。
私は売られた子牛風となって荷馬車（車）に揺られていくんだ。グッバイ☆日常。

そして着いた先は――――。

「が、眼科？」

「保険証持つてるだろ。出せ」

もういいですケドね。逆らった所で敵いませんケドね。今更とやかく言いませんケドね。

「出せ」

「はい……」

着いた先は何故か眼科。一体ワタクシめはここで何をされるのでしょーか。カチョーは眼科の受付を済ませ（そこは私がやってもよくないデスカ？）簡素な長椅子に並んで座った。

———なんデスカ？ この保護者に連れられてきた子供みたいな扱いは！

確かに私は小さい。一五二センチのチビッコだ。カチョーの身長はよく分からないけど私の頭のテッペンがカチョーの大胸筋ちょうど位。私、成人してますからーっ！ してますからーっ！ むやみやたらに大声で自己主張したくなりましたネっ！

何人か先に順番を待っているの、私の番はまだこなそうだ。ぼんやりと待合室にあるテレビを見ていて、「そういえば」とふと思いついた。

「カチョー、あの三つ目の条件ってなんデスカ？」

二つの条件はもう聞いた。あまりの傍若無人っぷりに慄きすぎて三つ目を聞きそびれていたのだ。そりゃー聞くのはおっかない！けれど、心の準備ってーもんがあるでしょが！

「三つ目の、か」

な、なんデスカー！ その口の端でニヤリなオツソロシー笑みは！ ややっ、これは自ら罠に入りマシたかつ！ 巻き戻し、巻き戻しでー！！ ワタシ言わなかった事になりませんかカチョー！

「それは……そうだな、一カ月後に言う」

まさかの放置プレイヤー！

流石ですね、流石Sキャラですねっ！ 私を操るなど朝飯前デス！ くっそー、うまい事躍らされちゃいましたよっ！

一カ月後のメイド苦行が終わるその時に言われるのって、ナンダロ？！

「滝浪さーん、お待たせしました」

私が頭の中で『俺様上司に放置される部下男子』という萌えを展開しようとしたそのタイミングで診察の呼び出しがかかった。

またか！ またこういうタイミングでかつ……浸りたいよおお。メモらせてええ。

火花が見えマスですっ！

診察室へ向かったけれど、何故かカチョーまで付いてきた。

「か、かちよお？」

「いいから」

————いいからって、ナンデスカ？

とにかく二人で診察室に入ると、中には白い衣に身を包んだ美女が待ち構えていた……って、女医さんだけどねっ！

看護師さんに案内されるまま、診察机の横に備え付けられた椅子にちょこんと座る。そこには眼科によくある機材がある。名前なんか知りませんがね。

「あら、久し振りね？」

「ああ」

————お知り合いデシタか！

目の前の女医さんはおおよそ三十台前半。知的美女で、おセレブですね間違いなく。シルバーフレームのオサレ眼鏡がとても絵になります。

「あなた……こんなチンチクリンと付き合ってるの？ それともペット？」

い、い、い、イマドキそんなチンチクリンって言う人いるんだーっ?!　そこに驚いちゃいマシたよ、食いついちゃいマシたよっ!　ああでも後半のペット扱いはその通りと声をあげたい。なんせトリミングされちゃいましたからねっ。

口をパクパクしてたら、カチョーが私の頭をポコンとグーで小突いた。

「俺の事はいいから仕事しろ」

カ、カチョーが『俺』っていいマシたよっ!　俺?　俺?!　俺様キアラが言うとはントばっちり似合いますね俺様ー!

———って!　そうじゃないよ私!　なにそのえと女医さんと何かカチョー、えええ?

「ほら、こっち向きなさい。そしてトロトロしてないで顎乗せなさい速やかに」

んなー!　S女医デスカ!　この方もSデシタか!　くっそ、よってたかってええ。

私は前門の虎、後門の狼という状況の下何かできるはずもなく、黙って眼鏡を外して名前がなんだかよく分からない医療機器に顎を乗せた。

いやいや、それにしてもこのシチュ使えますヨ?　知的イケメン医師が、暗い密室で患者に言葉攻めデスよ。ゆっくりとシルバーフレームを外しながら患者の顎に手をかけ……。

ゴスッ!

「んぎゃっ!」

「顔に出てる、顔に」

カチョーの裏拳が私の頭のテッペンに落ちて来たでありマスよっ
き、キビチー！

右目、左目調べ、何かを書き付けたS女医は「あら」と私の顔を見るなり声をあげた。そして不躰にもほどがあるうぞ！ という視線でじーろじーろと嘗め回した後、黙って様子を見ていたカチョーをからかいだした。

「袴田君、そういう事なんだ？」

「……まあな」

挑戦的に見上げる女医の視線と、挑発的に見下ろすカチョーの視線が……視線がああっ！！

ひ、火花散って見えマスよー！ 誰か、誰かああ！！ この竜虎の戦い、止めてえええ！！

ガクブルしちやいマスよっ！ この間に挟まれている私を誰か助けてギブミー！！

しかし戦いは一瞬で収束をした。S女医がふい、と視線を逸らせたのだ。

「またいつか聞かせて。じゃ、後は視力測って装着を習っておしまいよ」

じゃあね、と机に向かって仕事を始めた。もうこれ以上話す気はなさそうで、机の上を見たままヒラヒラと左手をこちらに向かって振った。

じよ、女医は戦いを放棄した——！！

ホラあるよね、動物で睨み合ってて視線を逸らせたほうが負けと

！ 女医サマ、カチヨ―に負けたのでありマスかつ！
わかりマスよ―！ 私も負けっぱなしデスから―！
全然知らない人だけれど、S選手権で敗北した女医サマに私はほ
のかな同情心が芽生えた。

そうデス……こういう時は『妄想』に浸るがヨロシイ！ 特にB
Lね！ ワタクシめは制服が一番萌えマスので、そんな禁断の関係
がよろしければいくらでも紹介しますデスよ！

ぎゅううううううっ！

「にぎや――！」

「世話になったな」

カチヨ―！ 私の耳はそんなに伸びませんて―！
カチヨ―は女医サマを振り返りもせず診察室を出た。あをを、気
まずい雰囲気よおお。

クラゲから執事へチェレンジ！ のおお！

どうやらカチヨーはワタクシめにソフトコンタクトを着ける為につれて来た様だった。初心者だから一日使い捨てタイプのソフトレンズ。

むおおっ！ なんだこの柔らかい物体は！ まるでクラゲを相手にしているかのようっ！

表だか裏だかよく分からないけれど、それはなんとか取説読めばいいだろう。

「か、かちよお。終わリマシタ……」

慣れない……。目の中にウロコ入れてよく平気だなみんな。おおお、シヨボシヨボするう！

私が装着の説明を受けている間、カチヨーは待合室で待っていた。ヨロヨロと辿りつけば、何故かじいっと私を見る。

———ん？ へ、変なのデスカ？！ ひょっとしてコンタクトの表と裏間違えたかなっ？！（んなこたない）

「似合うぞ」

おおおおお褒めの言葉——！！

まさかの褒め言葉を貰い、蚤の心臓またもやドツキンコでございマスッ！

ちよ、まって下せえ旦那サマ！ オラ褒められるのに慣れてない

んデスよおおお！！

内心の大混乱など分かっているのかいないのか、カチヨーは私の頭をぐりんとひと撫でして受付カウンターへと席を立った。

なんてこったい、どういうことデスかー！ そのまま放置プレイコーーースウウ！

ん……あ！ そうそう、放置プレイと言ったら！

「BARA☆たいむ」のサークルにてそれを重点的に描く方がおるのデスよ！ あの方の書かれる得意なカップリングは教師×生徒モノ！ 息も絶え絶えになるほど攻めるのに、その一線は越えさせない！ 欲しがまるまでは与えませんが、そこを飛び越えてからのが秀逸なのであります！ 攻めの鬼畜っぷりがもう……。

むににににに

「ひごっ（ひどっ）カコー（カチヨー）！ なにのぬぬんねぬか（なにをするんですか）！」

「何を言っているか分からん」

「カコーがいつかるがあー（カチヨーが引っ張るから）！」

カチヨーは私の両頬を左右に引っ張りなすって！ 伸びる、伸びるっ！ てか、カチヨー！ その手そろそろ離してくれませんか？
！ 引っ張るの止めた後、何故ほった擦るんデスかああ！

「次に行くぞ」

ってー！ そこ触れずに次デスかつ！

次に着いたのはデパートメントウ！ キラッキラと輝かしいデス
ねー、デッカイですねー！

デパートの契約する駐車場に止めると思いきや、裏口に回りまし
て……んなっ？！

「お待ちしておりました。袴田様、こちらへ」

「車を頼む」

畏まりました、と後に控えた人が運転交代デスよっ！ なにこの
おセレブ臭！

車から降りたカチョーと私は、執事ちっくな案内人に先導されて
歩き出す。えー、えー、えー！ ここで何するんデスカ、カチョー！
はっ、まさかここで執事プレイですか？！ 主従関係でGOデス
ねっ！ ナルホドそう来ましたか！

「お電話でお伺いした内容は、そちらのお嬢様で？」

そのチラリと横目で失礼にならない程度に見る目線。

あああ、わかります、分かりますよ！

『どんな関係だよお前そしてどこの山奥からタイムスリップして
きたサルなんだ』とおっしゃってますね？！

あら？ なんだろ既視感が……。

「よろしく頼む」

引き渡されたーっ！！
私、何されるんデスカー！
オオッ！！
カチヨーオ

おセレブ&アマゾネスでインパラなワタクシ

ってことで。

ここはデパート最上階。ちょ、ここ、関係者以外立ち入り禁止区域?! いや、それにしてもやけにハデハデでセレブマイスター(?)がご利用しそうな……?」

「ここ、どこなんデスカ……」

両腕をアマゾネス、もとい女性従業員に抱えられて逃げられないよう連行された私は、とっくに戦意など喪失してマス。力なく疑問を口に出せば、右のアマゾネスが答えてくれた。

「VIP専用ルームですよ」

「デパートにある部門の最高峰を集めた特別室です」

左のアマゾネスも答えてくれた。ちなみにこちらは「お面デスカ?」と聞きたくなるほどの完璧メイク、その上営業スマイルが張り付いていた。

おっかねーよー! ママン!

「袴田様、ではこちらでお待ち下さい」

「ああ」

かちよお? 私っ、私は一体っ?!

カチヨーはひと座りするだけでお金取られそうな重厚ソファにゆったりと腰を下ろし、その長いおみ足を組んで私に向かって軽く手を振り目を細めた。

「行ってこい」

カチヨーツ！ 私には、私には「逝ってこい」と聞こえましたよおお！！

再びがっしりと両腕を押さえられ、隣接するドアへと連れて行かマシタ……。

ええ、ええ。とてもその時の様子を事細かに言える勇氣はありませんデス。

相当なHP・MP取られマシタね。
ヒットポイントやジックポイント

——ちよ！ わ！ やめてええええ！

——激安量販店、しかも三年前の服を早く脱いで下さい！

——何故それをおおお！

——あらっ、このブラ糸ほつれてる！

——ごめんなさいー！

しかもデスよ？ しかもデスよ？

カチヨーが隣の部屋ににいるというのに、採寸されてしまいマシタ！

——身長が一五二センチだけど……すごいわ、六十五のDで五十八の八十一？

——声！ 声出てマス！

——お椀型だしキュツと締まってるしプリンとしてるし！

——いいやあ——！

なんて羞恥プレイ！ スリーサイズがダダ漏れデスよっ！ 個人情報保護法どこいった！

そしてあれよあれよと高そうな下着を着せられ（しかも上下お揃いデス！）、ナウなヤングにバカウケ必死でステキ女子ウフフな服を着せられ、お面アマゾネスに化粧の指導を受けた。

しかし、これは難なくクリアー！

だってワタクシ、漫画描いてマスからっ！ ペンだ筆だなんて得意だもんねふふーん！ つまり自分の顔に彩色すればいいんでしょーが！

初心者向け六センチヒールのパンプスを履いてドアを開け、フラフラしながらカチョーのいるソファアーへと歩いていった。

「か、かちよおお」

「……」

半泣きな私にカチョーは黙って立ち上がり、ワタクシめの手を取りソファアーへとエスコートしてくれた。そして……あれ？ あ、あれ？

ななななに？ 手、離して下さいよ！ ちょ、指、ゆびゆび、絡めないでええ！ 逃げられないーいいー！！

カチョーは私の手を握り、指を絡めたままソファアーへ座るので、必然的に私もすぐ隣へと座る事になった。

その距離感もアレだけど、カチョーの目線が私を外れないので非常に困る。

——ライオンに追われるインパラの気持ちがよくワカリマス……。逃げたい度MAX！

カチヨーサマの手は賢デス！

「ではこちらの書面にサインをお願いします」

執事メンが、高級そうなカップに入れたコーヒーを並べ、そしてカチヨーに何らかの紙とペンを渡した。カチヨーがそれにサラサラと書きつけている間、私はやっと視線が外れてくれたのでホッとして、絡められた手とは反対の自由が利く手でコーヒーを一口啜った。

うーん、味は分からないけど、ブルジョアな味だと思えます！
しかし。それにしても。

私をすっぽりと覆い隠すカチヨーのこの手……。手……。大きい
デスネ……。

カチヨーはペンを一旦置いたけれど、「ああ」と何か思い出したかの様に付け加えた。

「全てを十セット。洋服は着まわし出来るようそれぞれ写真にと
ってファイリングしておいてくれ」

「畏まりました。後ほどお届けにあがります」

――へ？

――ほ？

ど、どういう事デスカー!!
流れるような一連の動きを、ただただボンヤリとそのまま流して
いた私には理解が追いつきませんっ! はああっ! こういう時こ
その現実逃避デス!

————『執事は禁断の想いを抱えていた。主人である彼にこの
様な思慕を持つことは許されないだろう。しかも自身は男だ。同性
であるが故越えられない壁がある。主人の女性遍歴はずっとこの目
で見てきているから好みのタイプも熟知している。しかし————
今日の前にいる無防備な主人の寝顔に、とうとう……』

ごりごりごりごり

「あだだだだだだだっ!!」

「帰るぞ」

カ、カチョーッ! グーの関節部分で頭をゴリゴリ抑えないでく
だサイッ! 地味だけど痛みはハンパねえですから!
しししかしカチョー……。

「あ、あのカチョー?」

「なんだ?」

「てってってってっ」

「随分楽しそうな擬音だな」

「じゃなくてー！ 手ー！」

「繋いでいるが、それがどうした」

どうした、それがどうしたデスとおお！ どうしたもこうしたもないデスヨッ！ なんてこったいっ！ カチヨーサマは離す気サラサラなさそうですぜ親分！

もうワタクシめは何もかも言う気分は失せ、カチヨーのおっきな手に繋がれたまま黙って歩きますデス。

しかし私はヒールのある靴など普段全く履きませんから、六センチといえども中ボス級にやっかいデス。ヨタヨタと生まれたての小鹿ばりに歩くと、カチヨーが急に立ち止まり。

そして歩きやすいように気を使ってくれたのか、手を離してくれた———と思ったら！

「しっかり掴まれよ」

私の手を、カチヨーの腕へと掴まされマシタ！

ちよ、まてまて、これはアレだろ、これでは『カポーシルエットウ』だっ！ ラブなカポーが周りみんなに見せ付けるように練り歩く構図だろおお！ 無理無理ムーリムリッ！！

あたしゃー言うなれば専属従業員っすよ？！ ご主人様、お止めくたせええっつ！

「ご主人様か———それも悪くない」

ぎゃあああっ！ うっかり口に出してマシターー！！

カチヨーサマはニヤリと口の端を歪め、暗黒のドS笑顔で私の腕

をガッチリと腕と手で絡めとり、逃げられないようにしながら私を
連行シマシタ……嗚呼……。

カチョー！ それは忘れてええっ！！

裏口に置かれた車に乗る頃には、とっぷりと日が暮れてマシタ…。

そらそーデスヨツ！ アレしてコレしてニャーっとしてたからねっ！（つまり色々）

執事メンはじめ、アマゾネス達や従業員の深々とした礼を後に車を発進させたしたカチョーは、高そうな腕時計をチラ見して軽く溜息を吐いた。

「夕飯、何か食べたいものあるか？」

「へっ？」

カ、カチョーが私に希望を聞くなど初めてーっ！！

何？ 何？ 最後の晚餐系？ 裏に何かあるに違いない！ 怖すぎて言えねえでヤンス！

「たたた食べたい者をワタクシめが選ぶなど、めめめ滅相もございませんデス、はいーい」

「いいから。お前は何か好きなんだ？」

「いえいえいえいえ…」

カチョーはそんな私にイラっとしたのか、握るハンドルを指でト

ントンしながら語りだした。

「……『始まりは、ただの先輩と後輩だった。大学出たての若造の俺に仕事を教えてくれた先輩は、今では上司として俺に仕事の引継ぎ、つまり係長のノウハウを教えてくれて……』」

「ぎゃあああああっっ！　だめええええっ！！」

そ、そりは『BARA☆たいむ』投稿作、私の渾身の作品『課長、深夜に愛を』じゃないですかーっ！　カチヨーめ！　なに覚えてやがるんですくわーっ！っ！

一人語りモノログ的な所をそれこそ平坦な声で語りだしたカチヨー。ちよいちよい！　ちよい待ってよ！　その顔で、その声で、BL語っちゃいマスかつ！

もう一度言おう！　その顔で、その声で、BL語っ……

むにににににっ

「ひよっほ（ちよっと）！　カチヨー（カチヨー）！　はわしにくわはいっ（離してくださいっ）！」

内心大混乱など見透かしているカチヨーサマは、私の片方のほっぺたをみよいーんと伸ばしなすった！

イタイイタイってホントもう痛いって！　だから。

「ほへんははいゝ（ごめんなさいゝ）」

あっさりと降参デス！　もうどうやったって敵いませんマジでトホホーン。

「で？」

「……で？」

「……反対の頬をこちらへ差し出せ」

「ああっ！　ごめんなさいいっ！　ラーメン、ラーメンがいいデスっ！」

そう、何を隠そう（隠さないけど）私はラーメン好きっ子！
一人だって行けちゃうのだ！　女子的に『一人〇〇』ってのは、
冒険に近いのデスよね。一人ファミレスだって、一人カラオケだっ
て出来るけど、まだ一人焼肉と一人居酒屋は未経験デス。経験値を
じわりじわりと溜めて、いつか挑戦してやるのドウワァーッ！

「トンコツ！　トンコツがいいデスッ！　翌日の肌のもっちりプ
リンプリンはありえない程デス！　あああ、あの店のトンコツにき
くらげたっぷり入れて食べたひ……」

「どこだ」

うつとりといつも行く店のトンコツラーメンを思い浮かべていた
ら、カチヨーが「場所を言え」と私の好きなお店へと車を向かわせ
ました……。

——つてえっ！

までまで——い！　よく考えれば、その店むっちゃホームグラ
ンドォー！！

小さい頃から通い慣れた、まさに家族でお世話になっている（現

在進行形）ちっさなラーメン屋！　まままさか親兄弟来てないでしようねっ！

こんな場面見られたら何と言われるか――！　って、いやいや、その前に店のおやつさんに……！

私、どピンチちゃん！　なに自分でこんな危機的状況をメークドラマッ！

「カチョーッ！　やっぱ止めましょ？　別のお店へっ！」

「その心は？」

「そっ……！　え、えと。お店は古くて小さくて庶民的で。カチョーには似合わないというか何というか……。あと、ワタクシめの家族がよく利用する店だからデス……そんな所見られたらあっ！」

「問題ない」

「かちよおおおー！！！」

却下デスカッ！　却下なのデスカッ！！

聞くだけ聞いというて、却下デスカアアアアッ！　なんというクレダマシ戦法！！

半分魂抜けながら、目的地へと運ばれマシタ……。

じよ、情報修正させてくだサイッ!!

「らっしゃい！　って、ええ?!」

「こ、こんばんは……デス」

商店街共同駐車場に車を止め、そこからすぐ近くにあるラーメン屋の年季の入った暖簾をくぐり店内に入れば、おやっさんのダミ声が出迎えた。

「……まさかとは思うが、ユリちゃんかい？」

「あー、はい」

おやっさんが驚くのも無理はない。私の今の姿は、『春風と共にアナタを惑わす魔法プリンセス☆』ばりな格好をしてるんデス。髪はしょーとぼぶにして毛先をちょちよいと遊ばせ風味、眼鏡っ子からコンタクトウ！　に変えて、服といえばそれこそ『ちよっと！

今月の給料全てブツ込みましたわっ！』っていう程ブルジョア臭プンッポンですからねっ！　（私の給料では絶対タリマセン）

一ついえるのは、中身がそれに伴わないとか似合わないというか、例えていうなら新入学一年生のランドセルでしょーかあっ！

ああ……しかし更にあえて言うならば。今の私は『コスプレ』デスッ！　原稿を人質(?)に取られてる哀れな子ー。いわばこれは『制服』なのですううう！

「ユリちゃん、見間違えたなあ！　おいおい、コレのお陰かい？」

そういつておやっさんは親指をグツと突き出して見せた。いやー
ー！ー！！　ちがうってーええ！！

両手を挙げ反論しかけた私の腕をぐいんと強制的に下ろし、そのまま、まるで腰を抱くようにしたカチヨ一殿は実に爽やかな笑顔をおやっさんに向けた。

「ええ、まあ」

まあって！　ちよっと！！　ちよちよちよいと！！　誤解っ、誤解させますってマジでっ！

そのまま奥のテールブルへと連行された私。何か言おうとすれば、上から降るいてつく波動がワタクシめの開けた口を、強制的に閉じさせるのデス……トホホー。

絶対、ぜーったい、誤解は解かねばならんのデスよっ！　私のマ一イフアーミリーに伝わったら……。うをおおっ、あなおそろしやっ！！

油が染み付いた丸椅子に腰掛け、同じく油でベタベタするプラケースに覆われたメニュー表をカチヨ一に渡す。ああ、なんということでしょう！　カチヨ一はこんな店でも何となく絵になりますねっ！　銀行マンの様にも見えますが、黒いオーラを書き足したら間違はなく『立ち退きを迫る人』デス！

ああ、そのシチュもいいデスなっ！　おやっさんがビジュアル残念。しかし！　しかしデスヨ？　これをおやっさんの息子で当てはめればああ……！！

『「いい加減、手打ちにしましょうよ」　「だめだ！　ここは母さ

んの思い出が詰まった大事な店なんだ!」「そんな大事な店なのに、経営の方は?」「!」「仕方ないですね……体で分からせましょう」「な、何を!」……」

スコンッ!

「んぎゃっ!」

「現世に帰って来い」

カチョオオオッ! メニュー表の角は痛いデスっ!!

「俺はお前と同じでいい」

「へっ? ああ、はいー、ワッカリマシター! おやっさん! いつもの二人前!」

「あいよっ!」

厨房の方で忙しく立ち回るおやっさん。たまにチラ見するのは止めて欲しいデス。そんな視線を知らん振りで決め込もうとテーブル傍の本棚から週間漫画雑誌を取り出した。

———ちっ! おやっさん! 二週前のじゃないデスカ!

もうとつくに読んでしまった内容なので諦めて席に戻る。カチョーはと見れば、携帯を取り出してメールを読んでいる。……あれ、器用に片眉上げて。不快そうなその内容はナンデシヨネー?

黄金のトリオ de ございマスッ!!

「ユリちゃんお待たせっ！ ほら、彼氏もたんと食べよっ！」

ダンダンダンッとテーブルに並べるおやつさん。いーえ、彼氏じゃありませんカラっ！！そこは全力で否定し……たいデス……でも。

力を込めておやつさんに言いたい所ですが、カチョーの『黙ってろ』視線がこえええええっ！

「い、イタダキマス……」

私が今この時点で出来る事は、『彼氏』単語をスルーするのみでアリマス……。手を合わせぺこりとしてから割り箸をパチーンと割って早速大好物のトンコツラーメンへと箸を伸ばした。

ちよい固めに茹でた真っ直ぐな細麺、濃厚なスープ、軽く炙ったチャーシュー！どれも最高っ！

まずは一口！ちゅるっと啜れば鼻から抜けるトンコツの味が堪らなく美味しい。おやつさん、今日もいい仕事してマスねっ！

ウットリと残り香を堪能してたら、カチョーと目が合った。

……なんデスカ？ちよっと。なんで私をじっと見てるんデスカ???

「美味そうに食べるな」

「ええ！ 私、食べるの大好きデスからっ！」

「……しかしこの量をいつも？」

「ハイ。え、なにか？」

いつものセットは。

きくらげトンコツラーメン、餃子、白ご飯。

完璧じゃないデスカッ！ 素晴らしいトライアングルを描いてマスよっ！ まずはラーメンを食し、餃子＋白ご飯。白ご飯が残ったらラーメンスープに入れてスープごとペロリと頂くのデスッ！！

「ほらっ、カチョーも冷めない内に早く！」

「あ、ああ」

そしてカチョードノも割り箸を割って、ラーメンを啜る。

「うまいな」

「っでしょおお！！ おやっさんと店はアレですが、とても美味しいのデスッ！」

自分が好きな味を褒められた事でテンション上がりマシタッ！
つい大声でカチョーに返事したら、おやっさんに怒られちゃいマシタ……。 「アレってなんだ！」 ひいっ！

あっという間に平らげた私とカチョー。——ってえええっ！
これまたご馳走して下さりまして何だかもう餌付けされてるんじゃないデスカ私！ と思いつつ、あっさりとお言葉に甘えた。今月

は画材や参考資料（大きな声で言えませんがBL関係デス！）買い漁った為に財布がとても寂しいのだ。

「おっと、ユリちゃんのデート記念で金はいらねえよ」

「しかし」

会計で、カチョーが代金を支払う段でおよっさんが満面の笑みで「いいってことよ」と断る。だめだそれじゃおよっさーんっ！

「駄目デス！ 受け取って下さいおよっさん！」

「ユリちゃん？」

「またお金取ってくれないんじゃないかと、私たち次に来にくくなっちゃうじゃないデスカあっ！」

「……そうかい。分かった、じゃあ貰うな？」

「そうしてください。大体そういうことばかりしてるから利益でないんデスヨ！ 息子さんがいつもガミガミ言ってるの、聞こえてマスからっ！！」

すまんすまんと、およっさんは正規料金を受け取り、「また来てくれよな、彼氏と！」と最後まで誤解したまま笑顔で送り出してくれた。

あ、しまった！ 口止めするの忘れてマシタ！ マーイファアミリイイイーツ！！ ノーウー！

しかしすでに駐車場に止めた車に乗り込んだ後デシタ。いまからここを脱出する言い訳が見つかりません……。こ、ここに脱出ボタ

ンのなもの、ついてませんか？？

「帰るぞ」

そういう自宅方面へと車を走らせるカチョー。

ん？ なにやら機嫌がよろしいデスネ？ イジワルな口角の上がり方でなく、こう……なんちゅーか自然な笑み……笑み？！

笑ってるのデスカー！ カチョーオオ！ 逆に、逆に怖いデスッ
！！

とても上機嫌の理由を聞く気になれなくて、ビクビクしたままカチョー様の自宅へと戻りマシタ。

妄想センサー、恐るべしデスッ！

白亜の城（私にはそう見えマス、はい）に着き、『やれやれ疲れ
たよホント今日一日で色々詰め込み過ぎだってー！』という疲労感
がどっしりと全身にキてますねっ！

ぎこちなく履きなれないパンプスを脱ぎ、玄関のたたきの端っこ
へと寄せる。……ってさ、おっかしーな。

フツーのお宅ってもうちよい砂とか埃とか端っこに溜まりマセン
カ???

「何をしている、早く入れ」

「はっ、はひーっ！」

玄関から真っ直ぐ伸びる廊下。途中には二階に続く階段があり、
私が初めてこの家に来たときはすぐに二階に上がった為、他の部屋
は見えないのデス。

カチョーが開けたドアから続いて入ると――――。

「か、かちよお……?」

「何だ」

「あの……」

あまりの光景に絶句デスヨッ！

「あのお……腐海の森はいずこ……デスカ……」

イメージはあの『ナウい鹿』に現れる森のような、それともニュースなどでたまに取り上げられる「ゴミ屋敷」的な。そんなイメージを持ってマシタ……ッ！

「カチョーッ！ 私は何の家事をすればっっ！！」

そう、この部屋は『何もない』。テレビ？ ノー！ カーペット？ ノー！ 生活臭？ ノーオオオオッ！！

なーんにーもなーなーいっ！
辛うじてあるのはカーテンとソファとリビングテーブル。って、
おいおいデスヨッ！ まあ待て。ちよつと待て。一回深呼吸だよワ
タシ。一回目を閉じてみればいいじゃない？ 見間違いかもしれない
なくってよっ？！

スーーーーーッ……ハーーーーーッ。よし！

「……変わりません」

「何やってるんだ」

「いえ、ファンタジーはやっぱり二次元なんだなと自覚した所デ
ス」

「意味が分かん」

「それでワタクシめは一体何をするんデスカ？ こんなステキハ
ウスに掃除が必要だとは思えませんかデスけど」

カチヨ―は本当にここに生息していたのか？　とは思えないほどキレイ。モデルハウスの方がよっぽど住み心地がよさそうデス。そんな疑問満載な私の手に、ポンと財布が置かれた。

「明日からすることを言う。家具や生活用具などをこれで揃えてくれ」

「……へ？」

「それから掃除、洗濯、料理を任せる」

「……なっ？」

「私は明日の日曜日、どうしてもやらねばならない仕事が入った。朝はいつも食べないから問題ないが、夕飯を楽しみにしている」

なんてこったああ！　カチヨ―ーッ！！

いち、いちから揃えろとおおっ？！

ああでもそれはまず置いておこう。私にはどうしても確認しなければならぬことがある。

「かちよお？」

「なんだ」

「あの、ワタクシはメイド服着たほうがよろしいデスカ？」

バチコーン！

「ギャッ！」

カチョーデコピン、クリティカルヒット！！

「阿呆！ 普通でいい、普通で！」

そう言って風呂に行くと言い、サッサと服を取りに二階へ上がってしまった。

うわーん！ ほんの出来心なのにつ！

家事といえばメイド。メイドと言ったらコスプレ。よし、着よう！ とやる気スイッチの為に持って来たのにMOTTAINDスよ全く！

いやほらあの……鬼畜主人に新人のオトコノコがメイド服着せられてとか、萌えませんか？ その衣装の着心地とかフリル具合を絵にするため、参考用に買ったのがあったのでつい……。

『「ご、ご主人様っ！ 僕は男です！」 「知っているが何か問題でも？」 「大アリですって！」 「ほう……その割には」 「わわっ、ダ、ダメですって！」 ……』

パカーーーン！

「カチョーーオオッ！ スリッパは反則デスーッッ！！」

いつの間にかリビングへ戻ってきたカチョーに、スリッパで叩かれました……。あったんだ、スリッパ。——ってかなんで妄想してるタイミングが分かるかなっ？！ カチョーの妄想センサーはかなり感度がいいデスネッ！

「午前中は荷物が届く。風呂は後で適當に入れ」

「りょーかいしまシタ……」

私はノロノロと二階のあてがわれた部屋に行き、今日書き損ねた妄想シチュをメモろうと手帳を取り出したまでは覚えてマスが、あまりに疲れてそのまま夢の世界へと旅立ちマシタ……。

現実逃避させてくだサイッ!!

「……んー、今なんじい……?」

布団の中からいつも頭上にある目覚まし時計を手探りで探した。
ん? ん? アリマセンネ……。

……。

———つてええっ!!

ばっさーつと掛け布団を蹴り上げ飛び起きた私は……。

「え、まさか異世界?」

とりあえず異世界トリップありがちなテンプレを呟いてみた。まさに見覚えのない部屋———つて、あれ?

ぐるーりと見渡せば、見覚えのあるスーツケースが。ああ……カ
チョーの城か、ここ。

……。

———つてええっ!!!! (二度目)

ササガに目が覚めマシタよっ!! なんてこったあっ! ワタシ
昨日の夜そのまま寝ちゃったによおおおっ! 手帳にネタを書こう

と思ったところまでは覚えていてる。ええ、覚えてイマスよ？ でも、それは床の上での行き倒れ。

今いる、今座っているこの場所は、お・ふ・と・ん。
ナンデデシヨーカ。

あと一つ。ワタシ……なんで……なんで……。

「ばーーーーーじゃーーーーーまーーーーーああん!!」

肌触りの恐ろしく良い、上質の生地で作られたパジャマジャマですっ!! ちょ、何で私コレ着てるんでしょうかっ!!

暫し呆然と己を見下ろしていたら、ガチャリとドアが開いた。

「朝から五月蠅い」

「かちよおおおっ!! ナン、ナン、ナン……」

「食べたいのか？」

「って、ちっがーーーーう! 食べ物じゃないデスヨッ!! あの
っ、私の今現在の状況は一体ナンでしょうか……」

「……寝て起きた所だな」

「見たままーーーーっ!!」

ぎゃふんとひっくり返りそうになりマシタよっ! そ、そんな力
チヨーめ! Tシャツにジャージズボン履いて少し生えたおヒゲら
しきモノをなぞるんじゃありませんッ!! ずるいぜコンチクショ
ー! あまりに無防備でもし私がメンズだったら襲ってる所デスッ
! 『寝起きのお前は、弄りがいがあるな』 「よせよ」 「ふん、ま

んざらでもない顔だな」「構わないさ、お前なら」……』　ふんっ、
参ったか！　……じゃなくてえっ！！

「私どうして布団の中で？」

「床で寝てたから移しておいた」

「私どうしてパジャマ着てるんデスカ？」

「さあな」

ソコ答えてー！ー！ー！ー！っ！！

出社の時間までまだあと二時間ばかりある早起きさん。私はカ
チョーに何度も聞こうと試みたのデスが、華麗にスルーされて未だ
に事の真相を知りえませんデス。

——限りなく「着せられた」可能性が高いデス……。いやっ
！　しかしっ！　でもデスヨ؟؟　私が記憶ないだけで寝ぼけなが
ら何らかの方法で着たという可能性if^{イフ}コースも無きにしもアラ
ズ！　うん、よし、じゃあその方向で！　その方向でーえええ！

……頼むからお願い。

洗面所で身支度を整え、全く使い慣れそうにないクラゲちゃんを
目に入れて（というか、これも外してアリマシタ……謎だ）リビ
ングへと足を踏み入れれば、コーヒーの香りがふわんと漂っていマス。

「カチョー？」

「飲むか？」

他の家電やら色々見当たらないくせに、ご立派なコーヒーメーカーはあるんデスねっ！

やたらいい香りがするんで私も貰いマスです。あー、（多分）美味しい。

「カチョー、朝ごはん食べないんデスカ？」

「朝は食欲がない」

「私はガッツリ派なんですケドね……」

なんかないかなーとキッチン（台所だけどオサレなんでキッチンと発音してみまシタ！）徘徊の許可を頂き、漁ってみました……なんでこんな何も無いんでショーカーッ！！

家電に至っては、コーヒーメーカーと冷蔵庫しかないって、ありえねえええええ！！！！ 前妻よ、どうしたんだ！

冷蔵庫を開けたものの、ドアポケットに何も入っていないせいかわかん！と勢いよく開いてビビり、冷凍庫もカラッケツ。野菜庫は……見るまでもないでショーネ。

その冷蔵庫の中にはビールの缶、ワインの瓶が二段に詰められ、あと一番下には何故か小さなペットボトルが。

よく見たら――――米？

「ああ、それは何かで貰った米だ」

「何かって、どんな時デスカっ！！」

貰うタイミングが分かりかねマスッ！ ともあれ食料ゲット。え

ーと、調理器具……にゃんですと?! 片手鍋一個ですと?!
しろ冗談だと思いたい。 む

それでも蓋付きでよかった。米が炊けるぜヒャッホウ!

しかしここで大問題がひとつ。

——私、家庭科の実習以来料理したことありません……。

上書きが出来ましえん（泣）

「これは？」

「塩むすびデス」

ま、手に塩付けておにぎりにしただけなんですケド。

いやー……なんとかなるもんデスネ。『ご飯 片手鍋 炊き方』
って携帯から検索う！ そんなこんなか片手鍋で炊き上げたご飯。
辛うじてあった食卓塩（しかし砂糖は無いというイッツミラクル☆）
で出来上がりマシタ！

二合分の塩むすび。ううむ、真っ白に光り輝いてオリマス。白い
だけなんですケドねっ。ああ、昨日ガッツリ食べたはずの胃袋が自
己主張を始めマシタよっ！

「では、イタダキマス！」

リビングテーブルの前で正座して、ぱちんと手を合わせてご挨拶。
さして食べようかと四個あるうちの一つを手に取り、あーんと口を
開けたら。

「うまそうだな」

「かちよおーおおっ！」

手に持った塩むすびを、私の手ごと掴んでカチョー殿が自らの口へとお運びなすったあっ！　いーやーあああっ！　私のおむすびー
ーいい！！

あっという間に一個分食べ終わり、最後に私の指についたご飯粒まで丁寧にかチョーはお口でキレイになすったあっ！

むおおおおおっ！！　その口、おーくーちいいいっ！　ありえねーっ！！

「じゃあ行って来る」

私の頭をわしっと一回掴んで、かチョーは出勤なされマシタ。

私の口は、酸素不足の金魚の様にアワアワと動くのみで、全く抗議の一つも言えなかったデス……。

くっ、かチョーめえ！　なんつーオツソロシーことしやがりますかっ！

私は只今、妄想の限りをメモすべく机に向かってガシガシと書き連ねておりマス。昨日からの妄想回数は約二十。私の妄想力舐めんなデスヨッ！

そしてさっきのかチョーの唇の感触を忘れないうちに記そうと……
クチビル……。

『僕の人差し指や親指についた米粒を、彼は手首を押さえたまま一粒ずつその少し薄い唇で食んでいく。少し開いたその唇が皮膚の上を滑り、そこかしこに散らばる小さな米粒を捕まえる。その度に熱い吐息が僕の肌にかかり僕は指に心臓ができたのかと思うほど熱く高まった。――しかし、熱くなったのはここだけではない。激しく自己主張を始めた自らを、気付かれないよう……』

「だー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
っ
っ
っ！」

駄目デスっ！ 『私』を『僕』に変換してみました、どうにも
こうにも私の指に触れるカチョーの唇、そして私をじっと見るその
視線が全くもって離れませンツ！！ あああ、こんなじゃ腐女子
の風上にも置けませんね。石が飛んで来マスよっ！！

やめたやめたっ!!

よし、後で書き直そう!

とにかく今日やることは……荷物を受け取りの、買い揃えのデスね？ ……って、私のセンスでカチヨ一本気で大丈夫だと思っているんでシヨ一カ。よしここは一つ腐女トモにヘルプしよう！

私にはナント『インテリアコーディネーター』を生業とするリアル友達がいる。中学校以来のツレなんですけどね、まあなんだ、見た目と肩書きに騙されんなよオマエラ！　ってこの子の為にある言葉だと思ひマス。

今日はアイツ休みで一日恋愛シミュレーションゲームを完徹でやると聞いていたので早速呼び出しましょう！ カモン！

妄想インテリア発注☆

十五分とかからずやって来た友達。ええ、実はここ近くにあるマシオンに寂しい一人暮らししてやがるんデス。あっ、寂しくなかった！むしろ賑やかなんデス。あちらこちらに二次元モロ出しのポスターが貼り付けてあり、室内もそのグッズやら何やらで溢れていますからねっ！かなりな充実ってもんデス。

『私に何かあったら、親より先にアンタ呼ぶようにしてもらおうわっ！ 危険物処理班よろしく！』と頼まれているんデス。ええ、それは海よりも深い友情で固く結ばれておりマス。色々お互い爆弾抱えてマスからねっ！！

『ちょこれいとn i g h t』というプレミアが付いたBL同人誌と引き換えデシタが（かなりの痛手デスが、背に腹は変えられまセンツ！）、イメージを伝え、採寸をして帰っていきました。仕事の鬼な彼女ならば手配は滞りなく進み、今日明日中には全て揃う事でしょう。持つべきものは友ですなっ！

———ちなみにテーマとは……。

『「課長、お邪魔します」「ああ、その辺でゆっくりしてくれ」「あ、俺手伝いますよ。こう見えても料理が趣味なんです」「そうか？ 悪いな」「それにしても課長、趣味がいいインテリアですね。こう……課長のクールなイメージにぴったりというか」「ははっ、クールか」「俺にはそう見えます。なんでも冷静にこなす、頼りがいのある上司で」「……そうだな、普段はそうかもしれん」「課長？」「しかし今、とても堪えきれない想いを抱えているんだ」「待って下さい。その先は……俺に言わせて下さい」』

って感じで！

『クールさの中に隠された情熱のインテリア』

キ・マ・リ☆

さ、そんなこんなで執事が来て、山のような衣類を置いて受け取りサインも致しまして。うをお……この量ナンナンド！ ワタシサイズのピッタリな靴や下着や洋服アレコレ……。

ってか、ずっと考えない様にしてきマシタが、このお代金でどうなのさ。

私、新卒で初任給ちよつとアレなんですけど……。流石にカチヨ―御存知でしょーケド。これも聞かねばなりませんね。まあとにかく色々やらなければ！ 急げええっ！

「あ、カチヨ―。お帰りなさい」

「……」

「ご飯にしマスか？ お風呂にしマスか？ それとも……」

「……風呂。それからその服替えて来い」

言うなり、ネクタイ緩めながらカチヨ―は風呂場へ直行しマシタ。なるほどなるほど、外出先から帰ったら風呂直行するタイプなんデスネッ！

しかしなんでしょう！ 折角の機会なんで駄目だと言われマシタが……メイド服着てご主人様のお迎えをしてみたかったんデス。あの意味夢が叶ったというか！

しかしこのメイド服は、『嫌がる年若い男の子にわざと着させて羞恥を煽る』というシーンの為に購入したのであり、チンチクリンな私が（根に持ってマス！）着た所でどうという事はない。まあ目的達成したから着替えるとしマスか。

夕食は実家の母親に聞いて作りマシタ。

「おかーちゃん！ ご飯の作り方教えてーっ！」

「アンタ何やぶからぼうに！ それに合宿じゃ無かったの？」

「う……え、えーと。そう！ 食事は交代制で作るの！」

「そう？ まあいいわ。で、何を作りたいわけ？」

「えーとね——」

——そして出来上がったのがコチラ。

「親子丼、ワカメと豆腐の味噌汁、ワカメとキュウリの酢の物、か」

「すみません、私が食べたい物選んだらこうなりマシタ」

ワカメ率多いデスっ！ しかしワタシが包丁握るのなんて約四年振り（調理実習以来）ですカラ、逆に自分を褒めたいデスネッ！

「誰かの為に料理作るなんて初めてなので……」

味とか大丈夫デスカ？ と聞こうとしたら、あらら、なんデスカ？ 目元緩んでマスヨ？？

「初めてか。美味いぞ」

「ふおっ、ありがとうございますマッス！」

褒められて、なんだかめっちゃ嬉しくて、「ひゃっほう！」と叫びたくなりましたが、ここが住宅街という事を思い出してグッと我慢しました。ワタシが作った物を食べてくれて、褒められるって、嬉しい事この上ないデス。

————よし、メモろう！

このシチュを、次回『BARA☆たいむ』に投稿するときに使おうと、心に固く誓いましたデス。

観察記録開始デスッ！

「おはようございマスッ！」

「ああ、おはよう」

本日は出勤日でございマス。ご飯作りは三回目！ まあ何とかなるもんデスね。

夜疲れすぎて寝るのが早い↓もれなく早起き↓色々家事が出来る。くっ……創作活動がちっとも出来ていませんッ！！ 日課のBL本『このシーンがツボ！』を拾い読みするとか、思いついたシチュを書き連ねたりとか、原稿描いたりとか……。

むおおおおおっ！！

早くこの一ヶ月が終わる事を願いマスねっ！

いや、しかーしっ！ 人質取られていますが、ワタクシもタダでは転びませんッ！ ふふふ……カチョーのね、カチョーのあんなんやこんなんを充分観察させてイタダクのデスヨ……ククク。

ネタよ、カモーーンッ！！

朝食はご飯と昨日多めに作っておいた味噌汁の残り、塩もみキュウリ、さんまのミリン干し。焼くだけなので簡単デス。

実家の母親が作る朝食を参考に作りマシタ。料理初心者でも何とかなるもんデスねっ！

「この味噌汁美味いな」

「ダシ入り味噌ですケド、仕上げにイワシ粉入れるとそれっぽくなるんですよ。実家はいつもそうしてマス」

「……そうか」

カチョー、そのふわんと目元緩めるの反則デスヨ？ ゆっくりと味噌汁の入ったお椀を置き、どこか遠くを見る目をしたカチョー。ううむ、一体何を考えているのでショーカ？

はっ！ ひよっとしたら前妻っ？ 前妻の事でも思い出しましたかっ？！ 逃げられたとの噂の……ああそうデスネそうデスネ、絶対これ地雷デスよ？！ 危うきに近寄らず、デースッ！！ 早く食べ終えて逃げまショーッ！

「そうだ、いい忘れていたが……」

ふと何か思い出したように、カチョーが私にひたと目を据えて話しかける。

……っ！！ いけない、これはいけないデスヨ？！ 警戒音が最大に鳴り響いてマス……エマージエンシー非常事態発生！エマージエンシー非常事態発生！ 直ちに脱出セヨ！！

私は行儀悪いと知ってはいるけど、味噌汁の中に半分ほど食べたご飯を入れてかつ込んだ。お茶を淹れてカチョーの前にターーンと音を立てて置き、「ではっ！」と消えようと思ったらガツチリ腕を取られてしまいマシタ。……素早い動きデスネ、カチョー。脱出不可能がびょん。

「今日の服は八番で」

「……ナンデスト？」

「じゃあ先に行く。戸締りしていけよ」

カチヨーは言うなりお茶をゴクリと飲み干して、『デキる男はコレ!』なビジネスバッグを持って出て行ってしまった。

八番……八番……はっ! マサカあのステキ衣装ファイルに入っている、コーディネート番号八の事でしょっか!!

いつそのファイル調べたよカチヨー! そしてなぜその番号なんデスカ、カチヨーツ!!

自分の今の姿は、『いつものスーツ』姿にエプロンを装備。もちろんブリブリレースの付いたね! これもまたワタシコレクションの一つでアリマス。

今のこの姿……気に食わないのデスカ、カチヨー殿。

後片付けを終え、二階の部屋のクローゼットを開ける。

何度開けても慣れませんね……。デパートメントウ☆で購入したステキ女子服達がずらりと並んでおりマス。目がチカチカいたしますデスヨツ!

衣装ファイルを開きいくつもの写真が並ぶ中、八と書かれたページを開く。そこには『キラリ☆風がそよぐ春色コーデ』と書かれた付箋が付いた、薄ピンクのニットにふんわりしたタックスカート、それに白のスプリングコートだった。ベージュのストッキングは少し柄が入ったもの必須! とまで注釈付きで……。

バッグもパンプスも指定アリで、とんだけ丁寧なんだよ! とビツクリしちやいマスネ!

書いたのはあのアマゾネスかつ! オマエとんだけファンシーな世界に行ってるんだ! 戻ってこーいっ! と言ってみたい気もしたが、お前はとうなんだと聞かれれば上手く答える自信がないデス……。基本同じニオイを感じる文章なのデス……。

それに。私、センス無いのは自覚あるんデスヨ。ええホントにねっ。だからこの機会に色々学ばせていただこうかと思ひマス！　タダでは転びませんッ！！　ええ、呪文のように繰り返しますよっ！

出勤まで時間がまだ少しある。いいデスね、会社近いと家を出る時間もゆつくりで。折角あるこの時間、妄想タイムに当てまつショウ！　イエーイ！！

とりあえず、忘れないうちに書かねばならぬ観察記録でも。

メモ……カチヨーはボクサーパンツ派だった。ちっ。俺様Sキャラならばそれなりに下着だって攻撃的に行つて欲しいデスヨッ！　真っ黒or真っ赤なブーメラパンツに変えてやりたい所デスが、それやったら確実に死亡フラグ立つのデス。悔しいデスが、勇気ある撤退をするのデス。

それから、ワタクシめの人生初（調理実習除く）料理に文句を言わなかった、むしろ褒められた！　ナントイウコトデショウ！　多分カチヨーの味覚はおかしいに違いない。あのような料理でおセレブカチヨーは満足なされるのでしょうか。嫌な予感としては、今年の給料ヤバイのではないかというリアル心配のみデスね。

あとは、会社から帰つてすぐにお風呂へ入る、と。これはまあ本人の趣味だから構いませんが。

おっとお！　時間デスッ！！

玄関前の全身鏡で一応身だしなみをチェック。……うん、アマゾンズ達が用意した服はピッタリ体に合っています。合っていないのは私の性格ですな！　コスプレなら演じられマスが、リアル実寸大。まんま私。

フルモデルチェンジしたこの姿。……会社に行くのがちよつと躊躇われマス……。

会社でオモチャにされマシたっ！

「わっ！ ユリ子ちゃん……だよね？ どしたの？？」

ぎゃっ！ さすがマメ橋先輩っスね！ 一番最初に見つかったY
O！

私はコッソリと社内に入り、マイ机に座ってとにかく小さく小さくしていたが、マメさが売りのマメ橋、もとい高橋先輩に声をかけられてしまった。

「ごごごごめんなさいっ！ ほんの出来心でっ！」

「それじゃ悪い事したみたいじゃん！ 違うよ、すっげー可愛くなってる！ あ、百合ー、こっち来て」

そういつて、マメ橋先輩は給湯室から出てくる百合先輩を呼んだ。
うをお……百合先輩だああっ！

百合先輩は、私と同じ名前だけど外見真逆の超スレンダー美人な二十七歳！ マメ橋先輩と同期なのデス！ 綺麗系の顔でタイトスカートがめっちゃ似合う……そうデスね、例えていうならば『女教師モノ』が似合うお方です。とても本人には言えませんがねっ！

社内では百合先輩、ユリ子ちゃんと呼び分けられていますデス。

——BL好きなくせに名前がユリとは皮肉なもんデスネ。ふふ……リアル腐女子仲間には良くからかわれたもんデス。

「ユリ子ちゃん！ かわいい！」

綺麗なおねーさまの百合先輩はワタクシめをぎゅうつと抱き締め
て頬ずりなされマス……。ちょ、ね、まって、まってえおねーたま
！ 私そんな趣味なくてもどうにかなるぞうコンチクショーツ！
うわああ、いいカホリがします……。むっはー！ これでは近づ
くだけで欲情モノですヨツ！ 気をつけないはれマメ橋先輩！

「何なに？！ やっだユリ子ちゃん可愛すぎっ！」

百合先輩からぐいんと引き剥がされて横から抱き付いてきたのは
……

「ぎよわっっ！ みどりしえんぱいっ！！ ひーっ！！」

「どーしたのよ？ 春だからって変わりすぎ！」

みどり先輩は二十三歳の一個上。しかしとてもシツカリとしたオ
ヒトなのデス。って、うをを……。痛いデスよ？ 痛いデスよ？
体育会系な学生時代を過ごしたらしい力で、ぎゅうぎゅうに抱き
締められて苦しいデスッ！

「みどりちゃん、ユリ子ちゃんが辛そうよ？ わあ、本当に変わ
ったのね、とっても可愛い！」

私の死角から聞こえてきたこの声は……。っ！ するりとみどり先
輩の手を外しフワリと抱きかかえられたのは美穂先輩っ！ 短大卒
で入社三年目だけどもみどり先輩と同じ二十三歳。くおーっ！ やら
かいっ！！ きゅうつと抱かれるこの感触……。女子、やらかい……。
ウツトリ。

——あれ、私ってば実はその名の通りなのデスか?!
デスか?! ねえ今めっちゃモテモテでっすーうう!

はわわ、こ、これはまさにハーレム! 萌えデス! 超萌えデス
ッ!!! これは使えマスよおお!!

『小柄な少年が男だらけの会社でイケナイ関係を……! クールで知的な先輩、さわやかスポーツマンな先輩、守ってあげたい先輩に囲まれ、それぞれにラブイベントが発生』

うわー！ー！ 堪らんっ! これだけで萌え死ねるっ!!

「——おいお前達始業時間だぞ、仕事にかかれ」

私達が輪になってキャアキャアやっている後から声が掛かったのは。

ぎ、ぎゃあああっ! かちよおおっ!!

——って、あれ??

カチヨーは私をスルーして、普段通りの『カチヨー』な顔して自分の机に向かう。

あれ……あれ? いつもの、デコピンとかゴリゴリ攻撃は無いのデスね……。

カチヨーの声でみんなそれぞれ仕事に向かい、日常が戻った。

カチヨーの妄想センサーが反応しなかった事に、なんだか私は物足りなさを感じてマス。

ツンがデレなのか！

家に帰ってお帰りなさいをすれば、そこはいつものカチョーだった。

ただしブリブリエプロンは着けておけと謎の言葉を残し、お風呂に直行。むうう、謎のオヒトです。

では風呂に入っている間に、料理の仕上げでもいたしまひよ。

作る時間が割とあったので、ネット検索して作りマシタ。バンザイ文明の利器！

今夜はご飯、ジャガイモと玉葱の味噌汁、小松菜と油揚げの煮びたし、大根と手羽先の煮物、冷やしトマト。オサレな料理は分かりませんので、私が食べたい料理を作るだけデス。実家のママンが作る料理は、家を離れると食べなくなるモノです。

「……まだ食べてなかったのか？ 待たなくてもいいんだぞ」

風呂から上がったカチョー。それにあわせてご飯や味噌汁をついで、一緒に席についてイタダキマスをした。そしたらカチョーは箸を持ちながら私に聞いてきた。

「いえ、私が一人で食べるのが嫌なだけデスから。実家ではいつもみんな揃って『イタダキマス』だから、なんとなく私もそういうクセがついたというか……気にしないで下サイ」

それに、作る手間も洗う手間も一回で済みますからねっ！　そう
言って大根に箸を伸ばした。うむ、我ながら上手くできたんじゃない
デスかね？　煮込む時間もあつたしおっけーおっけー！

もぐもぐと口を動かしながらカチョーに大根を勧めようと思った
ら。カチョーは私を見つめ……見つめてマシタツツ！！　んぎょー
っ！

駄目デスッ！　いいからっ、早くっ、食べる方に集中してー
ええっ！

その視線、あれデスよー凶器デスよーっ！　「目でコロス」な、
超ビームが出てマスッ！　とてもこう、なんか居心地悪くなるんだ
いっ！

――はっ！　まさかこれって……ツンデレ要素来ちゃいマシ
タかつ？！　うわー、来た！　やばい、来た！！

会社での冷たい態度もあれはきつとツンの部分に違いないデスっ
！　くうっ、やるなあカチョー！　この私にリアル体験させてくれ
るとはああ！　『ツンデレ』の極意、しかと受け止めましたぜいっ！

ぎゅむーーっ。

「ふがーーっ！」

「現世に戻れ」

「はがっ！　はがっ！　（鼻！　鼻！）」

カチョーが私のちっさな鼻をぎゅいっと摘むので、フガフガ言い
ながら私はカチョーの腕をタップ二回であっさりギブの意思表示を
した。

「もおおっ！ この鼻が可愛いと言ってくれる人がいるのに、ひん曲がったらどうしてくれるんデスかっ！」

きつと赤くなっているだろう鼻を擦っていると、途端冷気が漂った。

「誰に言われた？」

「ふおっ？」

「誰に？」

うわあ、そこ気になるんデスかっ?! 何でデスかっ!! どうでもいい所に喰い付くんデスねっ! しかし答えねば冷凍マグロにされちゃいそうデスッ!

「誰につて、ハハに……」

「そうか」

あの冷気は即座に氷解し、またぬるい空気が漂う。いーいーいーやーああ、怖いよママーッ!!

その変わりっぷりを私がガクブルしてる隙に、全て綺麗に食べ終えたカチヨーは「ご馳走様。美味かったぞ」と私の頭をわしわし一掴みして自室へ行ってしまった。

かちよおおお、実践編はワタシいらないデス……。神経持ちませんがな!

腐子、飲み会に行きマース！

それからのはつつがなく(?) 約一週間が過ぎた。

慣れない家事もソコソコこなせるようになり、ツンデレカチョーにも少しだけ慣れた。いや、慣れないデスネッ！ デレが一番慣れないっ！ 帰宅後のカチョーサマは、いつも何か上機嫌で超怖いデスッ！

本日は金曜日。朝食を食べながらカチョーにそういえば、と切り出した。

「あ、カチョー。今夜は私飲み会なので……」

「何？」

ひーっ！ きょわいいいひーっ！！

この冷気でダイヤモンドダストが出来ちゃうによーっ！ イヤイヤでもここは何としても踏み留まらなければなりません！ 頑張れワタシ！

「せ、先月からの約束がありましたっ！ 大事なデスッ！」

——言っ飛ばせば合コンだが、きっとその単語言ったら多分ワタシ滅される様な気配を感じマス。その上、今まで参加してきましたが、ネタ用観察記録つける為のも絶対言えませぬっ！！ 大体、私が声掛けられることなど「お代わりいる？」「会費集め

るよー」位しかないので、フツーにお夕飯を食べに行く並デスから。超安心飲み会！　じつくりとBL資料集めるのに超有効タイムなのデス。

「会社の人も一緒に終電には間に合いますし、お夕飯も温めるだけにしておきますのでっ！」

終電は地方駅なので日を跨ぐ事はまずあり得ない。そこで皆とバイバイして、カチョーの家は駅から十五分程度、徒歩帰宅となりマス。歩いて帰れるってス・テ・キ☆実家だと駅から千五百円ほど掛かりマシタからねっ！

「……分かった。ただし」

「ただし？」

「店の名前を教えろ。あとは店を出る時に電話をすること」

「了解デス！　カチョー！」

ビシッと敬礼し、食後の茶を淹れた。

いつものようにカチョーとは時間差で会社に着きました。いえ、カチョーはとにかく早く行くんデスよね。色々事前処理あるらしくて。スンマセン、新入社員の分際でギリ出社デス。

「ユリ子ちゃん、今夜大丈夫？」

「ハイッ！　じえんじえんおつけデス！　マメ橋先輩、ちなみに他に誰が行くんデスカ？」

「んーと……手帳見るからちよつと待って？」

『合コンの神』と言っていたのはみどり先輩だったか。色んな人脈があるらしく、そして自分自身も企画するのが好きだという事で独身者集めての合コンを良く開催する。

百合先輩と付き合うようになってから回数は減ったらしいけど、面倒見のいいマメ橋先輩は恋愛を求める人達に場を提供してくれるのだ。流石マメ橋とアダ名されるだけあってマメデスネ……。

ワタシはそれこそネタの為と言っちゃーなんデスが、マメ橋先輩の揃える男性陣は『超』が付くほど粒揃いのイケメン達で……それはそれは垂涎モノですよっ！！　むっふー、妄想が暴走してしまいます……！！

スーツ男子……うおお！　さらにプラスしてその細身のシルバーフレイム、いっちゃう？！　どうわあぁっ！　ちょ、まって、ネクタイ軽く緩めちゃうイベント発生でございマスか？！　つまり、オツケーですかっ！！

『人数合わせに借り出された俺たち。このメンバーには言っていないが、こいつは俺の物だ。人当たりがいいから女と話が弾んでいるようだが、これは……俺にわざと嫉妬させる為の演技に違いない。その手に乗るものかと気にしない振りをしていた俺の視界の隅で。あいつはネクタイを軽く捻りながら緩めた……今夜は覚悟しておけ……そのサインだと気付いた俺は……』

んぎょー！　たまりまへんっ！！　このスーツ男子しかも眼鏡付きというのは実の所女子に大人気！　ちなみに細身でクールな、が

枕詞になりマスけどねっ！ B L本というのは腐女子の萌えが詰まっためくるめく愛の世界なのですっ！！

———って、やっぱりカチョーのツツコミありません……。いのデスかね、暴走行くとこまでいっちゃいますヨ？？ ま、自分でちょっとストップかけておきましょう。ふー、落ち着け落ち着け冷静にっ！

「……さん、かな？ あれ、聞いてた？」

「うをおっ！ アワワすみませんっ！！」

「高橋、ちょっと」

妄想ガツツリしてて、自ら静止しようとしたら全く聞いてませんデシタ！ 慌てていたら、マメ橋先輩がカチョーに呼ばれてしまい、結局ワタシは誰が参加するのか良く分かりませんデシタ。

……暫くカチョーと部屋の片隅で小さな声で話し合っていたマメ橋先輩。およよよ？？ みるみる顔が青くなって……。ちよ、なに、何しちゃったんデスか先輩いいー！！

仕事でかなりヤバいことしでかしちゃったのでしょーかつ！！

口元に手を当てて、顔色の戻らないまま私のそばに来たマメ橋先輩は、軽く「はー……」と溜息を吐いた。

う、うん……何か分からないけれどとりあえず「頑張って下サイ」といったら変な顔されちゃいまシタ。

ハンティング女子おっかねえ!

メンバー、我社からは私とマメ橋先輩だけデシタ。

って、マメ橋先輩は幹事だし、百合おねーたまという美人彼女いるから人数に含まれてなかったりしちゃうんだなっ!

ビルを同じくする会社の女性四人と、私。年の頃は似たり寄ったりで、何度かそういえば会った事があります。ワタクシめはいつもご飯に夢中だし、コレといって誰も注意を向けないし、印象薄いのも頷けますね。大体私が目的とするのはネタですからーっ!

しかし、会った途端色々詮索されマシタよ……。そらメタモルフォーゼ的な姿になってマシタからねっ! 私でも多分きつと恐らくビククリして聞いちゃうYO!

髪切ったら「失恋?」なんてそんな生易しい質問なんてされまセンッ!

「わっ! 誰かと思ったわ」

「滝浪さん、どうしちゃったの?!」

「え? 特殊メイク??」

「実は双子の姉妹だったとか?」

「し、しちゅれいな!」

あわわ、動揺して囁んじやいマシタッ! チビツ子の私がプンプン怒っても「はいはい」と軽くあしらわれる。コードモ扱いせんでいただこう! あたしゃ立派なとうえんていーつーうう!

抗議しようと息を整えていたら合コン相手の男性陣も到着したよ
うで、女性達の意識もアツサリとそちらへ向かいますて……きよわ
あああっ！　ハンターがいるっ！　肉☆食☆獣！！　おっかねええ
ええX！

そりゃーマメ橋先輩の連れてくる相手というのは本当に優良すぎ
て、この合コンに参加できるのが女子達の一種のステータスにもな
っているのだ。

優良相手を連れてくる、つまり自分も優良物件だと言われてるよ
うなものだからねっ！

しかしそのギラついた狩人の目は止めた方がいいと思います
……。マイナス判定です！　どん引かれますぜ皆の衆！！

駅近くの居酒屋に入り、それぞれ五対五で向かい合って座る。マ
メ橋先輩はいわゆるお誕生席に座り、私はその斜向かいに通された。
うーん、ワタクシとしたらマメ橋先輩のすぐ傍は視線が集まりやす
いから

避けたかったし、反対側のすみっちょで料理食べながらメモリたい
んデスけどね。

マメ橋先輩がすみっちょに座る私の所に後から座ったから、今更
移動しにくいデス。

「滝浪……ユリ子ちゃんだったよね？　ユリ子ちゃんは大学どこ
だった？」

「あー、○○大デス」

「一人暮らし？」

「実家に住んでマス（たった今は期間限定で某所にある城に住んでマス）」

「休みの日は何してるの？」

「好きな作家さんの本を買いに行ったり読んだりしてマス（コミケに行ったり、BL本買い漁って読み耽ってマスッ！）」

流石に分別あるオットナーな私なので、ぼかしながらも答えてますが……こりゃ一体ナンナノダ？！　今まで一度も経験した事のない質問の嵐。うをおおお、ご飯、ご飯食べさせてええっ！　妄想を、妄想させて！　ドップリ浸りたいし、ネタを頂戴……っ！！　ウォンチューウウ！！

その上、同席している肉食獣かのじよたちの視線が痛いデスっ！　勘弁して下せえお代官様っ！　おら別にラブい相手を見つける為に参加したじやないんデスよー！！

しかし聞かれて黙るのも態度悪いし、半泣きで答えていたら更に喰い付かれました。ちよ、なんでええ！

「あーそうだ、曾根さんて最近ジムに通ってるんだっけ？　あの駅傍にできた新しいビルの」

「へえ！　俺もあそこ気になってたんだ。どんな様子？」

店の人に呼ばれて席を外していたマメ橋先輩が私と反対に座る彼女に話を振ると、その話題に皆がわっと話に花が咲いてやっと解放されたワタクシ。ああ疲れマシタ……。

妄想の一つも出来やしないよ！

最近の私のネタ帳はちっとも進まないのでゴザイマス。とほほー

?

私に静かな妄想タイムを下せえなー！

お店の人のご好意で、結局終電間近まで同じ店で過ごしマシタ。五対五の男女はそれぞれ座席を入れ替わったり、連絡先の交換などを楽しく過ごしたみたいデス。……みたい、っていうのは。

「ユリ子ちゃんて彼氏いないんだし、この後……」

「えっと」

「ああ、ちょっと持ち帰りの仕事あるんだよねユリ子ちゃん！新人だからしょうがないけど、早く仕事覚えられるといいね！」

「メルアド教えてよー」

「メルアド、ですか？」

「やだな、俺んの先聞いてよ。あ、皆そろそろオーダーストップだけど、注文ある？」

私に聞かれる質問はことごとくマメ橋先輩が絶妙のタイミングで遮り、別の話題へと振っていく。なんというかお見事デス。あまり不審に思われない程度に会話に参加することもあり、この辺が本当に『マメ』なんだなと体験中なのデス！！　つか、話よりも私はただ黙って妄想して萌えていたかったんデス。

話しかけられるなど想定外なによだ。

一つ位は考えたいな……よしっ、店員で妄想スタート！！

『いつも合コンといって僕の働く店に来る彼。僕はカウンター越しに、店内の座敷で賑わうグループを盗み見る。ムードメーカーなのか、話題を均等に振って全ての人に出番を作るその手腕はとても見事だ。一見すると陽気な彼だけど……僕は知っている。トイレな

どで離席したときに見せる一瞬の影。そのギャップに僕はハートを打ち抜かれてしまったのだ。素の彼を知る僕は、もっと深く彼を知りたくなった。そう、このカウンターを越えて……』

……イマイチですかね。ううむ、ちよつとノリきらないデス。おっかしーなー！

そんなこんなでとうとう終電の時間になり、一応約束通りにカチヨーに一本電話を入れておきマシタ。店を出て、皆で駅に向かいマス。何故か歩くときもマメ橋先輩は私の傍を歩き、私へと向かう会話を攫っていき……。

「ねえユリ子ちゃんは実家どこなの？ 一緒に帰ろ？」

「あ、えっと」

「ユリ子ちゃんちは俺の彼女んちの近くだからついでに送る約束なんだ。おーい皆気をつけて帰ってね！」

最後まで私マトモに合コン相手と喋ってませんネ。いや、喋らないのはいつもの事ですケド、聞かれて答えないというのは初めての事なので、一体これはどういう事なんでしょうかってね！ なんなんだよ聞くなよご飯とネタだけギブミーですよっ！！

改札で電車組とサヨナラして、タクシー乗る人たちもサヨナラしました。今私の傍にるのはマメ橋先輩デス。

「ユリ子ちゃんお疲れ様ー。さ、帰ろっか」

「へ？ あの、そういえば先輩って電車組じゃないんデスカ？？」

「あー……、うん、うん。いつもはそうだけどねー」

歯切れが悪く答え、こめかみをポリポリと掻くマメ橋先輩。一体なんでデスカね？ その先輩の携帯から着信音が響いた。

「あ、ちよっと待ってて」

携帯電話の通話ボタンを押して応答した先輩は、なんか言うなら『大変恐縮してます！』といった様子デス。相手は一体誰ですかね？？ はっ！ 百合おねーたまデスカっ？！ ラブリー彼氏の心配デスカ？！ ゴメンナサイおねーたま！ 私マメ橋先輩よりも百合おねーたまの方が好きすぎるのでご心配無用っすよ！ 大丈夫、ワタクシこっから走って帰りますので、先輩とラブラブ週末お過ごし下さいなっ！

「じゃ！ お休みなさいーっ！！」

小声で電話中のマメ橋先輩に伝え、駅の出口へと走るのですっ！！

「って、ええええっ！ まって、まってユリ子ちゃんっ！！」

遠くでマメ橋先輩の声が聞こえましたが、無問題デス！ 早く百合おねーたまの元に行ってさしあげてー！ という気持ちで、小走りをダッシュへと切り替えマシタっ！

そう、私はお酒が入ると走りたくなるのデスッ！！

駅南の大通りの交差点を左へと渡り週末の夜を楽しむ人たちの喧騒から離れ、段々と街灯も間隔が広がってきました。んをー、所詮地方駅！ ちよっと駅離れるとこれだよ！ 暗いよっ！！

大きなビルが立ち並ぶゾーンを抜け、住宅街の雰囲気が出てきマ

シタね。はー……ちよつと歩こうかな。テンションアゲアゲで走ったので流石に疲れましたヨ！

ハアハア息が上がってますけど、ふと思う。逆に私の方が不審者と間違われなかつた！ 大丈夫かいもしかしたらこの付近にいるお嬢様たち！ 安心したまえ私は単なる息を切らした二次元をこよなく愛する女子デスよーっ！

「止まれ」

「……っひ！」

ぎゃー……！ でた……！ 不審者露出狂なんかそんなもうそれ的な、いやそんなでいいよみたいな……！！！！

「落ち着け、こっちを見ろ」

「はわああ……そ、そんな！ コート開いて下のムスコがコンニチハ！ ありや違った、いま夜ですからコンバンハってしないで下さいよおおお！ って、……か、かちよお？」

建物の壁に背を預け、声をかけてきたのはカチヨーでした！ 暗がりになっていたので全く気付きませんデシタよっ！！

ゆっくりと私に近づき「ほら帰るぞ」と手を差し出した。その意味が全く分からずに立っていたら、痺れを切らしたのか強引に私の手を繋ぎ、歩き出した。

「ちよ、ま、カ！ え？！（ちよつと、まってよ、カチヨー！ えええ？！）」

カチョーの手はとても大きく、私の手などすっぽり隠してしまうほど。ぎゅうっと握られたその強さと、私の手よりほんの少しの冷たい体温が直に伝わってキマス。

引っ張られるようにしてカチョーに付いて歩き、その後姿からは全く表情を窺い知る事は出来ませんが……ひよっとしたら。いや、ほんとにひよっとしたらデスけども。勘違いだったら超恥ずかしいのでとてもじゃないけど聞けません。

——私を、迎えに来てくれたのでしょーか……。

手と手を繋いでただいまデスッ！

手を繋いだまま、カチョーの城へと戻りマス。

夜風がひんやりと頬を撫でるのに、一向に体温が下がらないのはナゼでしょうか。

特に、特に、あの、カチョーと繋がっている手から熱が発生してマス。ふ、ふおおー、変デスッ！ 変デスッ！ 何デスカーっ？！ 調子狂いますヨ全くもって！

ただし……このシチュは使えマスよ？？

『告白してからもう三ヶ月。——俺たちは同棲を始めた。世の中には様々な愛の形はあるが、男同士というものはどうにも風当たりが強い。俺は在宅の仕事が出来るが、彼は世間に出ている。男と同棲といわれて仕事がしにくくなるのは彼だから、それなりの建前は必要だった。』

今夜、彼は取引先との接待で遅くなると言っていた。しかし彼は……非常に怖がりだったりする。出会ってから暫くして、暗がりや恐怖映画を徹底的に避けているのを知った。背も高くスポーツマン体型の見た目に反し、怯えてこちらを頼る姿に……たまらなく可愛く感じたんだ。

駅からの夜道、きつと半泣きで出来るだけ明るい道を歩いている事だろう。俺は椅子にかけてある上着をさつと羽織り、玄関が出る。迎えに行くためだ……』

——いやいや、この場合コッチですかね？

『僕は接待で遅くなると彼に伝えてある。もう寝ている頃だろうか。それとも起きて待っていてくれているだろうか。』

小走りになるのは彼に早く会いたいから。いや、それもあるけれど……僕はオバケが怖いんだ。怖くて怖くて泣きそうだ！ 暗い影から「わっ」と出てこられたら、間違いなく悲鳴を上げて腰を抜かす自信がある。風で揺れる垣根に怯える自分を心の片隅では鼻でフンと笑い飛ばしているけれど、その片隅にいる心だけではどうこうできるもんじゃない。ぎゅうつとカバンを胸に抱えて足を速めると……。「お帰り」「うぎゃあっ!」「バカ、俺だよ」「えっ」「心配で……迎えに来た」「有難う。ほんというと、迎えに来てくれるんじゃないかってどこかで期待してた」「俺はお前のためなら……」

ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅつ……!!

「ほぎよおおおうっ!!」

「浸るな飛ばすな戻れ阿呆」

「ほっへたー! ほっへたー!」

片頬を引っ張られ痛い痛いむっちゃいたいーいいい!

いつの間にか玄関目の前で、うをう! まさかのワープ? いや、妄想に夢中だったのデスネ私ってば! だからカチョーが私のほっぺた摘みあげたんデスネ! わーお痛いつてのまぢで!

カチョーが玄関の鍵を開けて中に入り、私はそれに続きマシテ。

「ただいまー」

と帰宅の挨拶をしたら、カチョーがぎよつとした顔で私を振り向いた！

「ぬわっ！ なんデスカカチョー！」

「いや……挨拶するんだな、と思って」

「あれ？ しないもんデスカ？ 帰ってきたら言うもんだと思ってマシタ。この二十二年間実家でずっと言ってたからクセなんデスよ。そうですか、そうですね、ここはカチョーのおうちデス！ 改めまして、おじゃまし……」

「————いや、ただいまでいい」

ぷいと横を向いて素っ気無く言い残し、先に玄関を上がって行ってしまいマシタ。

わわっ、今、すごい見ちゃったよおーん！

ほんの少し、ほんの少しデスヨ？ ほっぺたがうっすら赤く染まっていたような？！ うわー！ レア！ 超レアもの！！ 心のカメラバッチリ記録保存！！

会社では先輩方に『鬼畜軍曹』とコッソリ言われているあのカチョーがあああっ！ 一体、何キツカケでそんなデレが出たのですか？！ 私全く分かりません！！

まさか！　んなことーないだろ！　的な。

水を一杯飲もうと台所でコップに水を注ぐ。いやー、やっぱり水はウマシですな！

タンツとコップを流しに置くと、そこでふと目に入るものが。

あれー？　……タバコ？

換気扇の下に見覚えの無い灰皿が。それにはこんもりと吸殻が鎮座なされておりマス！　あら、あらら？　これってカチヨーですかね？　いやでもカチヨーってタバコ吸っている所、私見たことありませんケド。

「カチヨー、タバコ吸われるんデスカ？」

台所に来て冷蔵庫を開けるカチヨーに聞くと、口をへの字に曲げた。

「……やめたのをやめた」

えーと。タバコをやめたのを、やめたってことデスカね？

カチヨーは冷えた缶ビールを一本取り出すと、その場でカシユツと音を立ててプルタブを開け、ぐいとあおる。

むほ、いいデスネその喉仏。私に喉仏ちよーだい。

はっ！　喉仏フェチのサークル仲間に、是非この『ゴクリ』と飲むたび動く喉仏を差し上げたい！　いやでも流石にカチヨーのをもぎたてフレッシュ☆するわけにもいかぬデスし。

ここは一つ心の中でスケッチをば……。

じ〜。

じ〜。

じ〜〜〜…… コカツ!!

「ぎょうわっ!」

「目が怖い」

カチョーの缶ビール攻撃がオデコにヒット! 冷たいし角で痛い
ってええー!

しかしそれよりも喉仏ガン見してたから目が乾いてシパシパする
う! うわー、目が、目があーっ! 痛がりながらもこのセリフ
が使えたのは満足デスっ!

ってえ、そうじゃなくて!

ダッシュで洗面所に飛び込んで、使い捨てのコンタクトレンズを
むにょんむにょんと両目から摘んで取り出した。

使い捨てソフトコンタクトレンズを使い始めて丁度一週間。大分
慣れましたが、どうにも乾きやすいデスネ。萌え対象をじっくり観
察するときなど何度カピカピしたことが! そりゃ瞬きすればいい
だけの話ですケドねーっ! ついガン見しちゃうのデスヨ!

おおっ、そうだ丁度いいから風呂入りますかっ! 居酒屋という
のはどうにもこうにも髪の毛や服にタバコの臭いがついてイカンの
デス! 洗面所にはマイパジャマとか入れている袋があるので、イ
チイチ二階へ取りに行かずにすむのだ。

サーモンピンクのアンサンブルに白いふわふわのフレアスカート
を、ぽぽーいと脱ぎ捨ててさあ風呂場へれっつらごー! と、扉へ
手を伸ばしたとき――――。

ガラッ。

洗面所と廊下を隔てる引き戸が開いた。

「……ああ、風呂か。ならいい」

ガラガラ、ドン。

……。

……ちよちよちよいと、ちよいとカチョー！ー！ー！
まってー、私、はだかんぼうー！ー！うう！ ノー！ー！ウウ！
今ね、今ね、バッチリ見られマシタよー！ だって、私が固まっ
てる最初に目が合って、カチョーの視線が上から下へ行き、再び上
に戻して扉を閉めましたカラ！ バッチリ見ましたよこのワタクシ
の穢れなき眼でええーっ！ なんてこったーい！！
まなこ

「カチョー！ 何するんデスカーッ！」

風呂場にぴよい入り、ドアの隙間から顔を出して猛烈抗議デス！

「洗面所に駆け込んだから、どうしたかと思っただけだ」

「一言、せめて一言ー！ーおおっ！」

「しいて言えば色気が足りない」

「ちっがーう！！」

まさかのご注意デスヨ！ 謝罪じゃなくて、足りない所を指摘し
てくるとはなんたること！！

しかし今ここを出て行ったところで扉一枚（風呂場除く）隔てた

だけの頼りない現状は、どう考えても駄目デス不利デス無力デス。
引き戸には鍵がついてないので、ガラッと開けられてしまえばオシ
マイですっ！

わーお、こういったドッキリハプニングってベタだと思
ってましたが、あるんですね本当に！　まさか自分に発生するとは思
いませんでシタ！

色々言いたい所でしたが、私がアレコレ考えている間にカチョー
の足音が遠ざかっていきました……。くっ、後で見てろよっ！！

髪をガシガシ洗って、メイク落として、体を洗って。

湯船にとぷんっと体を沈めてやっどひとごちデス。はー、きん
もちええ〜な〜。

……。

あ。

不意に先ほどの手を繋いで帰ったのを思い出しまシタ。

二つ妄想したシチュエーション。どちらも「心配して迎えに来る」
というもの。だってカチョーが帰り道にいたんだもん。いたから……。

———ほら帰るぞ———

帰るぞ……。？　という事は、やっぱり？　まさかもしかしてひよ
っとして？

手を繋がれた時も、ちよっぴりそう思ったんですけど。カチョー
って私の為にわざわざ迎えに来てくれたのでしょーか。夜道を心
配してくれたのでしょーか。

いやいや、まてまて。単に思い違いかもシレマセヌ！　早計は禁

物デス！　きっと何かのついでに外に出て、たまたまワタクシめを見かけただけでもシレマセヌ！

でも、あの繋いだ手があまりにも。

あまりにも、心地良くて。

ぐるぐると考えすぎて、すっかりのぼせてしまいマシタ……。

まさか！ んなこたーないだろ！ 的な。（後書き）

お待たせしました！ そしてお知らせデス！

只今「妄想部」活動中。コラボ作品が出来上がりました。

私がある意味全て絡んでますけどw

カチョーと腐子が出演(?) しているのは「動物捕獲大作戦」！

1〜5まであるコラボ作品、順番に読んでいくのがオススメですw
こちらからどうぞ

←

<http://mypage.syosetu.com/144526/>

寂しい朝はイモムシでっ！

朝。

起きて一階に降りたらそこにカチョーは居ませんデシタ。

あれ？ 何かあったのでしょーか。今日は土曜日。どこか外出するとは特に聞いておりません。ああつ、でも昨晚ワタシはのぼせてしまい、ぼやんぼやんしたまま「おやすみなさーい」と寝ちゃったので、聞かなかったただけなのかもしれないが……。

しんと静まり返った部屋は、妙に居心地が悪いというか、居ると思っていた人がいないと、こうも……広く寂しく感じるものでしょーか。

はっ！ こ、これはもしかして、『カチョーが元妻に出て行かれた気分』というやつを今まさに味わっているのではないかあつ！ ソウデスネ、ソウデスネ、カチョーはこんな気分ですつと過ごしていたのデスネーー！！ なんてカワイソウなのでしょーーーかつ！ ってえ、まてまて、まてーーっ！ ワタシ別に妻じゃねえし！ 単なる人質盾ゲンコーに取られた僕しもべなだけデスカラーーッ！ッ！

ふと湧いた変な気持ちがむず痒くて、払拭するためリビングをイモムシのごとく、いやいやイモムシ転がりませんがともかくゴロゴロ転がってアッチにぽーいと追い払いマシヨooooooooウウウ！ うおりやああつ！！

往復すること二十回。流石に息があがります。ふう、でもなんだ

かスツキリー！

とりあえず茶でも飲むかと台所に行ったら、そこに書置きが。なにになに？ 本日休日出勤デスカ、なるほどなるほど。そら朝いないわけデスネ。つーか朝起きれなくてスンマセンでした……。

はー、相変わらず達筆デスネ！ 賢そうに見えますよ！ カチヨー充分賢いだろうになに達筆オポジションまであるんデスカねっ！ ああやだやだ能力チートって！ あ、でもバツ一で三十一歳だった。アハハ。私からしたら九つ上などオヂサマですーん。

おおっ、でも若手を可愛がる年の差系のBLならば萌えマスねっ！ 新人バイトをアレコレ教えるうちに……？

妄想を展開しようとしたら、携帯のメール着信音がテンテレテ〜ンと聞こえてきた。うむ、これは乙ゲー、つまり『乙女の為のゲームで、逆ハーレムになる展開が訪れるイケメンだらけの恋愛シミュレーションゲーム』その着メロなのデスッ！ この着メロのカテゴリは萌え友^{もえとも}。つまり私が所属するサークル『BARA☆たいむ』関連なのデスよー。

ぱかーんと携帯を開けてみればそこに表示されたのは、ぬわんと……リーダー！ きゃああーっ怖いいいっ！

い、いやいや。締め切りは確か来月アタマだったデスヨ？！ そして仕上がってマスから、こんな怯えるこたあないのデスっ！！ 恐る恐るメールフォルダを開けると。

『パラメイターりりい♪様、お疲れ様ー。ゲンコーどう？ 順調

？ ちよつと頼みたいことがあるから時間いいときに電話下さい。

ばーい 愁堂^{しゅうどう} 芙妃都^{ふひと}』

ちよつと頼みたい事……むっちゃ怪しいい！ イヤな予感ビンですよっ！ この人の頼みって今まで良かったこと一つもあ

りましえんっ!!

しかし返信しないと、より恐ろしい目に合いますので……。あ、そうだ！ 見た目ビューリホで、普段病院受付業務をしている彼女ならば、今私が置かれている状況を相談できるかもデス！

早速電話をしたら午後駅に用事があるとか言っていましたので、会う約束を致しマシター！ こうしちゃられない、洗濯などなど家事をこなして出発デス！

寂しい朝はイモムシでっ！ (後書き)

☆妄想部☆

http://mypage.syosetu.com/1444526/

「5」は腐子もカチヨーもでてますよ♪

バラメイターりりい♪、リーダーから指令デス！

「……おっどろいた！　りりいたんはいつからそんなメタモルつたの？」

私を見たリーダーの第一声は、ぽかんと開いた口から発せられました。

メタモルった、つまり変身したって仲間内の暗号デス！（暗号という程でもアリマセンが）

本日の私の服は、これまたご丁寧にあのメモに書かれていた番号『三』、『新緑がヤキモチ☆アナタにゾッコン』……という、若干年齢層が知れるコメント付きのコーディネートです。なんだよヤキモチするのか新緑が！　ウツカリ突っ込んでしまいマシタが、毎度こんなコメントに揺さぶられるのは何となく面白くないデス。華麗にスルーするのが、社会人っつーものデスッ！

「いやあこれがまた深いワケがありまして……あっ、そうだ！　電話で聞きそびれちゃったんですケド、頼みたい事ってなんですか？」

ゴニョゴニョ誤魔化しつつ、先にそちらを言ってもらいましょう！　何か気になって仕方ないデスよ。

駅近くのファミレス。ケーキとドリンクバーのセットを頼み、コーヒーを取りに行って席に着く。サークルメンバーとの打ち合わせにもよく使うこのファミレスなので、勝手知ったるともいえマスね。一口ズズっとコーヒーを啜れば――ん？　まずいデスネ……。

うーん、まあいいか。

顔を顰めて飲む私に向かい、リーダーは話を切り出した。

「あのね、実は原稿の締め切りを早めたいのよ」

「ブブーッ！」

「わっ！ 汚いっ！！」

死角からのパンチに私は口含んだコーヒーを噴出しちゃいまし
たよっ！！ えええっ、ちょ、いま、それ言う？ 待って、ちょっ
と！ うえー！！

「ななななんでー！ なんで早まるんデスカーッ！」

「端的に言えば印刷所の都合、かな。表紙カラーの中身オフセッ
ト印刷で頼んでただけど、どうも大手サークルがねじ込んできた
みたいなのよ。それによって、弱小私たちがはじき出されたって
感じね。でも早ければ充分間に合うし、どうかなと思ったんだけど
……」

あわわ……あわわわ……！！

無理ですよ、無理ー！ リーダーーアアッ！

ワタシってば遅筆だから、とつてもとつても前から始めて、よう
やく完成したんですものっ！ アレをもう一度書けと言われたって
無理ですし、手っ取り早い方法もあります……。……。

「う……ううっ……リーダー……うわああんっ！」

半べそかきながら、原稿は出来上がっている事、しかしそれを上

「私の見立てでは俺様ドSかと……」

にやり。

リーダーの口角が、それはそれは見事に上がりましたよっ！ ギャー！ 怖いーいいいい！！

「それはそれは……。ねえりりいたん？ その締め切りなんだけど、それなりにツテはあるから別の印刷所に回すという手もあるのよ。りりいたんの原稿返却待ってあげてもいいわ。それには条件があるわ」

ひーひーひー！ ここにも来たよ条件！ なんだよこういうことだよこっちゃだよ！

一人内心ガクブルしていると、リーダーの手が私の手をそつと握った。

「思いつきり観察記録つけて、私に頂戴」

「か、観察記録……」

じ、実はもう付けてますけどね！

「私、その課長に興味あるわ！ たまに指令もするからヨロシクね、りりいたん！」

目をキラッキラしながら私の手をぎゅうつと掴むリーダー。あああ！ そうデシタ……！！ リーダーの好みは「俺様系」、書く漫画もま・さ・に・そのまま俺様がめくるめく愛の世界を築くのデスッ！ カチョー、どんぴしゃじゃないでショーカット！！ ぎゃ

ああああっ!!

———こうして、私は前門の虎後門の狼状態でミッションに励む事になったのデス……はああっ。

バラメイターりりい♪、リーダーから指令デス！（後書き）

☆妄想部☆

http://mypage.syosetu.com/1444526/

「5」は腐子もカチヨーもでてますよ♪

隠密行動デス！

「お帰りなさいませご主人さま」

「……どうした」

どうしたもこうしたも。いえね、リーダーの指令はまず『三つ指突いてお出迎え！ 亭主関白な夫を迎える新婚妻初級編』ですので、フリフリエプロンも着けて玄関で正座してお帰りなさい！ のご挨拶デス！

カチヨーは玄関のドアを閉めることすら忘れたように私を見てましたが、そんな事は気にせず次のテンプレをば……。

「えーとなんでしたっけ？ あ、そうそう！ 『お食事になさいますか？ お風呂になさいますか？それとも、ワ・タ……』」

「風呂」

途中で遮り、サッサと玄関上がりダンダンと足音立てながら風呂場にカチヨーは直行っ！！

えー、ええー！ 最後まで言わせてくだサイー！っ！！って、まあいつも会社帰りには先に風呂なんで織り込み済みではありましたが。

エプロンからメモ帳を取り出すワタシ。ここには指令と共に、カチヨーの行動を書き込むスペースがあります！ カチヨーは最後まで

で聞かずに風呂場に行った、とメモメモ。んでは次……食事の用意
ー。今夜は豚の冷しゃぶと、ナスとジャコとししとうの煮物、牛蒡
と人参の金平デス。出来立てじゃなくても大丈夫なので……それは
何故か！ 何故かつちゅうとーう！！

――ノゾキ指令。

キヤー！ 何てことをー！ー！ー！ー！ー！ー！をををつ！！！
 いやいやいやいやっ！ そりゃー私もね、初めてこの指令を見た
 ときには思わず二度見シマシタよっ！！ しかしデス。しかーしっ
 ！ 一つ屋根の下、かっちよいー男性と期間限定の同居生活。ある
 意味ね、チャーン☆なわけデスヨッ！ 私ってば……生身の男性
 はよく知りませんカラー！ カラー！ カラー！（エコー）

決して威張れる事ではありませんが、彼氏いない歴二十二年でB
L描くのはつまりそういう場面を上手い事想像できないのデスよね
！ しかもおお！ 腐女子な先輩たちが進めてくださる『バッチリ
見えてますよ！』的な雑誌やビデオ類は……きよ、きよわいつ！
きよわいよーおっかさーん！！ 三次元はより一層イケナイ世界デ
スー……ウウツ！！

一瞬だけ見ちゃいましたが、目を回して正視できませんデシタ……。
あうう。

そんな感じで、ワタクシの描くBLっちゅーのはアレ無しの朝チ
ユンレベル。ま、まあそれでも私は充分満足はしてイマスがねっ！

しかし……カチヨーのなら見てみたい。うん、カチヨーのなら『アリ』デスっ！

どうしてそう思えるのかは全くワカリマセンが、清水センパイでもなく、マメ橋センパイでもなく、カチヨーなら。

抜き足差し足忍び足……。

シャワーの音が聞こえるこちら洗面所の前。洗面所前デース。
ふふん、奴^{やつ}さんは何の疑いもなく体を洗ってらっしゃる！ 私は
正統派覗きとして、音も立てずに引き戸をスススッと開けた。うむ、
練習したかいがあるってもんデスね！

風呂場の扉はうっすらシルエットがわかる程度のくもりタイプの
樹脂パネル。そして下部には換気口がついておりまして（チェック
済みデス！）そこから覗いてみようと思ひむわっす！！

両膝付いて、顔を床にこすり付けるようにして換気口に視線を合
わせようとしたその時――――。

「祈りの時間にしては場所がおかしいな？」

「で、でた――――っ！！」

僅かに扉が開き、カチョーが顔だけをこちらに出した。いやもう
出たって言うっちゃいマシタが、私はカチョーがいるのわかって来
たんだから出たーって言うのはおかしいじゃないかあーっ！ とい
う自己ツツコミは即座にシマシタがっ！

ってか！ まてまて、 ややや、ヤバイ！ ヤバイデスヨー！！
私ってば視線を上に向けてカチョーの顔に合わせたから、下に戻
しづらいデスううう！！ だって、だって、くもりタイプだから：

…絶対ヤバシ！！

うむ、ここは一つ腹を括って！

「カチョー！」

「なんだ」

ごくり、と一度喉を鳴らす。ビチャビチャに濡れたままのカチヨ
ーの髪が、なんとも淫靡な雰囲気醸し出してより一層ハアハアも
のデスよっ！！ よし、言うぞ！

「裸見せて下サイ！」

「いいぞ」

ほらやっぱり駄目デスよね、スグ断るとおも……ってえええ！！
チヨチヨチヨイ待ってー待ってー！！ おっけーなのデスカーッ
！！

脳内大パニックなワタシ。あわあわしている内に扉が開き……。

「ぎゃー……！！ やっぱ無理ーいい！！！」

目をギュッと瞑ったままワタシは立ち上がり、洗面所のドアを
目指して身を翻したら――。

ゴッチー……ン！

そこには壁があります……。

プリプリプリンセスの変身……どころじゃねえデス！

パチツと目を開けたら辺りは薄暗く、天井らしきものが見え……えー、なんでしょう私寝てマシタ？ 仰向けのままぼーっとしていたらドアの音が。音を立てないように慎重に開いている様子が聞き取れますネ。私がそちらに顔を向けると、起きている事に気付いたのか音に気を配るのをやめ近づき、私の枕元で胡坐をかいた。

「痛みはどうだ」

「……………ありましえん、かちよお」

ああそうだ。私ってば洗面所で壁に激突したんですね！ テンパって目を瞑ったまま勢いよく突進したからめっちゃ星飛んだわー！ オデコに手をやると、そこにはタオル地の少しヒンヤリとしたモノが当てられてました。

「こら触るな。中を取り替えるぞ」

カチヨーは私のオデコに乗せていたものを取り上げ、なにやらガサガサやっている。ちよ、ねえナンデスカこれまってー！ カチヨー、レジ袋ヘダイレクトにインしてますよ氷！（英語デキマス！）私はスーパで貰ったレジ袋は一纏めにして台所の片隅に溜めている。多分それを使ったんだと思うのデスが……なんというか大胆！ なーんて思っちゃいマシタ。いやでもカチヨーが冷却シート持ってると思えないし、ある意味臨機応変と言うべきなのか。か。

「イタタタタタッ！ カチョー撫でないでええっ！！」

「こら動くな。たんこぶには冷やすのが一番なんだぞ……ククッ」

氷を入れ替えタオルに巻き私のオデコにそっと乗せたカチョーは、私のオデコを見て小さく笑った。ちょ、まって、私どんだけ？ どんだけレベルのタンコブなわけデスカ？！

「カチョー！」

「なんだ」

「そもそもカチョーが見てもいいっていうから悪いのデスッ！」

「そもそも、か。ではそもそも洗面所に入った理由は？ 土下座ポーズをしていた理由は？ 裸を見せろと言ったのは誰だ？ そして……そもそもお前がこの家にいる理由はなんだったかよく思いつい出せ」

「ギャー！ もうカチョーなんて俺様ドSであればいいんだコンチクショー！ だからごめんなさい！」

ガバツと布団を被り、イモムシに変化デス！ ああもう絶対敵うわけないのデスよカチョーめ！ ……ってえ！ わああああっ！！

「カチョー！」

ガバツと勢いよく布団をめくり、上半身を起こすっ！ オデコに乗ってた冷たいのは左手で押さえてあります！

「なんだ」

「何で私パジャマ着てるんデスカ?!」

「布団に入る時は着るものだからな」

「ちっ
がー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
っ
う！」

私はバンバンと布団を叩きながら猛抗議デス！ 大体これで何度目でしょーカ！ 平日も寝オチしている事が二度ほどありまして、その時もパジャマに変身してました！！ うわー！ ワタシ魔法の少女になったのねー！ プリプリ〜プリンセス☆ ってー！ んなわけあるかーいっっ！！

「問題はそこじゃねえデスよっ！ 毎回不思議に思ってたていうかすぐ忘れるワタシも悪いのデスガっ！ 今日という今日は言わせてイタダキマス！！」

「
・
・
・
・
ハイ
ハイ
」

うわー！ 明らかに適当返事ーっ！！
もうこうなったら分
からせてやらねばならんのデスよっ！

私は身を乗り出して、カチヨ一の眼前に迫った。何故かコンタクトも外されている為に視界がぼやけちゃうからねっ！　しっかり両目を合わせて言い聞かせましょう！

「カチヨー！ しつかりワタシの目を見て下サイ！」

⋮

「逸らしちゃ駄目ですっ。どうしてワタシ全身服が変わっているのかっていうのを教えて下サイっ！」

「仕様だ」

「意味わかんないデスヨ！」

「じゃあこれなら？」

「ふお……？」

まず感じたのは柔らかさ。そして次にやってきたのは温かさ。

ナニ。

ナニコレ。

視界一杯に広がるカチョーの顔。近い近い近い！　って、近いどころか……唇、当たってますがな！！

ナニナニナニナニナニ？！　ちよちよちよちよ？！

そつと顔を離し私のほっぺたをひと撫でたカチョーは、内心大恐慌のワタシに「堪えられなかった、すまん」と言い残して部屋を出ていった。

な……！！！！

ねえちよつと！　誰か！　誰かワタシにA I機能クダサイ！　思考停止デスっ！！

こんなワタシでも眠れません！

かんっぜん寝れませんデシタ……。

深夜、とはすでにいえない朝の四時。外はまだスズメすら鳴かない真っ暗な窓の外、悶々とした頭を一つ振って、いい加減寝るのを諦めた私は眼鏡をかけて……もそもそと布団から出る。

っーか！ 寝られるわけねーデシヨがーっ！ 口の周りにある上下に分かれた少し厚くなった皮膚、つまり唇が当たったんデスよ？！ これつまり世間一般で言えば『接吻』というもののじゃないのかー？！ 接吻で、だからつまり唇同士がくっつく事デスよね？！ 口の皮膚……ああもういや堂々巡りデス。ハッキリ認めればいいんだけど、まさかこういう事が我が身に起こると考えていなかったの。

BLならばいくらでも妄想してますけどねっ！ えーと、えーと、急いで走った曲がり角でどしーんと誰かとぶつかった拍子に唇が触れてしまうとか！ って、あー！ もうっ！！ ダメダメ駄目デスよーっ！ ベタもベタでベッタベタしか思いつかないっ！！

頭をバリバリ掻き筆って枕にパンチして掛け布団をばーっつと放り投げて、窓を開けて「わーっーっ」とやりたいっ！ いや流石にまだ朝四時では近所迷惑なので最後だけはやりませんでしたけどもね。

そんなこんなあんなをやっても落ち着かない。どうにもこうにも落ち着かない。ああ駄目だ駄目だ！ よし、こんな時は声に出すより文字にするほうがいいと聞く！ 早速実践デス！ 紙を取り出し

て、小さな机の上に思いついたままを書いていく。

* カチヨーはどうして私にせつぷん（漢字難しいデス!）したのでしょーか!

?ただ単にぶつかった

?私の口にゴミがついていて、カチヨーは口で取るのに挑戦した

?イヤガラセ

?罰

?懲らしめる

?————のののののののののの

っだ————!! やめやめっ!! 無理だよ無駄だよ無謀だよ!

こんな想定外なのは、私の脳みそキャパ大きくはみ出して納まりませんカラーーっ!!

再び布団に突っ伏して顔にギューンと枕を押し付けた。うをを……駄目だ耐えられそうにないデス……。

はっ! そうだ!! リーダーならばきつと……乙ゲー（乙女用恋愛ゲームの略デス!）マスターのリーダーならば良いアドバイスをいただけるかもしれないっ!!

この朝方でも絶対起きてマス! それは何故かとおーいえばぁーっ! 実はこの事でもないのですが、リーダーは実家暮らし。家族に邪魔されずに萌え萌えする為、完徹でゲームをやっているのが彼女の休日スタイルなのデス! サミシイと言ったら彼女にシツレーなのデス! だって、画面の向こうで甘く囁く彼がいるから、リーダーは幸せなのですカラーーッ!!

メールをポチポチ押して、いざ送信！

ブホー、ブホー、ブホー……

早っ！ 返信早っ！！

マナーモードにした私の携帯が、ブルブル震えてメール着信をお知らせ。かぱーんと開封すれば……

———邪魔すんな 用は何

キャー——！ こわ——————！

めっちゃ機嫌悪——っ！

急いで返信デス！

———カチョーと唇同士がくっつきました！ おそらく事故ですが相談をば！

そうしーん！ ……ブホー、ブホー、ブホー……

って、早——っ！

———至急 ファミレス 集合

まぢっすか！ いやほんとまぢっすか！！

決断はええー！ いやでもこのレスからしてソッコー行かねば酷い目に合うデスよ！

過去にコスプレさせられて、イベントの売り子させられたりねっ！ こっぴどくすい——！！

しかし、こんな朝からバタバタ音立てるのは寝ているであろうカチョーに申し訳ないデスね。静かに身支度を整え、そっと玄関を

出
マ
シ
タ。
。

涙なくして語れましえんっ！

「で？ 何があったわけ？ ほら、早く言いなさい！」

「せ、せめてカツ丼を！」

愁堂芙妃都、つまりワタシの所属するサークルリーダーは、睡眠不足のギラギラした目とやけに乗り気な相談内容にずいーっと身を乗り出した。ちょ！ こええよリーダー！ これは何デスカ？！ 自白強要取調べデスカ？！

ひい！ ひとのけぞりながら昨晚我が身に起こった出来事を、血液の温度が急上昇するのを感じながらリーダーに話した。

「ふうん？ 美味しいシチュね。ふっふっふふふふ……」

キヤーー！ リーダーに火がついたああー！

私は上がった体温がひゅうっと冷えて、ガクガクしながら紅茶が入ったカップを持ち上げて飲み込む。いえ、コーヒーマズかったのですね！ なんだかカチョーの味に慣れてしまったのデスよ！

ってー！ リーダー、その手元スレンダー怖いですからっ！ 何と
いうか……あれだ、自動書記の様に見ないでメモをとっている姿、
かなり通報モノです！！ ドン引きデスヨほんと、これじゃテーブル
席で向かいに座っているにもかかわらず『ワタシ タニンデス
タマタマ アイセキニ ナリマシタ』って態度取りたいですよ全
う！

一通り書き終えたリーダーは、ガシリと私の手を握る。

「なんて素晴らしい環境にいるのりりいたん！ 体を張ってこんな展開にもっていきけるなんて……っ！！ ふふっ」

「体張ってませんし、わざと展開なんてしてましえーん！」

わーん泣きたいよおお。そもそもリーダーがノゾキ指令をするからじゃにゃいか！ んもうっ！

カチョーの行動の意味を、二次元でも三次元でも恋多きリーダーに早く説明してもらいたいのにー！ ぶーぶーふて腐れていた私を、ひとしきり書き終えて手帳を畳んだリーダーが「まあまあ」と宥める。

「私の見立てでは……あ、ちょっとゴメンね？ んー、知らない番号だわ」

リーダーが着信を知らせる携帯電話を持ち、ファミレスの出入り口付近に向かった。リアル世界のリーダーは病院受付嬢であり、正直な所『腐女子』というのがありえない美しさの持ち主なのデス！ 中身あんな腐ってるなんて誰も信じません！

明け方のファミレスは客も私たちの他二組しかいなくて静か……なので、リーダーの電話の声がかすかに聞こえてきます。なにになに？？

———え？ あ、でも……なんっ！！ ———はい。———はい。……では失礼します。

通話が終わり、席に戻ってきたリーダーは真っ青な顔色をしてい

た。うわ、ナンダどうしたのだ！ ひよええ！ 座ってからもじつとコーヒーの入ったカップを両手で持って、水面をじっと見ながら動かないリーダー。

「——りりい、アナタ恐ろしい子！」

そして、やっと口に出したのは有名なセリフだった。え、なに今の電話ってもしかして私関係あるのデスカ？！ そう尋ねると、リーダーは「いいこと？」と幾分血の気が戻ってきた顔を上げる。

「唇が当たった————いえ、それはもうキスと認めればいいのよ。そう、そうなのよ！ えーっと、その課長さん？ バツイチって言ってたけど……」

と、リーダーは頬に手を当て指でトントンと叩く。その美しい眉を顰めていたけれど、急にパツと顔を輝かせて「そうだっ！」となにやら思いついたようだ……。うひょー、嫌な予感ビンビンですよ？ こりゃちよいっとロクでもない事になりそーだよ？？

「ねえ、りりいたん。課長さんからのキスって気にしなくていいと思うわよ？」

「へっ?!」

気にしなくてって！ アレ気にしないって無茶じゃありませんかいーっ?!

「そう、私の推測ではね————」

「————という訳よ」

「グスッ……ひっ、ひっく……わ、ワカリマシタ。私、頑張りマス」

リーダーの語る話に、あとから後から湧いてくる涙を止められない私。そうか、それならしょうがないよ。

目と鼻を真っ赤にした私に、リーダーは優しく頭を撫でてくれた。

「ほら、早く家に戻りなさい？ 課長さんに黙って出てきたんでしょ。きつと心配しているわよ」

「そっ、そうデスネッ！ 帰りまっす！ ああっ、本有難うございます！」

そう言って持ってきたキャスター付きスーツケースに本を詰め込む。次回の同人本を出すための参考資料やリーダーお勧めの萌え本コレクションを借りた為、重くて手持ちバッグじゃ無理だわ。

「じゃあ、気を付けて帰るのよ！ 色々気をつけて……」

色々ってナンデシヨ？？

謎の言葉を残し、カチョーのおうちへと戻りマシタ。

朝チュンコーヒーはキケンなカホリ、デス！

コロコロ……とスツケースを転がしながら家に帰還！　うわあ……やけに朝日が眩しいデス！　スズメがチュンチュン鳴いて……はっ！　こ、これはまさに朝チュン？！　って違うな、アレは布団もしくはベッドの中で情事の後気付いたら朝だったというくだりがあってこそだ！　いや今の私は『朝帰り』状態デスネ！　きゃー、ちよっと待って！　そうだよ何かおかしいよ私！
ふー、一回落ち着こう。待て自分。落ち着け自分。すー、はー、すー、はー。よしっ！

時間を見ようと携帯を開いてみたら……ぎゃ！　————着信一六件……！！

ちよ、まってー！　全部カチョーからですうううっ！！　ななななにー！

あれあれ？　気付かなかった……ってー！　そうだ私マナーモードにしてて、バッグに放り込んでいたから分からなかったんだわー
あああつ！

えーと、待て待て。何でこんな電話してくることがあったのか？　確かに夜、カチョーにキスされて眠れず、朝コッソリ家を出た。うん、確かに心配になるか？　えーと……あ！　やっべ、やっべ、やっばー！　あのメモ、机の上に置きっぱなしデスヨー！　あれひよっとして、書置きとか……勘違いされてません……よ、ね？　いやいやまさか。まさか。ハハハ……。

ビクビクしながら玄関の鍵を取り出し、差し込もうかというその

時。

ガチャ、ゴチーンッ！

「にぎゃああっ！」

内側からドアが開き、私のオデコにクリーンヒット！ ギャー、ここ、ここ、昨日たんこぶ作ったコロー！ オデコ押さえて叫ぶ私をカチョーが軽く目を見張り、やがてホッとした表情を見せたーってえ！ ぎゃああっ！ その顔反則ーうう！ うっすら髭が生え、髪も整えていないからワイルドさがプラスされて、こう……より一層男性的魅力が溢れて、溢れて、ダダ漏れで……！ わああっ！ 無駄遣い禁止ーいいっ！！（意味不明）
と、とにかく帰還の挨拶をば！

「カチョー！ ただいまです！」

「――お帰り」

おろろ？ なんでしょ、やけに優しい声デスヨ……！
家に入り、ひとまずスーツケースは玄関のたたきに置いておきまして。

あ、そーだ！ ちょっと機嫌よさそうなカチョーにお願いしちゃおっかな！ ファミレスで違和感を感じてから、どうしてもカチョーに頼みたかったのだ。

「かちよお、お願いがあるんですが」

「何だ」

「コーヒーが飲みたいデス！ カチヨーの淹れてくれたコーヒー、一番美味しいですからっ！」

「……そうか」

手をグーにして力説すると、カチヨーは「待ってろ」と私の頭をぐしゃっと撫でて台所へ向かった。私も作る所見てみたくて、その背中を追っていくと。

「わ、またタバコ！」

思わず目を擦ったね！ デジャヴかと思ったわああっ！
お湯を沸かしつつミルで豆を挽くカチヨーはこちらに目をやることもなく「気にするな」と、粉になった豆をドリップしていく。

あー、いい香りデスネ……いい男、しかもちよっと『ワイルドエッセンス』がプラスされていて、むっちゃ色気モレモレでコーヒーを淹れる姿って……鼻血ブーものデスねっ！

——ってえ！ そうじゃない。いやタバコの山気にするなって言われてもー！ 止めるのヤメタにしても程度ってモンがあるでしょがっ！

「————でじゃ、ないんだな？」

「へいっ?!」

カチヨーが、立ち上る湯気の間こうから私に尋ねた。聞き取れなかったので変な声あげちゃいましたヨ！

「……家出じゃないんだな？」

今度はシツカリ聞こえましたとも！ イエース！

「やはり誤解されちゃいマシタかつ！ いやいや、ちよいとばかりデスね、完徹のリーダーに……いえリーダーとは私の所属するサークルのリーダーの事なんですケドも……お話がアリマシテ。カチョー殿を起こすのはしのびないんで、コッソリと外出したのデスすんませんっ」

き、気遣い！ ザツツ☆気遣い！ 日本の心は和の心デース！

ステキコーディネートされたインテリアのこのお部屋。インテリアアコーデイナーの友人ぐっじよぶ！ 四人掛けのダイニングテーブルに座っている私に、コーヒーを淹れてくれたカチョーサマが二つマグカップを持ってテーブルに置いた。

いつもは対面に座るのに、何故か私の隣に座るカチョー。私のほうへ横座りしてながーい脚を組む。

「あのスーツケースは？」

「えっ？」

カチョーの質問は、恐らく玄関に置いたあのスーツケースを何故に家から持ち出したかって事なんですよーけども。

「あのスーツケースは？」

「じ、尋問っ?!」

「あのスーツケースは？」

……くっ、質問に回答しない限り同じセリフが延々続く気配プンッポンだあぁっ！

「あ……あれは……」

「あれは？」

「趣味……の本を借りる為なの、デス……おおお重くて」

なんデシヨ……敗北感がはんばねえ……。

色気大臣となったカチョーを、ワタシは脳内でアレコレしてやるう！ と密かに反逆を試みたら、脳内ですらコテンパンに言い負かされていた。ダメじゃんワタシ！ 頑張れ踏ん張れ、れつつらごー！

「いやほらあのですねカチョー、これは私の心のアンネイの為にいいマスか……」

「心の安寧、か」

そう言って、カチョーは私の顎を指でクイッと持ち上げた。

「ちよちよちよっ！ カチョー?!」

「……心配した」

目を眇め小さく呟かれたそれは、心から私を案じてくれていたんだと今更ながらに気付かされた。そりゃそーデスよね。チューして翌朝私イナーイじゃ……。

あれ？

ちょ、待ってよ。

まるで カチョーが———みたいじゃないか、ソレ。

いやいやいや、まさかマサカありえんて。だってカチョーは……。

「わ……ゴホン。あのですねカチョー！ ひ、人質、ん？ あれモノだと何ていうんだ？ まあイイデスヨ。とにかくゲンコー返してもらおう一ヶ月の間は出て行きませんってホント。あと約三週間デスが、まあ一つよろしくお願いシマス」

そもそものキツカケなのデスヨこれがまた！

それに、生きたイケメンモデルとして私の妄想力の役に立ってもらいたいっ！ 流石にこれはいえませんかから心の中で呟くだけに留めマッスル！

「そうか」

私の顎を掴んでいた指を離れたかと思ったら、そのまま鼻をパチッと弾いた。

「イッター—————っ！」

ナニしやがるんですかいっ！ という私の抗議もむなしく全くの涼しい顔に戻っているカチョーは、私の鼻を打ちつけた指で今度はマグカップを持ち一口啜り、そして腕時計にチラリと視線を落とした。私はヒリヒリする鼻を擦りながらその様子を見て……。

ん？ 時計？

「そろそろか」

「ほ？」

「いくぞ」

「は？」

言うなりカチヨーは私の腕を取り玄関へと向かう。

「ちよちよちよ、なななっ!？」

どこへ連れてかれるの、ワタシっ!!

神な本を頂いたのでゴザイマスッ！ ひゃっほう！

家の外に出て車庫に置いてある車の助手席にポイと放り込まれ、
「カチョー！」と抗議の声をあげるワタシに、運転席に乗り込みながら無言でカチョーは何かを差し出した。

ハテ、こりゃなんだ……。……。……。う。

「————っ！！」

ちよ、これっ、ね、わっ！！

声にならない叫びが口腔内にギリ留まりマシタッ！ う、うわあ
あああっ！！

「幻の『平成男子校生制服☆征服図鑑』じゃないデスカっっ！！」

マニア垂涎、萌えが詰まったステキ写真集なのですよコリャ！
全国人気ランキング順に男子学生の制服を一冊の写真集に纏めたこれはすでに廃盤になっており、オークションでも数十倍の価格がつくほど超人気本デス！

BL同人本描くにあたり、参考に……。っっていうか、単に興味でじつくり舐め回すように萌え萌えしたくて憧れの一品だったのに、どうしてこれをカチョーが！

「これでも見てろ」

「はあう……っ！」

どうしてこれを、とかワタシに下さるんですか、とかもうそんな小さい事はまるっと銀河宇宙の彼方まで投げつけ、早速ページを捲る。……うおお……た、まら、んっ……。

ページをガン見する私をよそにカチョーは車を走らせ、どこかしらの建物の地下駐車場に車を多分止めた。そしてページから目を逸らさないワタシの肩を引き寄せ、どこかしらに向かつて歩く。

どこだ、ここは？　なんて思いながらも私は全くページから目を離せない。だ、だって……若さ^{ほどばし}迸る純情少年達がちよっとテレながらのポーキング、そしてさらに某有名私立高校の夏服冬服そして体育着とステキなラインナップが並ぶのデス。目を離す隙なんてナッスイング！

「袴田様、お待ちしております」

「ああ、頼む」

「畏まりました」

——ほうほう、この制服はあの姉妹校と……！

「こちらにどうぞ」

「……一五二センチね、それから……」

「肩幅……うん、そこに書いておいて」

途中椅子に座らされ、なにやらアチコチ女性らしき人に触られ、なんだか指も触られなんのこっちゃ分からないけれど私はそれどころじゃない。

——むっは！　やはり詰襟はいいな！　一切無駄を省きまさに集

団行動を意識した黒のそれは、ちょっと腕まくりなんかしちゃった
ら若い張りのある肌がちょっと筋張っていたりして、そして日焼け
なんかしちゃって……んぎゃー!

「それでしたらラインは……」

「小さくて可愛らしいので、裾はボリュームを……」

「卓上はこの様な……?」

「お日にちは……はい、畏まりました」

そして何やら周囲が静かになり、私は全てのページを捲り終えた。
はあ、余は満足じゃ。

これは是非ともリーダーに萌えのおすそ分けせねばなりませんな
っ! うむうむと一人頷き写真集を大事に胸に抱える。

「――出るぞ」

「ほ?」

ていうか、ここドコでしょうか。

キヨロキヨロと首をめぐらせても、何の変哲もない……部屋?

私とカチョー二人きりのこの部屋には壁一面の鏡が張られ、ハン
ガーラックが二つほど置かれていた。私の座る椅子の目の前にはテ
ーブルがあり、ひとつは手付かずの、もうひとつは空になったティ
ーカップが置かれていた。

「あの、カチョー?」

「ちょっと早いが昼飯だ」

「おっ! ご飯デスカ! 朝ごはん食べてないしペコペコなので

すっ！」

ドアに向かうカチヨーに追いつくべく、いやその前にすつかりと冷めた紅茶ではありますが一気に飲み干し、私もドアへと小走りに向かいま———おお？

カチヨーがまさにキョトンとした顔で私を見ていました。

「かちよお？」

「いや、飲むんだなと思ったただけだ」

「私は出されたものは平らげる主義デスカラ！」

両親に口すっぱく駈けられたのですよ。おもてなしを受けたのにそれを蔑ろにするのは大変失礼であると。アレルギーでもない限り、例え嫌いな食材でもありがたく頂きなさい——。私の住むド田舎では、隣近所が親戚以上のお付き合いがある為と呼ばれも多い。冠婚葬祭関わる為田舎に嫁いだ母は最初からこの土地で生まれ暮らしましたという顔をしているけど、ヨソから嫁いできた人だ。マナーに關しては人一倍注意を払っていた。

なので、小さい頃から出された物はキッチンと食べきる。例え苦手なシイタケだけの澄まし汁が出たとしても！（涙）

「そうか。いい主義だな」

「はいっ！ あ、でもカチヨーだっていつも私の料理、綺麗に食べて下さるじゃないデスカ」

食後の食器は、ご飯粒一つ残らず綺麗に平らげてくれる。『たとえ少し失敗しちゃった！ テヘ☆』みたいな料理でも。そんなお皿

を見るとメツチャ嬉しいのデスヨ。喜んで食べてくれる姿を想像しながら作る料理は、作りがいがあるのデス！

「……まあな。ほら行くぞ」

なんでしょ最初の妙な間は。まーとにかくご飯ご飯！

お昼ご飯はおふれんちデシタ！

大事に大事に『平成男子校生制服☆征服図鑑』を胸に抱えて歩いて、エレベーターに乗って、歩いて、歩いて……。

広くないデスカ？　ここ……。

ふかふかの絨毯が敷き詰められて、少し慣れたとはいえヒールのあるパンプスを履く私はウツカリ転びそうになりながらもカチョーに付いていく。

ようやく立ち止まったと思ったらわーお、おふらんす料理デスカ！　やっほーい！！　……ん？　まて、まて。ちよいとまて。

建物の中にこんなお店があるなんて何だか不思議デスネ？！　しつつかも妙にピカピカしなすった調度品、そしてやけに色々隙のない動きをする偉そうな人がカチョーに挨拶をした。

「お待ちしておりました袴田様。それではこちらに」

こちらにと言つて案内を、これまたロボットみたいな動きでスマートに先導するお店の人に引き継いだ。うを……なんつーか私こんな世界シリマセン！

正直生まれて初めてなおふらんす料理。ててててーぶるまなあつて?!

ガクガクふしぎな踊りをしながらテーブルにようやくたどり着き、椅子を引こうとしたらスマート男子がさりげなく引いてくれた。

ほっほう！ コリヤ悪いねっ！

そうありがたく思いながら、しかし座るタイミングがイマイチつかめず、中腰で固まっていたらカチョーが私の両肩を持ってドンと下に押した。そしてすっとこれまた絶妙なタイミングで椅子が押される。

なーいすポジション☆ ——ってえ！ ちょ、カチョー！ 強引だなおいっ！

カチョーは私の向かいの席にそれはそれは自然と座り、差し出されたメニュー表？ を見て私からすると宇宙語を言いなすって、それから私にもメニュー表を見せてくれた。

——読めにゃいし！

何らかの文字というのは分かるし、ここがおふらんす料理のお店ってことでフランス語なのかなとかその程度は分かりますがね！ 無茶振りするなってんデスヨ！！

早々放棄した私を、カチョーは「ああ、読めないのか」とわざわざ傷口に塩塗って下さった！ キー！！

「牛と豚と鳥、どれがいい？」

「ちょ！ カチョー、いくらなんでもレベル低くしすぎじゃないデスカッ？！ 牛で！」

「ローストビーフかフィレ肉のポワレ、どっちがいいか？」

「ローストビーフで！ 大体ポワレってなんデスカ？」

「焼いたものだ。蟹の冷製スープかコンソメスープのパイ包み、どっちだ？」

「ね、ちょっと答えにしては簡潔すぎまセンカッ？！ パイ包み！ 絶対っ！」

「デザートは生ケーキの他に……ブッフエがいいか？」

「え、一杯食べたいデス！」

畏まりました、とお店の人が去っていったところでハッと気付けば、どうやら反射的にメニューを選んでいたらしいワタシ……おとおおっかしいなあ?!

首を捻っている私をヨソに、カチヨーは最初のやけに威厳のあるおっさんと何やら書類っぱいのを見ながら会話をしている。

こりゃ好都合デスネ! 私は実は気になっているのですよ、あのスマート男子! 妄想力がじわじわキテますよ?!

『「――今夜、貴方を料理して差し上げます」

僕を閉店後の店内で待つように指示を出したのは、若くしてこのフレンチレストランの料理長となった彼だった。その彼は何故か僕のタイを緩め、冒頭の言葉を囁いたのだ。

「ちよつと待ってください! 一体何が?!」

分かりませんか? とでも言うように彼は片眉を綺麗に上げて、硬直している僕のブラックカラーシャツのボタンを上から順に外していった。

「私はね、貴方が面接に来たその日から目をつけていたんです。

そうですね、俗な言い方をすれば一目惚れとでもいいますか」

「ひ……とめ?」

呆然と成り行きに任せていた僕は、ゆっくりと鎖骨辺りに唇を這わしながら見上げる彼の目に釘付けになった。ギラギラと情欲に溢れるその目はやけにはつきりと僕を映している。ああ……僕は……』

いっ。

「もっっっ!」

「顔が溶けてる。妄想から戻れ阿呆」

「ちょ、神本……っ！」
かみぼん

カチヨーは脇においておいた『平成男子校生制服☆征服図鑑』の、
背表紙じゃなく角で私の頭を打ち付けた——ってええええっ！
あ、ありえないっ！！

「ひよわあああっ！ 本がああっ！！ その上カチヨー！ 私の
頭が陥没したらどうしてくれるんデスカッ！」

「一五二センチが一センチ減った所で誤差の範囲だ」

「くうっ！ 一センチを笑うものは一センチに泣くのデスよっ？
」

「俺は別に困らん」

「うわああんっ！」

ぜってー敵わないっ！ 全く歯が立たないっ！
くそう、いつか反撃してやるうううっ！

そう心のメモ帳に油性マジックで裏移りしながら書きとめたところ
で、前菜が並べられた。

「わあああっ美味しそう！ いったきまーすカチヨー！」

たった今思っていた事などばーーいっとうっちゃり、いそいそ
と食べ始める私を、カチヨーがうつすら笑って眺めてたなんてじえ
んじえん知りませんデシタ。オサレ料理うまし。

掌で転がされてる気がシマス！（↑今頃？）

最後に出てきた生ケーキや、ワゴンで運ばれてきた数々のデザー
トに昇天している間、奥から出てきた恰幅のいい料理長ーっという
見た目そのものな人が（ちっ）カチョーと談笑をしていた。

ソースが少し甘めでしたね、とかなんか言ってるけど、私にやさ
っぱりワカリマセン。美味しいか不味いかの二択デスっ！
ええ、とりあえずニコニコ笑って聞き流しの術デスヨ。

「お嬢様、お口に合いましたか？」

うをっ！ 私に振るなコックコート熊！

「ハイ、トテモ オイシカッタデス！」

ギクシャクと裏声で返事しちゃったー！ わああテンパリすぎだ
ろ自分ーっ！！

だけど美味しいのは本当。

ナイフとフォークをわたわたしながらカチョーの真似して何とか
口に運んでいたけれど、もっと食べたいーっ！ と思う美味しさで
進むため、苦手なナイフとフォークも苦にならなかった。

「それはそれは。本日は試食で御座いますが、またいつでもいら
して下さい」

そういい残し熊は去った。
えーと。試食？ なんの？

「……かちよお？」

「さあ帰るか」

なんのこっちゃと聞きたかったけど、カチヨーは立ち上がって私の肩を抱き寄せ（おいしいい）お店を後にした。

威厳おぢさまとスマート男子のステキ角度のお辞儀に見送られながら。

そもそも、デスヨ？

「カチヨー、ここどこなんデスカ？」

「お前……今聞かそれを」

地下駐車場にある車に乗り込んでからカチヨーに尋ねたら、バチンとデコピンされた。いいっ！ もおおお！ 手が早いなコンチクシヨー！

車を発進させ、地下から地上へ。おお……見覚えありますね……ん？ ほうほう、ひょっとしてここは駅そばの豪華ホテルじゃござーませんこと？

地元に住まう身としては宿泊なんてするわけがなく、会社のおねーさま方と一緒にランチbuffetに来た位の馴染みのなさ。そら中見たってどこかわからんわー！ っていうかここに何しに来たんだカチヨー。美味しいご飯の為なのかな？ まあいいやご馳走様！

そのまま自宅へと帰る前に、せっかく車だからと重たい米など買っていくためスーパーへ。おおお、じえるめんカチヨーが色々持つ

て下すつてありがてえ！　やはりこりゃカチヨーとはいえ男子デスネ！　力があるんデスネ！　私ではフラフラものの五キロの米袋、カチヨーはセカンドバッグの様にプラプラ持っていらっしゃる。なんか生意氣っ！　もっと持たせようかと思いましたが、醤油も酒も味噌もビールも充分にある。よし、ここは一つ……。

「カチヨー、これも！」

ふふふ、単なる嫌がらせデス！　『長ネギ・大根』は、レジ袋から覗く姿そのものが所帯くさい代名詞！　普段かっちゃいーカチヨーサマにはかーなり不釣合いデスヨッ！

しかしカチヨーは何も言わず持つ。むしろ何かこっちの背筋がぞわぞわする笑みを浮かべてデスネ……。いやいやいや、ちょ、喜んでらっしゃるのか？！　ワタシ大失敗デスカ！！

そして自宅に戻り夕飯までの時間、リビングに置いたふかふかのソファで本読んだりゴロゴロしたり。とにかくのんびりと過ごした。カチヨーも持ち帰りの仕事があったようで、同じソファに座りリビングテーブルの上でノートパソコンを使う。そのカタカタとキーボードを叩く音がやけに耳に心地良く、ソファに座っていた私はウトウト寝てしまいマシタ……。

……タタ、タタタッ……

——お？

相変わらずの心地良いリズムで音が聞こえる。

うをー、ワタシ寝てましたかっ！ いま何時だ？？ てか、てか、
てゆーか。なんだろうなんか……左耳が、あったかい。

くわっと目を見開くと、目の前にはノートパソコンの画面、そして手。――手？

いやまて、向きおかしいでそ？ 平行じゃなくて垂直に見えますがな！ イヤイヤ、そうじゃない、ひょっとしてワタシが横向きデスカ？！

するってーと……。

何かに思い当たり、ギギギ……と油の切れた玩具みたいに顔を右に動かしたら。

「起きたか」

「か……っ！！」

ワタシの視界に広がるそれは、カチョー様の下からのアングル！
わーお！！

「……かちよお？」

「なんだ」

「なぜにワタシ、カチョーの顎見てんですか？」

「目の前にあるからだろ」

「なぜにワタシ、こんな格好してるんですかい？」

「寝たからだろ」

[illegible]

そうじゃないデス！

いやそうなんですケドっ！！

おいおいなんだワタシ、リラックスしすぎでしょー！！　しかも相手はカチヨーでしょー！！　……そりゃちよつとはさ、なんか寝心地いいなーとかさ、カチヨーの匂いイイナとかさ、声がめっちゃゾクゾクするねーんとかさ、思っちゃってさ……。

いやいやいや。

そうじゃない。そこじゃない。

「カチヨ！」

「なんだ」

「お腹すきマシタ！」

「……そうか」

お昼ご飯はすっかり消化して、胃袋がタイミンクよくキュウウつと鳴った。それを聞いたカチヨーは、少し目を見張った後、破顔して「すごい腹の虫飼っているんだな」と私の頭をくしゃつと撫でた。

——私の胃袋とは違う場所が、キュウつと締め付けらマシタ。

今週のお話をまとめてみたのデス！

○月×日 月曜日。

今日もカチヨーは通常営業デス。作ったご飯は毎回綺麗に食べて下さりマスが、特に和食……というか、家庭料理が好きっぽいデス。畏まった料理よりも。まあワタシには作れませんがねそういうのは。ママンの作る料理を思い出しつつ、わからないときは電話して『めにう』考えてマッス。

○月×日 火曜日。

カチヨー、会社では本当にただの上司ですな！ 私に指示を出す以外半径一メートル以内なんて絶対近づきマセン！ 徹底してるなこのおーっ！

とか思ってたなら、携帯にメールが。

『明日弁当よろしく』

な・ん・で・す・とー！ 初弁当キタコレー！！ と、ひとしきり脳内のみで騒いだ後ふと思い出しマシタ。

カチヨーは原稿を人質(?)に、私を住み込み家政婦としていマスが、私の為の服とか外食とか逆にお金使いすぎてね？ なんてハラしてるのです。いっぺん『払いマスーっ！』って主張してみたものの、「新人の給料などたかが知れてる。家事の差額だと思えばそれでいい」なんてデコピン付きでいいなすったよカチヨー！

まあいいならいいんですケドね。流石に心苦しいっちゅーか桁違い過ぎだろソレエツ！ なので、弁当くらい作りますってんだ！ 帰りにスーパーで色々仕入れて(弁当箱もね！)明日の朝に備えまっス！

○月×日 水曜日。

朝から頑張りマシタ！！ カチョーは朝早く出勤なさるので、ソレに間に合うようにとか自分時間で逆算したら朝五時に起きねばならんと……いやいやいや、時間で敵前逃亡とはオンナがすたるってもんデスよっ！ 学生時代にママンが作ってくれたお弁当を思い出しながら詰め詰め。

いや流石に自分の分は無理でそ。同じ内容の弁当、そして普段外食組のカチョーも私もだなんてモロバレもいいところっすね！ マメ橋先輩が間違いなく嗅ぎ付けるってもんデスヨ！

珍しく八時台に帰ってきたカチョーは、「美味かった。ありがとうな」とワタシめの頭をぐしゃぐしゃと撫でて笑顔を寄越しなすった！ わーお極上☆ ……ってえええ！ そうじゃないデスヨもぅ！！ むやみやたらにそんなん連発されたらワタシの心臓もたにゃいし！

○月×日 木曜日。

朝、目を覚ましてすぐ気付いた事。

昨日早起きしたのでついウトウトしてソファで寝てしまいマシタ……ので、もう何度目でしょーかね。自分の部屋で、ちゃんとパジャマ着て、コンタクトも外されて、寝ているのって……。

わあああ、慣れてきた自分がこわいっす！

○月×日 金曜日。

ってことで週末デス。

ドキドキハラハラわんだほー満載なカチョーの観察記録をばりーダーに渡すので、ちよいと会社帰りに駅前コーヒーショップで待ち合わせシマシタ。

りーダーの住んでいる周辺には画材など売ってないらしいので、こちらまで足を伸ばすついになってことで。

コーヒーショップで紅茶を頼み、リーダーは本日のお勧めコーヒーを注文。そして封筒に入れた資料をば渡しマシタ。ふふん、これはデスネ、風呂上りの全裸は流石にワタシにはハードル高かったのデスが、上半身ハダカは見る事が叶いましたのでそれを絵にしてみましたのーっ！ 網膜にバッチリ☆焼きついているのデスヨ！

「ほっ、ほそまっちょ……うふふふふっ！！」

珍妙な笑いを浮かべるリーダー。乙ゲーラブなリーダーの好みは『俊介』というキャラで、細マツチョのクールガイなのデス。カチョーの顔は好みとはちよつと違うらしいのデスが、観賞用にはとてもいいわねと、とても病院の美人受付嬢とは思えない、『ヤヴァイ』顔で溶けてマシタ。

だれか！ モザイク貼って！ とリーダーの名誉の為に願いました。願っただけデスがねっ。

その後リーダーはまだ予定があるということで、細かい質問はまたチャットでーと言いつつ残り忙しそうに帰っていき、私は買い足りない物だけ帰宅途中に買って帰宅シマシタ。

——ううむ、私の平日ってこんな物デスカ……。

リーダー御所望の観察記録を書き付けてますが、実際の所朝早く出社、そんで帰宅は深夜の事もあるので、平日は淡々と過ぎて行きマスネー。

弁当だって、取引先との電話待ちの為デス。丁度皆出払うから弁当持ち込みもバレル事はないって言ってマシタが。豚の生姜焼きにインゲンの胡麻和え、ブロッコリーのチーズ焼きに甘い甘い卵焼き。それから……赤いウインナーのタコさんをコッソリ忍ばせた。カチ

ヨーにかわいいもの。ちよつとしたイタズラだったのですが、やけに喜ばれて何かまた失敗した気がシマス……。おおう。

「お帰りなさいませーご主人サマあ」

「またか」

いい加減カチヨーも慣れたのか、扱いがぞんざいになってキター！
ううむ、来週からはアレンジを加えるべきでしょーか。ややしよんぼり加減にいうっかり口が滑りマシタ。

「やはり裸エプロンが王道デスカ……」

「じゃあそれで」

「ちよおっ！　ななな何が『じゃあ』デスカーっ！」

「楽しみだな」

「うわああああっ！　カチヨーまってええええっ！！」

いつものようにサッサと風呂へ向かうカチヨー。その背中へ誤解を解こうと追っかけたら急にピタッと止まるので、勢いそのままドシーンとぶつかって転がりかけた。……かけた？

「ぎゃー！　カチヨーの顔が目の前えええっ！！」

「失礼なやつだ。落とすぞ」

「ごめんなさーいー！」

後にひっくり返そうな私を抱きとめてくれたのはカチョー。何その早業！　ってかこの体勢はいかんだろう！　いかんいかん！！

「カチョー！」

「今度はなんだ」

「まさに萌えポーピングですネ！」

「……はあ？」

「このポーズ！　いやー、リーダーの大好きな乙ゲー登場キャラの二次創作なんすけどね！　それこそ俊介さんが鉄次郎に『俺を知るのは……お前だけだ』とかなんとか言って、ぶっちゅー！　と熱い……あつ……」

萌え萌えシチュエーションを立て水が流れるように語りだした私の口……あれ？　まて、まてまて！　どうなの最後、最後おかしくないデスカ？！

「熱い、なんだ？」

ぎゃー！　そういや私カチョーにキスされたんぢゃん！　『堪えられなかったすまん事件』ついこの間だし！　萌えシチュに夢中で語るタイミングなんぞ全く考えてなかったわ！　カチョーの手が私の肩を支えてくれ、お互いの顔は向かい合っているとか、そんなちよつと状況確認する自分がもうヤバイでっす！

しかしよく見ると、カチヨ―は何か辛そうに顔を顰めてイマス…。

――はっ！　そうか、そう言うことですね、リーダー！！

「カチヨ―！　聞いてくだサイっ！」

「また突然に……」

「いいからっ！　ここに座ってくだサイっ！」

「ここに？」

私はカチヨ―の腕から抜け出し、廊下に正座してその向かい側を指差した。カチヨ―は『明らかに面倒くさい事を言いそうだが、このまま渋った所で長引く一方だから一応聞いておいてやろう』って顔にバツチり書きながら（失礼な！）ドカリと腰を下ろした。

「で、言いたい事はなんだ」

大丈夫、大丈夫。やれば出来る子よ、りりい！

私は膝立ちになり、カチヨ―のほっぺたをガツシリと両手でホルドして。

ちう。

ただ、唇の皮膚同士を合わせた行為をした。

今週のお話をまとめてみたのデス！（後書き）

タコさんウイナ―、ここでやっと出せましたw

「妄想部」隣の世界にトリップ

＊動物捕獲大作戦＊にて、喜んで食べてるカチョーがいます。

<http://ncode.syosetu.com/n8811s/>

そんでもって、7月1日18時に「妄想部」にて
また企画モノをUPしますのでよろしくー！

虎馬改善計画デス☆いやでもほらなにこれ！

まだ感觸の残る唇を離しながらワタシを凝視するカチョーの視線を外して、恥ずかしさを紛らわせるように口を開いた。

「ああああのですね、あのっ、そう、トラウマ改善計画なのですよココココレー！」

「トラウマ？」

ワタシの行為に固まっていたカチョーが、少し掠れた色気のある声で聞き返す。

「ほ、ほら過去に傷心のカチョーはなんかもう色々あって、そのチューだなんだという行為にトラウマを抱えているんじゃないかと！ だからこないだ……ワタシにチューしたのだってカチョーがつい何らかの深層心理が働いての所業であって別にそこに感情どうこうじゃなくて単にトラウマ克服の為のキツカケとなったのなら私もちったあ協力できるというかお返しになるというかネタに出来るというかあわわわわ……」

うわー、何言っただもーおお！

膝立ちだった私はべたりと床に座り、高さにカチョーを見上げ――。

ついに言葉も出なくなり、自分から『かました』とはいえ、そして二回目とはいえ、イケメンカチョーへのキスはメチャメチャに恥

ずかしい。体温ぐいんぐいん上昇して顔が火照り、じんわりと涙まで浮かんできちゃった。うをおおなんじゃこりゃー……。

「――それはお前が考えたのか？」

「へっ？ 考えた？ いや考えたってまあよく分かんないですけど、リーダーがこないだの日曜日、きつとそうに違いなйт！ と熱く語っていたので私もそうじゃないかと思いつたのデ……ス……う？」

語尾が段々細くなるのは致し方ないってもんデスヨ！ なんかカチョーの雰囲気、徐々に黒いモノに変わってきてますから……きゃー！ こわい！ い！ い！ い！

「それなら……」

黒い笑みを口の端に浮かべカチョーは私に手を伸ばし、後頭部をガツと掴んだかと思ったら一気に私を引き寄せて。

ぎゃあつと叫ぶ間もなく唇が塞がれた。

私からしたのと大違いの、優しい優しいキス。かかる吐息がやけに艶めき、密着した体からは温かさが伝わり、やけに生々しい『男の匂い』を感じた。

何デスカこれ何デスカ。

ナニゴトなのですか一体！

角度を何度も何度も変え、ようやく離された時にはワタシはもう……。

「つふお、お、おおつ、ふおにゃーっ!!」

「情緒が無いな」

「いつ、いきつ！ 息、は、どこでっ?! ブレ、ス、タイミン、グーウ！」

「まあ落ち着け」

ぜーぜー酸素を求める私に、カチョーはいつの間にか私の背中に回した手で擦りながら「慣れろ」と宥める。いやいや慣れろじゃないくてさあ！ いやいや宥めるんじゃないくてさあ！

「かちよおおおっ！」

「なんだ」

「トラウマではなかったのデスカあっ?!」

一瞬黙ったカチョーだけど。

「ああ、トラウマだ。だから治してくれ」

そう言って、再びカチョーは私に顔を近づけて……。

のわああああああっ!!

なんだもうコレ！（二度目）

——風呂行ってくる。

ボーゼンと座り込む私をそのままに、サッサと行ってしまいうカチヨ！。

おおお……腰が砕け散りマシタ……粉碎骨折デス……。

しかしそこで腹の虫が収まらないのが私たる所以^{ゆえん}。

ぐう。

あれ？ ……つてええええっ！！ こっちの腹の虫鳴ってどうすんのさーっ！

……まあいいや、とりあえず食べよう。腹が減っては戦ができーヌ。カチヨーに勝つには満腹が一番デス！

それにさ大体ワタシって難しい事考えるのはめっさ苦手なのよね。きっとお腹空いてるからこんなわけの分からない展開になったにちげーねえのデスよ。とりあえず一旦ポーイと投げ捨て台所へ。

今夜はスズキの塩焼き、ジャガイモと玉葱の味噌汁、ねぎぬた、白菜と豚バラポン酢かけ、きゅうりの醤油漬け、あとはソラマメ茹でたのデス。なんかもうさ、飲もうよ今夜はみたいな。

グラスは冷凍庫で、ビールは冷蔵庫で冷やしてありマッス！
そりゃーなんか適温ってありますがね、いやいや、グラスは凍ら

せてキンキンになったの飲みたいよねっ！

……でもさ。いや、あんなのされた後ってどういう顔してりゃいいのデスカね？

いつも向かい合わせで食べてマスが、いやいや……は、はずかしー！

そ、そうか。そうデス、うん、そうデス！ ほら、私には妄想という心強い味方がっ！

『「ほら、お前コレ好きだろ」「なんっ……」「お前の好みなんて知り尽くしているさ」「どうしてそこまで――」「聞きたいのか？ 俺は……」』

あー！ー！ーっ！！

ででで出来ないっ！！ じえんじえん駄目デスっ！！

脳内プリンになってる私はどう考えてもどう捻り出してもこれ以上は全く浮かびませんっ！

食卓に並び終えてからウンウンと頭を捻りながら、二人掛けソファの背もたれの上（細長くて狭いデス！）にうつ伏せでグデっとなってたら。

「ひいやあああっ？！」

首筋につめったいモノが当たり、飛び上がる代わりにドサッと座面に落下！ うをわああっ！！

「ちょ！（ちよっと！）なっ！（何しやがるんデスカっ！）だっ

！（大体ここはソファアの上でもし反対側に落ちていたら大怪我デスよ?!）」

「……言いたい事は大体分かった。ほら、飲むぞ」

カチヨーは零れるような色気を醸し出した風呂上りのお姿で、ビールの缶を持っていた。

おおおお……眼福でござる。

カチヨーはドライヤーを使わないので、ザッと拭き上げた濡れ髪が……これがまたそるんデスヨ！ え？ もうさ、写真イイツすか?! これ今回の『BARA☆たいむ』にさ、特典としてブロマイド付けちゃうってアリっすよね！ 私の『課長、深夜に愛を』物語……リアルカチヨー……ククク……。

ふっ……。

あれ。

なんか目の前に何か……ってえええええっ！

「カチヨー！ それ、それ、いやあああああーっ！っ！」

座面にひっくり返ってた私の顔の真上で、カチヨーがビールの缶を指だけで摘んでいた。

それ落としたら危ないーっ!!（私が）

酔っ払いチャットでチュー☆

どんな顔でご飯食べたら……なんてことはすっかり忘れて、いつものように食べてましたね気付いたら。つついついついお酒も進み、週末ってことでまあいいじゃないかと自分に言い訳もしつつ、なによりカチョーがいつもより楽しげだったんです！　そうっ、いつも正面で見ている私が言うんだから間違いない！

だって……『普段より口角が二度上がっていた』のデス。ええ、そりゃ観察してマスからねっ！

食事も終わり、カチョーはまだ食卓で飲んでいましたが、私はリーダーとのチャットの約束があるのでカチョーのノートパソコンを借りてリビングテーブルを陣取り、いつものサイトにインしましたのーほほほ。

あーなんか飲みすぎマシタね……。

まあ私、お酒はそこそこイケるクチなので大丈夫ですけども。

ふわっふわしながらログインして、待ち合わせ場所まで行くとすでに待ってたわリーダー。

——ちわっす！　リーダー！！

——りりいたん、待ってたわ♪

（ていうか、リーダーのタイピングは神レベルなので、私が十文字打つとしたらその時間でリーダーは五十文字は固いデス。そして今夜はいつもよりもがつついた感じがシマス！　こええよリーダー！！）

――で、どうなの？ 課長さんの態度、少しは変化あった？

――そうですね、割と機嫌ヨロシイと思いマス！

――よろしい、と。へえ、りりいたんてば課長さんに何かしたの？

――えー……。――

――何よ言えないの？

――えー……。――

――何よ言えないの？

――……。――

――何よ言えないの？

――ちょ

――何よ言えないの？

――ぎゃー！ どえすモードキケンー！！

――「つ・ま・り？」

――はいゴメンナサイ降参です。トラウマ治ればいいなと思って
私からチューしちゃいました！

――まあ！ まあまあまあ……ふふっ、まあいいわ。その後の反
応の方が私の楽しみでもあるし。

――りーだー？？

――でも、りりいたんて……キスするの課長さんが初めてだった
んじゃないの？ 彼氏できたことないんだし。

――そ

――そ？

――それ厳密には違いマス……。

――ちよっと！！ それ初耳なんですけど！ 詳しく！ そこ詳
しく話して？！

――ていうかちよっと眠くなってきたんですけど

――ダメ！ 先に話して！ じゃないと、りりいたんのアレをア
レするわよ！

――わー……！ いますいますほんとうごめんな

さいー！

——で、一度目のはいっ？

——はあ……ま、正直あまり覚えていませんが、中学一年の頃だったでしょうか？

——流石に覚えていないと困る記憶レベルだわ……。

——しょうがないじゃないですかっ！ 私、家の縁側で寝てたんですよ。気付いたらされてたような？ っていう。

——それが初キスなのね？

——カウントに加えるのならば、そうなのですよ。うをお……ねむ……

——相手の人は？ カッコイイ？ ひょっとして初恋？

——だれかわかりませんかっこいいたぶんはっこいいいいいいいいいいいいいいいい

——りりいたん？

——りりいたん？

——ああダメだわ寝オチ？ しょうがないわね。これきつと課長さんログみるわよね？ なら……

そこまで読んだ記憶は、あります。

ええ。

気付いたらいつもの様に朝でした。
なんとまあ爽やかな朝の光ーっ！

……。

ええ。

私の姿もいつもの様デシタ。

っていいですかね、ソフトコンタクト剥がされてるの位流石に気付こうよ自分！　て思いますわね。アレどう取るか着けた事ない人見たら衝撃デスヨ？？

目玉に張り付いた薄い膜を直接指で摘んで剥がすんですカラーー！！！！　ひーっ！！

そして相変わらずのパジャマ姿……。おかしいおかしい思いながらも結局流されてそのままになってまマスがね。ブラ着けてないのはどうということだ！　と、こればかりは激しく問いただしたい。

そーいや……。パソそのままで寝オチしちゃいまシタね……。

階下に下りて見ると、ノートパソコンはそのままの姿で鎮座しておりました。自動で電源が落とされたのならいいけども。

——私ってば、酔っ払うと口が軽くなる……。痛いクセがあるんですよね。

いやいや、絡んだり泣いたり記憶無くしたりなどの粗相はアリマセンが、これはつまり自爆とゆーか。気を許した相手ほどついつい緩んじゃうんデスネ……。いや、デスネじゃねーし！

もっかいPCばちーんと立ち上げ……。ああ……。

あのサイトはログが残らなかった……。リーダーがあの後何か言ってたっぽかったのデスが、肝心のそこが全くわかりましえん。

まあ……。知られたかといって困る話ではアリマセンがねー。単に初キスはカチヨーではないとかそんな感じ？　中一の頃の淡い思い出デス。淡すぎて覚えていないというなんとも惜しい思い出。カウントに入れていいものかどうか……。

パジャマ姿のまま、パソコンの前でその相手の顔をどうだったかと広告の裏にゴリゴリ描いてみる。私は十三歳だったけど……??そのときトントンと音を立ててカチョーが階段を下りてきた。あー、いつもより遅いけど、今日は土曜日で休日出勤もないと言ってマシタね。

私も身支度しようと立ち上がり、洗面所へ行こうと廊下に出た所でカチョーにご挨拶。

「おはよーご……むうつ！」

……ちょー！

軽く指で顎を持ち上げられ、カチョーの顔が近づいたと思ったらあつという間に唇を塞がれた。ああ挨拶の途中なのにーいいい！

「くわちよおおおおーっ！っ！」

「おはよう」

たっぷりウン十秒ちゅうつとされて、解放された口を開けば爽やかな挨拶が返ってきた。おいおいおい爽やかたあどういうこっちゃ！ほんの少し髭が伸びてジョリジョリ感がいかにも男の人デスヨ！思わず掌でカチョーの顎をゴシゴシしてやったわ！

「カチョー！ 私の顔が卸されちゃいます！」

「ああ悪い。痛かったか？」

「そりゃ痛いデス！ いやいや、そうじゃなくてデスねカチョー！」

「今度はなんだ」

「今度はというか今度もデスよ！ 大体ちゅーって、実はカチョーぜんっぜん平気じゃないデスカっ?!」

「辛い。今にも震えだしそうだ」

「ぎゃー！ 嘘くさいっ!!」

「嘘くさいとは失礼だな」

えーえー、全くデスよ！ こんなチューチューしてくるなんてトラウマも何もねえデス！ と目で力いっぱい睨みつけたハズですが、おりよりよりよりよ？ カチョー……？

カチョーは背が高い。

それを見上げる私は、ほんの少し苦いものを堪えるような感情がカチョーの瞳によぎった気がした。

途端、自分の中にあつた腹の虫がシュンと大人しくなってしまうた。

ひょっとして本気のトラウマだったのかな、とか。ひょっとして未だに癒えてないのかな、とか。私にまで拒否されて、傷ついたのかな、とか。

「――かちよお？」

「なんだ？」

「……ワタシでよかったら……どぞ、デス」

バツイチとなったのもそのせいだろう、とはリーダーの弁デス。
私はなんか罰のはずの住み込みでメタモルったり服買ってもらったり、家事……はそんなに苦でもないしむしろ将来的に役立ちマスよね。

そんなワタシがカチョーに返せるものといったら。

少しでもその心の傷を楽にできればいいかな、なんて思っちゃまったデス。

「そうか」

そういつてカチョーは。

再び唇を寄せてきまし——っ！

ちょ！

ねえ、なんでそんな黒い笑みを見せてるのねえねえカチョー？！

酔っ払いチャットでチュー☆(後書き)

7月1日18時 妄想部「梅雨」

http://mypage.syosetu.com/1444526/

頭に白タオルはイケナイスイッチが入りマッス☆

「じゃあ、庭の草取り行ってきたす！」

「……まで」

軍手を嵌めてゴミ袋片手に庭へ行こうとしたら、ガシツと肩を掴まれた。ちょ、折角やる気になったのに！

朝から濃厚な……ええ、明らかに調子乗ってますよね？ なカチヨーのキスから離れ、朝ごはん食べて洗濯干して、ふと二階のベランダから庭を見下ろしたら——いやいや、一瞬芝生かと思ったけど違うよね？ 明らかに雑草なんですケドーっ！

午前中のうちに草取りしようと動きやすい、そしてテンション上がる服に着替えたのデスよ。

「カチヨー、庭の雑草そのままでもいいんデスカ?! あと半月もしたら何かしらの用事があるんすよね？ かっちょいーカチヨーにステキなおうち、そして庭見てみたら草ボーボーって……ちよつといい男が隙を作るのも結構デスが、なにもそこじゃなくてもーってズッコケま……っっ!!」

グリグリグリグリ……

「ふががががっ!!!!」

カチヨ一のグーで両こめかみをグリグリ攻撃ーっ！
見た目に反して地味にいてえええええっ！！

「まずその服を着替えろ阿呆！」

「えー」

いかにもお手伝いな感じが出ていいと思うのに。いわば作業着なのに。

「メイド服、可愛いじゃないデスカ」

「五秒以内に着替えなければここで剥く！」

「ぎゃー！ 何その秒数！」

そんな時間、魔法少女アニメの変身は間に合わないっすよ絶対！
マスク被った男の変身ならギリか？？ いやいやそれどころじゃない、カチヨ一はやると思ったらやる。猛ダッシュで二階に駆け上がり、自前のTシャツと短パンに着替えて階段を駆け下りた。

「……っ」

「へ？」

「白は駄目だ」

「ほ？」

「あと足をあまり見せるな」

「にゃ？」

ダメ出し、キター！

えーなんでー?? 抗議の声を上げようにも、「五・四・三……」
とカウントダウンが始まったのでまたも猛ダッシュで二階へ！
に
よわあああー！

なぜにいいいっ!!

え、白じゃダメって事なのかな？ Tシャツは問題ナシなのかな
??

ふと窓ガラスが反射した自分の姿を見て……ちよつと納得しちゃ
いまシタ。うほー、透けてるザマス！ こりゃこっぱずかしー！
カチョー教えてくれてせんきうべいべー！

「これでどですか？」

「いいだろう。ほら、俺にもよこせ」

「軍手？」

「片手もあれば足りるだろう」

黄色のTシャツと深緑のジャージクォーターパンツに着替え、帽子を被りいざ外へ出ようとしたらカチョーも一緒に草取りする、と！
いつの間にやらカチョーも黒Tシャツに黒のハーフパンツとラフな格好に着替え、頭には白タオル巻いちゃってやる気マンマンです

よ！　そして色気もムンムンですよ！　おかーさーん！！　ワ
タシ、生きててよかったー！！！！

あああ……いいよね、頭にタオル巻いちゃう系の。

『　文字に出来ない何かしらの展開　』

うへへ……と脳内ピンクで妄想していたら、カチヨーの軍手じゃない左手が私の頭を鷲掴みに……！！

ギチギチギチーひっ、アイアンクロー？！

「かああちよおおおーっ！！！」

「さっさとやれ」

「……………あい」

ぶちっ。

ぶちっ。

ぶちっ。

ぶちっ。

「……地味だな」

「草取りに地味も派手ありませんよ」

それでもカチヨーは力強く根っこを引き抜いていく。几帳面に端っこから段々と。え、私は大きなのをバシバシ抜いていきマスよ？

「あ、カチヨー、それ抜かないでくださーい」

「これか？ 雑草だろ？」

「いいえ、ネジバナって言うんデス」

小さなピンクの花が、茎にそってネジ山のようにくると巻いて咲いている可憐な花。これは可愛いので取っておきたい。あとニワゼキショウと、ハナニラと、ヒメオウギ。

「これはデスネ、なんと一株三百円は固いデスヨ？ 私の家には群生してますが、土のない都会ではなかなかお目にかかれない一品なのデス」

ただニワゼキショウは半端なく増える。少しだけ取っておき、後は引っこ抜いちゃいマスがねー。

「私の住んでいる所は田舎なんで、えびばで草取りなんデス。むしろ草と暮らしてるみたいなの？ そんな中にも可愛い花が沢山あるので、つい集めて咲かせてーってやってマシタね」

ていうか、楽しいんだもの。

一時間に一本あればマシ状態の、バスのみ通る山に囲まれた超過疎地。コンビニ？ 商店？ なにそれどこの都会？ 都会に繋がる交差点に一台だけポツンとある自動販売機が逆に違和感という……。

ちなみに自宅から徒歩十分あります。

電話ボックスもなく、街灯は集落のメインストリート（といったいいのか？）に五十メートル間隔でほんのり灯る。一本道を入れれば、夜など全く見えず、本物の暗闇が体験できるのだ。このカチヨー宅と同じ市内とは思えない……デス。

「そうか、あの地域だからな」

「おー、カチヨーワタシの住む田舎、御存知なのデスカ？　うちはじーちゃんが山持ってて、農業してて。私も繁忙期はお手伝いするのデスヨ」

田植えも、山菜取りも、色々。イノシシ、クマ、鴨。鰻に沢蟹にスッポンなんてのも捕れる超田舎。隣組はもちろんだし、集落で固まって墓地もあり、何かありやご近所ごと集まりがあつて。いわゆるヨソモンには辛い土地柄かもしれないけど、少しでも関わりがある者には村全体で受け入れてもらえる、そんな所なのだ。

相変わらずぶちぶちと匍匐性のある根っこの厳しい雑草をてりやーっと引っこ抜きながら、口は動かすワタシ。大事なのは隅っこに植えなおし、ぶちぶちぶち……。

「ま、今日はこの位にしてやろうではないか！」

「阿呆。素直に疲れたといえ」

拳の裏でコツンと頭を小突かれた。存外優しいので、ちよつとは労わってくれているのかのう。あたしゃー腰と足がボキボキよ。

「マダラハゲの様な草のむしり方するんじゃない！ 少しは丁寧さを覚えろ」

「細かい事いいっこナシデス！」

「いいっこじゃなくて一方通行だろうが」

大きなゴミ袋三つ分にもなったのをぎゅうぎゅうと口を縛っていたら、カチョーが私の後ろの方でボソツと。まるで聞きとれなかったら、それはそれでいい。そんな声色で呟いた。

「――お前の家族は……皆元気か？」

あれ、普通の事聞いているんだよね？ 誰でもどこでも知らない人でも聞くような、単なる質問。でもなんで？ どうしてそんな切なそうな声を出すのデスカ？

後にいるから、表情が読めない。

だけど、振り返ってその姿を見る気にはとてもなれなかったのデス。

頭に白タオルはイケナイスイッチが入りマッス☆(後書き)

今夜18時 妄想部更新でっす！

テーマ「梅雨」

http://mypage.syosetu.com/1444526/

魔の手から死守せねばなりましえん！」

「で、何故に……」

「へいお待ちっ！ ユリちゃんいつものセットだ！」

ダンダーンと荒々しく（接客業にあるまじき勢いデスよね?!）
テーブルに並べられたのは、きくらげトンコツラーメン、餃子、白
ご飯。

「ほら、伸びるぞ」

「ああっ、はいはいはいっ！」

ずぞー。もぐもぐもぐ。

……。

あれっ、今ワタシ流されましたよね、逸られましたよね。いや
いや、私だってね、うん、この私だってさ、気付くんですわヨ！
あのナゾな台詞のあと急に思いついたかの様にカチヨーは「ラーメ
ン食いたい」とか言っちゃってー！ 言っちゃってー！（よく分か
らないけど二回言ってみた） またもこのおやっさんのラーメン屋に
来ちゃったのでごさいマスるよ。

相変わらず油でべたついた床と丸椅子とメニュー表。前回来た時
と同じ週間漫画雑誌がそのまま。ちょ、おやっさん、ここは更新
しようよ！ あの話あのキャラの「なっ……お前は！」の後が気に

なって仕方がないデス！ 恐らく行方不明になってた主人公のライバルが登場したんだろうシルエットでしたが、だからといって買うほどではないのがまたなんか悔しい。

『――お前の家族は……皆元気か？』

手と口を一生懸命動かしながら、ラーメン餃子白ご飯と三角食ベをする……んだけど、どうしてもどうしてもさっきのカチョーの声が耳に付いてはなれないのデス。

どうして私の家族の事を？

聞きたいけれど、こちらからの質問じゃなくて返事だけを待っている気がしたので。

『家族、みーんな元気デスよ？』

『六人家族だったか』

『そうですケド、え、何故に御存知……』

『――そうか』

で、ラーメンかいな。意味わかんないやい。

目の前のただ黙々とラーメンを食べるカチョーをこそっと盗み見る。普段ですら仏頂面なのにより一層。いやいや寡黙な男というかそういうお姿もステキなのですがね。いかんせんちょっと怖い。何故か怖い。怒ってるわけではないのに、ウツカリなにか地雷を踏みかねないような危うさを感じてしまうのデス。

ほ、ほら、私ってば敏感で繊細ですしいー？ ちよつとの変化に聡いのデス！

「ユリちゃんよお、すまねえな今日飯がちよつと柔らけえら？」

「え、いつも通りじゃないのデスカ……」

「いやーそれにしても入れ違いだったな！　ついさっきまでユリちゃんちの家族も食べに来てたんだぜ？」

ギャー！　おやっさんタイミング悪いし！

二つ地雷踏みやがったぜおやっさん！　今まさにこのタイミングでそれ言うなああー！

ぎぎつと睨んだのを、おやっさんは何を勘違いしたのかベラベラ喋りだす。

「今日は珍しく五人で来ててなあ」

「え、あおいに葵兄いも？」

「おう、珍しいよな！　いつ帰国したのか知らねえが。ユリちゃん聞いてねーのか？」

ちよ、マズイマズイ。あいつ帰ってるなら隠して置かねばなるまいよ！　私のお宝たちー！

「兄貴が帰って来たのか」

おいおいなんでワタシに兄がいるのを御存知なのデスカ？！　ちよーいお待ちなすってえ！

いやでもその前に色々……おおお宝！

動揺する私にカチヨーはなんだと目で促した。

「葵兄がいるってこたあデスよ？ 私の大事な大事な大事なこと……」

「大事なほういい」

「大切な貴重な珠玉な珍重な虎の子の……」

「分かった分かった」

「とにかくキケンなのデッス……！！」

両手で井を持ち上げスープをグイッと飲み干した私は、ターンとテーブルに置いて立ち上がって拳を突き上げる！

「死守せねば！ カチョー、私ちよっくら家に行ってくださいマス！」

「どうやって」

「はっ！」

そうデシター！ カチョーの車で三十分かけてやってきたこのお店。店から近いっちゃ近いけど、ここから大きな川に架かる橋を越え、更に奥にいったのが私の家……。

ここらで『近い』ってのは、車でって意味なのデス。一家に一台じゃなくて、田舎では一人一台。それがなくてはどうにもならないのですからね。

私も一応免許を持ってマスが……ええ、身分証明書に成り下がって……。いやいやでも行かねばなるまいよ、兄の魔の手から逃れる為に！

「カチョー！」

「なんだ」

「止めないでくだサイツ！」

「まだ何も言っていないだろう」

「じゃあ行ってきます！」

「接続詞も何もかもすべてがおかしい。——まあ待て」

そう言つてカチョーはおやっさんに代金を支払い（またもゴチソ
ーに！）おやっさんの「ありやとやしたー！」とのダミ声を背に店
を出たカチョーは。

にっこりと。

それはそれは綺麗な笑顔で言いやがりマシタ。

「家に送ってやる」

ぎよわー！　　なんか怖いいいいい！！

家族総出でご挨拶、デス！（超予定外涙編）

「で、何故に……」

「ハハハハハ、そうですか課長殿課長殿。それでユリ子はしっかり仕事していますかね？」

「ええ、まだ新人ではありますが業務内容をいち早く覚え、与えられた仕事もきちんとこなす努力家だと私は思っております。他同僚達の評価も高いですよ」

「おおー、かあさん聞いたかオイ」

「まあまあ！　こんなユリ子ですが社内の方に失礼していませんか？」

「ええ、社の者もユリ子さんの明るさに癒されております。特に女性からは可愛いがられていますね」

「アホユリも会社じゃ何枚猫の皮被ってんだかわかんねーな」

「これ葵！　そんな事いうでねえよ」

「まーんず、この葵はおだっくだけえな」

どっ！

アハハ……アハハ……

ナニこの拷問。

私以外カチョー含めて和やかに歓談してイマス……。なぜこうなった……。

いやいや、まず最初が悪かったのデスよね?!　まずそこからデスよね?!

カチョーが『送っていく』との有無を言わせぬ発言にうつかりハイと頷いたが最後、あれよあれよと教えてもない自宅への道のりを運転しなすってだね?　ハラハラしている間に自宅前に到着してだね?　丁度自宅前の畑で収穫作業してたじーちゃんばーちゃんが「おやおやユリ子じゃにやあだか。それと……」言いながらカチョーに目をやると、何故か二人ともニツコリ笑って。「ほーっ、あのユリ子が『上司さん』と一緒になあ。ほいだったら、ちいっとうちでお茶飲んでってやあ」なーんて、カチョーをぐいっぐい引っ張って自宅へと連れてってしまいマシテ……。おおお?　ま、まさかの展開デス!　ちょ、お氣遣いしないでいいのおおおお(タスケテー)

日本家屋そのものの建築様式で平屋の我が家。玄関脇には縁側があり、引き戸の玄関を開ければ土間がある。土間からやや高い段差を昇れば和室があってそこにちゃぶ台が置いてあるのだ。ちよっとした応接間的に使う部屋なのデス。

昔は囲炉裏があったらしいけど、葵兄いが扇風機を灰に当ててえらい惨状になったらしく封印された……という歴史が私の産まれる前にあったと聞いた事がある。

そのカチョーを、じーちゃんばーちゃん、そして声を聞きつけておとーさんと葵兄いが取り囲むかのようにずらりと座った。

いえ、その時までは私一緒にいたんデスけどね。おかーさんと炊

事場（土間続きでしかも土足でしかもガス台あるけど竈まであるってんですから、キッチンみたいなハイカラネームは言えにやいのデス！）にてお茶の支度とお茶請けの用意をしていたのでねっ！

あああ……それより前にお宝ををを……。しかしおかーさんにも極秘ですからね、なるべく平静を装い、隙を見て部屋に駆け込まねば！

「ユリ子。湯のみ用意してね」

「う、ういっす！ あ、ねえおかーさん。葵兄いはいつ帰国したの？」

「今日よ。うちに着いたのは……二時間ほど前かしら」

「じょおっ！ ついさっきじゃん！ とんと音沙汰なかったのにいきなり帰国ってなにさ！」

葵兄いはヨーロッパ辺りでなんかやっている。いえね、私聞いても興味なくてデスネ。ていうかあの兄貴がまさか海外で仕事するなんて……こんな田舎からだとなんな都会風を考えにくくて馬耳東風してたんすよね。

しかし海外だと滅多に帰国する事も無く。

これ幸いとお宝を好き放題パラダイス帝国ルームを築いていたのが……油断大敵なのデス！

「カチョーお待たせ致しましたのデス」

まずカチョーへお茶を置き、後はお菓子の入った籠とお漬物を盛った皿など盆ごとテーブルの真ん中に置いた。みんな好き勝手に手を伸ばし、自分専用の湯飲みを手に取りずずつと飲む。

「袴田さんや、このおこうこはオラが漬けたでね。たんと食べてな」

「はい、頂きます」

「昼飯は食べていねえなら、こさえるけえが？」

「先ほど、ユリ子さんとあのラーメン屋さんに行って食べて来た所ですよ。丁度皆さんが帰ってしまったばかりだと店主が言っておりました。こちらでご糞にされてるだけあって、とても美味しかったです」

「ほおか！ あの店はちいっと汚なぼったいけえが味はええら？」

「つい間を置かず行きたくなりますね」

かあちよおお！ 何その爽やか笑顔風味！ ベ・つ・ずい・ん！！ いえね、一緒に生活していてふと浮かぶ黒い笑顔を見慣れてきた私としちゃあ、今すぐ土下座して謝ってハダシで山に駆け込みタヌキと暮らしたくなるような、まさにそんな二枚目笑顔なんデス！

元々かなり作りのいい面立ちをしていて、更にその笑顔というオプシオンつけたら破壊力抜群デスヨ！

見目もよく姿勢も美しい。これはなにか？ 銀行マンとその顧客、または道に迷った都会のお坊ちゃんが一晚の宿を求めて、またはここも再開発の為立ち退けとか最後通告に来た御曹司・続編っていう構図にも見えマスね！

おとーさんとじーちゃんはお茶で喉が潤ったらしく、より一層話

に花が咲く。カチヨーは如才なく受け答えして、たまに質問も挟むなど会話上手なスキルを如何なく発揮し話が途切れない。むしろ私いなくてもいいよね、みたいな。

よっしゃあこの隙にい！ とばかりにコソコソと場を離れ自分の部屋へと足音立てずに向かいマス……。

私の部屋は二階、といってもここは平屋。屋根裏を改造して個室をげっちゅうした我が城なのデス。狭いっちゃ狭いデスが、天井が高いのでそれほど窮屈さは感じません。

やや急な階段を上り、ドア代わりのカーテンを開ければ。おおう久し振りの我が城！ 皆無事でしたかーっ！！

お宝達の無事を一つ一つチェックしていたら、後から声がかかった。

「おいユリ」

「んぎゃっ！ あ、葵兄い！ ちょお、れでいーの部屋に入るたあシツレーじゃないかああ！」

確実に十センチは飛べたと思いマスっ！ うひょおっ、心臓の鼓動止める気か！

「ばーか！ レディーってタマか！ 世界中のレディーに失礼だ！ 詫びとして世界中の女性達に足向けて寝るな！」

「どうえっ！ 直立で寝ろと？！」

「いーや、それだとブラジル辺りの人に失礼だ」

「地球突き抜けても許されないのかあっ！」

「逆立ちで」

「鬼ーーーーっ！」

くううつ、年齢が少し離れている二十七歳のこの兄に口で勝てた試しがないっ！　そして兄の意見は絶対として私の上に君臨している……ので会った瞬間敗北は決まったようなものデスが、なんとしてもお宝だけは死守せねばなりませんッ！！

――過去に。

そう、この葵兄いは私のコツコツと溜めてきたBL本（今、超おふれみあ商品となってますわよ？）を私の知らぬ間に処分したのだ！　なんでも『BLありえねえ！』と個人的かつ勝手な言い分の元にバツサバツサと……！　ああああ……（涙）今回もその恐れがあったので、魔の手が伸びる前になんとかしようと部屋に來たのデス。

「バカ兄い！　私のお宝捨てないでえっ！！」

「うるせー！　この家に存在してるだけでありえねー！！」

ズカズカ入り込み、私の本棚を一瞥。うつ、葵兄いがいないから安心して普通に並べてたわああ！！　こ、ここはもう最終で最強のカードを切るしかあるまい！　兄の友人から聞いた、そして兄の本棚にある小説と漫画から推察された趣味思考をばっ！

「ちよっ！　人の趣味どうこう語るのかその口で！　この貧乳口
り顔好きめ！」

「……っ！！　な、なーぜーそーれーをおおおーーーー！！」

一瞬くわつと目を見開いたかと思うと、一気に掴みかかってきた！

「ぎゃわーーーーー！ーーーーー！」

こええー！ まぢこええー！！ まさかの正解ど真ん中だったー
ー！！！！ ひいいっ、また牢固めか？ コブラツイストか？！
葵兄いの般若な形相に本気で震え上がって、目をぎゅっつつぶっ
てしゃがみ込んで……で……。

あり？

来るものと思っていた攻撃がない？

おそろおそろ見上げてみると、そこには。

葵兄いの手を押さえているカチョーのお姿がありマシタ。

「妹とはいえ、女性に力で物言わすのはいただけないな」

うをいカチョー！ アナタが言いますかっ！！ ででで
こぴんとかっ！ アイアンクローとかっ！ 色々ワタシにかましま
したよねっ？！

思わずぽかんとカチョーを見るが、どこ吹く風だ。全く自分の事
は顧みないらしい。ほんつとスバラシイ性格してますネ！

ガツチリとカチョーにホールドされている葵兄いは、嘘くさい笑
顔を張り付かせたカチョーに食ってかかった。

「おいっ！ 放せよっ！ 大体俺が急に帰国しなきゃ行けなくな
ったのも、けいご……」

「ふむ。葵君にはまだ話通っていないようだ」

「ふんっふんっ……！」

カチヨーは葵兄いの両頬を片手で抑えて、『口がブチュー』の形に固定した。うをー！　アホ面！

私は二人の会話を聞いてはいたものの、その葵兄いの顔が面白すぎてつい流してしまったヨ！　だ、だって、ブチューの口だよ？　横から見たら『3』だよ？！　げっへっへっ！！

「ユリ子はどこ？　あら袴田さん、こちらにいらしたのね」

騒ぎを聞きつけたのか、おかーさんがカーテンをヒョイと開けて顔を覗かせた。カチヨーはおかーさんに少し眉をひそめて苦笑交じりに頬をギューンと掴んでいた手を離れた。

「すみません、葵君によろしくお伝え下さい」

「あ！　そうだったわおほほ、じゃあ先に下に降りて待っているから。ほら、葵行くわ、よっ！」

おかーさんは「よ」の所にドスの効いた声で威圧し、葵兄いの掴まれたほっぺたに動じることなく「あらゴメンナサイね」と余所行きの笑顔で兄の腕を強引に引っ張る……え、なんなのこれ。何か言いたげに口を開こうとする葵兄いに「それは下でね」と睨みを利かせ黙らせるおかーさん。え、ちょ、ね、待って待ってー。私の知らない所で何かあるの？

でも取り残された私に、たった今聞ける相手はカチヨーのみ。ーうん、無理無理。絶対ナイ。これ聞かない方がいいと思う。うん。そうだよ。うん！（無理矢理納得しまシタ！）

四葉のクローバーとアレの反則技デス！

「……何か聞きたそうだな」

にゃにーっ！　せっかく、せっかく頑張って押し込めたのに何故わざわざ掘り返すかな！

そりゃー聞きたいことなど山ほどあるさ！　え、えっと、なんだっけ。最初から全部聞きたいけど最初を思い出すのに……ちと時間がかかりマス。

「残念、時間切れだ」

「早っ！」

ちよっとー！　聞いてから二秒ってどーゆーことデスカーっ！！

「待ってくださいえ！　じゃじゃじゃあ、葵兄いとは知り合いだっただのデスカ？」

ついさっき……確かに葵兄いは「けいご」と口走っていた。それ、カチョーの名前では？　袴田圭吾——袴田課長とは私から言ったものの名前までは私言ってマセン。それにこちらの家族サイドからは、どうも『初めまして』の雰囲気じゃなかったよう……？？

「答える気分じゃない」

「ぬわんじゃそりゃあああつ！ き、聞けといたくせにーいいい」

「聞きたいのはお前の都合。答えないのは俺の都合で、俺がそれを優先させる。そのどこが悪いんだ」

「わー！ なんて滅茶苦茶な言い分！」

くおおー葵兄い以上に口で勝てにやいつ！ もう早々に白旗デスとほほ……。

シヨボーンと肩を落とした私をよそに、カチヨーは私の部屋をぐりりと見渡して小さな机とセットになった椅子に座る。おおう、カチヨーが座るとなんていうかギャグみたいデスネ。ワタシには丁度いいサイズの椅子は、カチヨーの大きさにはかなりの不釣り合い。寸での所で噴出すのを堪えた私エライーっ！

「……これは？」

カチヨーが、私の机の上に飾ってあったフォトスタンドをヒョイと持ち上げた。それには昔の私が写った写真と四葉のクローバーが挟み込まれている。

「あ、この写真はー……えーと、何歳だったデスかね？ 小学二年生の頃かなー？ まあいいじゃないですか。大事なんデスから触っちゃ……」

手を伸ばしカチヨーの持つフォトフレームを取り返そうとしたら、その手首をつかまれた。くいと引っ張られ「んぎょおっ」と体勢を崩す。

ぎし、と椅子が悲鳴をあげた。

「あのお、カチヨー？」

「なんだ」

「離してください」

「やだ」

やだって！ 子供かカチヨー！

今の私は、ひっじょーにマズい場所に乗っている。椅子に座る、カチヨーの、上ー！ し・か・もー！ まるでしな垂れかかるかのようにカチヨーの胸に頬当ちゃってー！ 当てちゃってーええっ！ どひー！！

モゾモゾと、どうにか離れようと動いてみるけれど、床から足も離れていているし手首も掴まれている為にどうにも……ん？ あれ？

「カチヨー？」

「今度はなんだ」

「なんか足に当たってマ……ス……」

「気にするな、生理現象だ」

涼しい顔してさらりとすごい事言ってますよカチヨー！！

「確認するか？」

「ぎゃおーおーっっ！！」

今度こそあらん限りの力を振り絞ってカチョーから飛びのいた。
いやいや、なにになに、えをうをう。動揺を隠せないまま、とにかく
何らかのフォローがいるだろうと口を開く私。

「カカカかちょう、そうですね、そうですね、そうなんデスヨ！ 私
知ってますから！ 自然になんてよくあることですよホラ毎朝とか
おっ起つ……」

スコーーーン

「にぎゃああああっ！！」

大事なフォトフレームの角を脳天に落とされたーーーーっ！！
ぼ、暴力反対ーーーー！！！！
ズキズキと痛む頭のテッペンを押さえながら非難の声を上げるが、
いつものようにカチョーはどこ吹く風だ。

「少しは恥じらいを持て阿呆」

フンと鼻で笑いフォトフレームは元の位置へ戻したカチョー。ガ
タツと音を立てながら椅子から立ち上がり、私の頭をワシワシと片
手で荒々しく撫でる。

ちょ、なに、えっ？！

ナニゴト！ と目を白黒している私に顔を近づけたかと思うと、
ふわっと優しい口付けを残して「赤い顔色引いてから降りて来い」
と階下に行ってしまった。

え、えええええ？ ちょ、ねえ。ねえねえ。キスへのハードル、
随分下がってませんこと？？？

部屋の隅にある姿見には、真っ赤に顔を染めた私がいた。うをお

おおお、乙女か！　ワタシ、乙女かつ！！　カチョーにキスされ、カチョーと抱き合い、カチョーのアレがアレで……っておいおいおいー！

アレなんてBL本にてよーーっく御存知ですわよワタシ！　いやモノホン知らずですけどね。ぐったりなったり元気になったりみたいなの、それなりの知識はゴザイマスのよオホホホ。しかーし！　いざ現物って、どうなのさ。

足に当たった感じ……こう、かた……ぎゃあああああああ！！！！

再び頭が沸騰してジタバタ悶えて、暫く部屋から出られませんでした……。

四葉のクローバーとアレの反則技デス！（後書き）

「妄想部」

http://mypage.syosetu.com/1444526/

8月1日18時投稿。

抱っこでご挨拶デッス☆

それからだーいぶ時間が経って。

平静と思えるまで、部屋の中で随分色んなことシマシタよ！

イモムシしたり、紙袋に空気入れてパーンって叩き潰してみたり、三百ページにも及ぶパラパラ漫画描いてみたりね！ 滑らかに縄跳びする糸人間。ちよつと達成感。

通常営業だとやつとこさ思えるまでになったので居間に下りると、そこにはおかーさんに葵兄いが膝詰めで説教されている所だった。え、ひよつとしてあれからずっと？ ここにはこの二人だけで、他の家族はどうやら野良仕事へと散っていったらしい。

「あれ？ おかーさんカチョーは？」

私の声に顔をあげたおかーさんは「お散歩に出られたわ。ユリ子も行つてらっしゃい」と、満面の笑みを浮かべた。おおう？ なにか逆に怖いデスネ……。その横にいる葵兄いまでもがニタニタ笑つてて思わず「気持ち悪っ！」と零したら、ギロリと睨まれてしまっておっかないので慌てて外へと飛び出した。

車が一台も通らない細い農道を、ヒールの低いオサレ靴でコツコツ音を立て歩く。ふわふわのシフォンが風に揺れる小花柄のスカート。ピンクのカシユクールなプルオーバーの服を身に纏うワタシはちよつと違和感ある田舎道ですな！

髪もトリミングされてメタモルったワタシに、家族の皆は何故か何も言わず……そこ、あえて触れずみたいな空気耐えられますえーん！ でしたよ（涙）

かろうじておかーさんが炊事場でお茶の支度しているときに「それ、似合うわよ」と言ってくれたので救われマシタ。

それにしてもカチヨーはどこまで散歩に……？ この集落のメインストリートともいえる道を歩いてみても、あの無駄に存在感溢れる存在は視界に入ってこない。うーむ、こうなったら……。

「カチヨー！ どっこでっすかー！ー！」

と、何度か大声上げながらウロウロしてたら、コツンと背中に石……じゃなくてこれは……？

「茶の実？」

「大きな声で呼ぶな阿呆」

山の傍の木立からガサガサした音がしたと思ったら、カチヨーがのっそりと現れた。おいおい何でこんな所から！ 散歩じゃねーえ、探検だ！

「冬眠から寝坊したクマ……っ、ぎゃんっ！！」

おちやめにクマに例えたら、カチヨーは手に持っていたお茶の実をバラバラっと私の背中に入れた！ ぎゃああ取れないいいい！ ちよ、まって、なんで下着の中まで……！！

着ている服の下には滑りのよいキャミスリップを着ているので、スカートのウエスト辺りで実がごろごろと……カチヨー、子供か

！

「あ、へびがいるぞ」

「ほぎゃああああつ！！」

茶の実に氣をとられていたら、カチョーがひよいと指をさしたその先に。波打ちながら滑らかに移動する細長い紐状のアイツが！！ぴよーーんとカチョーに飛びついて、とにかく地面から離れた。

「お前……まだへびが苦手か」

「その名前出さないでくだああサイいいいっ！」

ほ、細長い、紐！ それで！
昔からダメなんデスよ紐が！ 苦手で怖くて。そう、例えていうならば……！！

「タマが縮む思いデスっ！」

「付いてないだろうが」

「あくまでも気分デス！」

は……と短い溜息を吐いたカチョー。その割に、抱きつく私を優しく抱き直して背中をさする。……うん、優しいなと思いつつ、たまにゴリゴリするのは茶の実デスネ……どこまでも厄介な！

カチョーは私を抱っこしたまま集落の端の方へと歩き出す。あ、ここは。

「カチヨー、降ろしてくだサイ」

「どうした」

「お参りするからデス」

「このままでいいだろう。俺も挨拶しようじゃないか」

「ちょ……！」

言葉通り、私がジタバタした所でカチヨーの腕はガツシリとホルドされてて動けまちな。くそう、なんなんだカチヨーめ！

細い細い道を分け入り、たどり着いたのはこの集落の共同墓地。ここにはひいじいちゃんひいばあちゃんが納められているのだ。小さすぎておぼろげな記憶だけど、可愛がつてくれたんだ。お彼岸だけじゃなくて、近くだから立ち寄りついでに挨拶したり、ちよいちよい家族で掃除したり。近所の皆そうだから、そう言うもんだと思ってたな。

非常に不本意なポーズでご挨拶……抱っこのままって、なんだか罰当たりな気がしないでもないけどもですね。

——ユリ子来ましたよー。私の勤め先の上司の袴田カチヨーですよー。こんな格好でごめんなさいー。

目を閉じ心の中で報告を済ませ、ふと視線を上げたら。カチヨーはじつと滝浪家の墓を見つめていた。一瞬だけだけど、どこか辛そうな……そんな複雑な色をその目に滲ませて。だけど、あつという間に『カチヨー』の表情に戻り、私を見下ろす。

「さあ、家に帰るか」

「……ほ？」

「お前の作る夕飯が食べたいんだ。行くぞ」

「……へっ？ はっ？ ひょっ?!」

そしてそのまま車に乗るまで、抱っこされたままデシタ……。な
んなのさその思わせぶりはーっ、カチョー！

抱っこでご挨拶デッス☆(後書き)

お茶の実って分かりますかね？
とある地方の田舎の畑では転がってます。

それから本日公開！

「妄想部」

http://ncode.syosetu.com/s3786
a/

気付いたけど気付かないフリのオトナなワタシ♪

カチヨ一の家に着いて、体力やら精神力やらなんかもうデロデロに疲れて、ご飯食べ終わって片付けたあと座ったソファーにて寝オチしてましたネ……。

あの抱っこ状態で帰った時の、おかーさんと葵兄いの視線の温いぬること温いこと。そんな空気をあえて読んでいないようなカチヨ一は「お邪魔致しました」と、私から見れば嘘くさいことこの上ない笑顔で挨拶を済ませ、さくつと車に乗り込み帰宅したのだった。

「っっていうか……」

嗚呼。もう何度目でしょうか。

パジャマに変身してますね。そして何故か……下着も変わってますね。ブラなしで。あと、やけに肌がサッパリしてますね。これは何か？ 私、寝ぼけながら風呂入って着替えて布団についたとでも？ いや、しかし、まさか……！ ダメ、それは……！

——考えたら、負け。

うん、そうだよね。そうそう。なかったことに。見なかった事にしましょーよ。

さて起きるかー。(平坦)

本日は日曜日なのです。どうやら快晴！ カーテンの隙間から零れる日差しはこれからやってくる夏の気配がビンビンなのでっす。

ううむ……このカチョーの家で過ごすようになって三回目の日曜日のデス。なんだろうなあ、こんなどっぷり慣れちゃってとてもヘンテコな気持ちだわー。

仕事したり、家事したりで疲れてもれなく寝るのが早くなる。つまりそれは原稿描いたりBL本読んだりのニヤニヤ妄想タイムが減っているっつーことで。

でも何故かそれが耐えられないとは思わず……。いや、好きは好きだけでもね？ 実家で暮らしていた頃のどっぷり妄想に浸っていた自分と同じ様にしなくても別段困らないという事実。

——オトナのオンナに近づいた、ってことですかね？ ムフフ。

オトナはオンオフの切り替えが上手なのですヨ。余裕シャクシヤク☆そんな自分になれてきたんでしょーねっ！ かえってこの生活にさせて下さった（脅迫ではあるけども）カチョーに感謝デスね！
いやっほい♪

そうそう、オトナのオンナといえバリーダー。できればリーダーの様になりたいッス！ あのスんばらしいー色気溢れる『美女』っぷりに、いつも堪能させて頂いておるのですよ。男同士の絡みは好きですが、リアルでの美しい女子を眺め倒すのも大好きなのです。そう、腰のくびれとか、下乳とか、うむうむ。温泉行ってガン見したこともありましたっけねー……。

いやいや、いい加減布団から出ないと。うおりゃっと起き上がり、とりあえずおパンツとおそろいのブラジャーを装着。そして乙女趣味全開の下着姿のままクローゼットを開ける。ううむ、なかなか慣れる事のない陳列ですわね。いわゆるモテ服ふえみにく〜ん群。アマゾネスが用意したファイルをペラペラ捲りながら、今日の予定を思い出しつつ着る服を選ぶ。

「しっかしホントーにふえみに〜ん☆デスネ。ふわふわのぽわぽわで、清楚なのか可愛いのかはたまたそのミックスなのか」

髪型もゆるふわパーマで、こりゃ花畑や波打ち際をウフフアハハではしゃいでも違和感ねえなっていうビジュアルなのデス。顔除けばモテ女子になれるかもデスな！

「ユリ、入るぞ」

がちゃつと何の前触れもなしに開いたドア。カチヨーがのっそりと入って――。

「ぎゃあああつ！ カ、かちよおおおおうーっ！！」

「着替え中か」

私は開け放ったクローゼットの前で、パンツとブラだけ。そしてファイルを正面に持って仁王立ちしてたのですよ？　ちよおつ、ちよおつ、ちよおつとまてえいっ！！

「カチヨー！」

「なんだ」

「減りますっ！」

「減らない」

だいぶ言葉を省略した私の抗議にも間髪いれず返事を入れるカチヨー。こ、このおおおつ！

「いやいやいやいや、なんか私に言う事あるじゃないデスカ?!」

「似合ってるぞ」

「ちっがーうー! ちょ、バッチリ見てるじゃないデスカっ!
! 下着デスカ? 下着褒めたんすか?! ほほほ褒められても
嬉しくないデスっ!」

確かにメタモる前の私だったら、上下色柄別って良くある姿だったけど!

「カチョー、その前に、いや、後でもどっちでもどうでもいいんですけどっ」

「つまりなにがいいたい」

「なま、な、名前……で呼びましたね? 呼んじやいましたね?」

このような関係になる前。会社では『滝浪さん』と呼んでいたカチョー。しかしBL本がバレた後は、おい、お前、あのな、ちよつと……が私を呼ぶときの言葉だった。

しかし、ここに来て名前呼び? 『ユリ』ってー! 下着姿なのも忘れてカチョーに詰め寄る。

「何故名前で呼ぶのデスカ?!」

「違う名前だったか?」

「いいえ合ってますケド……いや若干足りない字もありますが……」

「合っているなら問題ないだろう」

「おごっ……」

なんデスかなんデスカ。またいいように言いくるめられた気がしまっす！ 確かに人の名前なのであって呼ぶ呼ばないは自由であって、更になんつーか家の名前ではなくて私個人を呼ぶに当たって順当というか別に呼んでもかまわないのだけど、いやいや、なにか。そう、なにか一歩踏み込まれた、一歩私を覆う枠の中に入り込んできた、そんな気がするのでゴザイマスですよっ！

「とりあえず服着ろ」

それだけ言い残し、扉の向こうに消えた。

「とり、とりあえずってー！ カチョーが邪魔したんでしょーがっ！ー！」

今更ながら羞恥心が湧き上がり、体中カッカと燃え上がらんばかりに赤くなって抗議の声を上げようと、息を吸い込んだその一瞬。私の心にひゅうつと凍て付かんばかりの現実が急に差し込む。

——もう、三回目の日曜日。

こういう時間がもてるのって。カチョーとこういう時間がもてるのって。

あと半分で、このちよつと変わった同居が終わりになるんだよつて現実を、いきなり目の前に突きつけられた気がした。

ぼっち、満喫☆

「……………で……。ユリ、聞いてるか？」

「ほわっ！」

目の前で手の平をヒラヒラ振られ、驚いた私は三センチ飛び上がった。おっと、全く聞いていませんでしたぜ！

さっき気付いたタイムリミットに、自分でも驚くほど喪失感を覚えた……のデス。

この時間、この空間、この生活が——なくなる。

いえね、むしろそれが当然なのデスよ。ずっとずっと、普通にそうやって暮らしてきたんデスよ。この状態のほうが異常だっつーね。胃の中に漬物石が入り込んだかのようにずどーんと重くなり、食欲は失せましたが、茶碗によそってしまった以上お残しはしたくありません。機械的にぼそぼそと口に運ぶ。

「……ユリ？」

流石に様子がおかしいと思ったのか、カチョーが心配そうな顔を私に向ける。だけでもさ、こんな気持ちどうやって口にしたらいいのか——いやするべきじゃないのデスよ。だってこれペナルティからくる『三つの条件』の内の一つデスからねっ。

一、見た目を変えること。

二、家に住み込み、家事全てやること。

未だに謎のままの条件三は、この同居生活が終わるその日に伝えられるはずだけでも。

その一、二が。更に、何故かカチヨーと暮らすのがとてもとても居心地がいいだなんて、いえない。

会社では単なる上司と部下。しかも私新人。

年齢だってそうデスよ。カチヨーは三十一歳、私二十二歳で九つ違うのデス。学生時代だったら決して交わらない年齢差。オトナ過ぎてカチヨー良くてステキ過ぎて……絶対に、こんな暮らしが送れるはずもない相手。

もっと、ここに、住みたいな……。

——ん？ え？ いやいやいや。何考えてるのワタシ！ 単にさ、カチヨーモデルにしたBL本見つかったちゃって、それを脅迫材料として着せ替え人形代わりや家政婦代わりにされただけじゃないか。何を考えてるんだ全く！

「何でもありませんよ？ ちょっと妄想してただけデス」

混乱する脳内を悟られたくない。ぎこちなく笑顔で応えれば、何故かいつもBLシチュ妄想でデヘデヘしてる私に、激しいツツコミをしてくるカチヨーが……何もしてこなかった。

ち、違い、分かるんっすか！？

「今日は用事があるから昼は要らない。夕方には戻る」

私の挙動不審さに気付いていないのか、カチヨーはとつくに食べ終えた食器を前に新茶を啜る。昨日おかーさんが持たせてくれたんだよね。カチヨーさんと一緒に飲みなさいって。

一緒に？ んっ？ とは思ったものの、そうか合宿だからカチョーもいると思ってるのかもしれないデスネ。

「はい。了解っす！」

カラ元気なのは分かっていたけれど、落ち込んでも喜んでも過ぎる時間は一緒なのだ。だったら限られた時間、楽しく過ごそうではないか。

無理矢理詰め込んだご飯をお茶で胃に流し込んだ私は、空になった食器を流しへと運ぶ。

うーむ、今日は何をしようか。

基本ルーチンの家事は終わってるんで、折角の「ぼっち」休日。お昼もぼっちなので、たまにや街中にでもウロウロしましょーかね。駅北の本屋に行って好きな作家さんの新作BL小説の発掘したり、漫画発掘したりと久し振りに趣味に走りましょ。そうなのだ、私の普段の休日とはこういうものなのだー！

あと……そうだ。カチョーに脅迫されてるのを差し置いても、どっぷりお世話になってるので何かしらプレゼントをしたい。なにがいいか……。

うーん、うーんうー……そうだ！ 灰皿デスネ☆あのすぐに山盛りになってしまう灰皿は、どう見てもその場のやつつけ仕事の灰皿デシタ。カチョーには二時間サスペンスドラマでよくある、鈍器の様な物と言わしめる重厚なつくりの灰皿がござんす。おセレブ臭なカチョーだけど。高級なのは買えないケド。お礼なのですよ、お礼。うん。

家の中の戸締りを確認して、玄関の鍵穴に合鍵を差し込む。カチョーから渡された一本の鍵。そりゃ、同じ家に住むに当たっ

て持っていなきや不便でしょーケドも、カチョーのいわばテリトリの固まりの居場所の鍵を私に託すって……信頼されてるって事でいーのでしょうかね。ちょっと嬉しかったんだ。

合鍵……合鍵……合鍵シチュもいいですな……。

『チャリ……と音が、僕の目の前で鳴った。

「これ？」

「ああ、持ってる」

若干ふて腐れたような態度をとるのは、彼が照れた時のクセだ。そんな些細な言動が、僕の心にざわりと撫で付ける。

「僕行かないよ？」

わざとそんな意に反する物言いをする。ふいっと横を向き、彼はどんな反応をするのか気配で窺うと、彼は……小さく息を吐いた。

ああ、もう！ 僕は彼のしゅんと肩を落とす、まるで捨てられた子犬みたいな可愛い所が大好きなんだよ！ 意図的に言葉で攻撃するのは、それ見たさなんだからな。僕は彼の手首を握り、引き寄せ……』

「つつおおおおっ?!」

気付いたら、目の前は壁デシタ。あつぶねーデス！ あと三十センチでおでこヒットすよ!!

妄想していたらいつの間にかやら目当ての店前で。生活雑貨を扱うお店で、件の灰皿を物色する。

うーむ、重くて、手に持ちやすくて、重厚な見栄えで、いかにも鈍器っぽいのは？ おーう、これぴったりデース！

そう時間もかからず見つけた一品はラッピングを頼み、ほくほくと紙袋を持って店を出る。カチョー、喜んでくれるかな？ カチョ

「何と言うかな？ カチヨーは……ってええ！ 何で私、カチヨーの事ばかり考えているのでしょっ！
いかんよいかん。ぼっち満喫中なのに、なんでカチヨーが出てくるんだ。」

気を取り直して丁度昼時という事もあり、エネルギー補充しようと、以前リーダーに教えてもらった美味しいランチのお店に行く事にした。八百円でオムライスとサラダとドリンクと一口デザートが出てくるのはとても嬉しい。

大勢が行き交う目抜き通りに面したその店は、ガラス張りのとてもオシャレな造りだ。店内の混み具合を外から窺った時、目に飛び込んできた光景に私は小さく息を飲んだ。

「え。——かちよ、お？」

朝、出かけていったカチヨーが店内にいる。そのテーブルを挟んで向かい合うその人は。

「……リーダー？」

なんで？

目標補足（前書き）

袴田圭吾課長目線

目標補足

「これがそのリストよ」

「ああ、悪いな」

「その心にもない謝罪なんて止めていただきたいわ。だったらもつと早くできたんじゃないの？」

テーブルを挟んで向かい合うのは、ユリの所属するサークルのリーダー、望月優実^{もちづき ゆみ}。日曜日の昼に呼び出されたのがそんなに嫌だったのか、それとも俺に呼び出されたのがそんなにも気に食わないのか。きつと後者であろうが不機嫌さを顔に張り付かせたまま、隠すそぶりもせずアイスコーヒーを飲む。休日の繁華街はいつもの様に雑多で、歩行者天国となった通りも人で埋め尽くされていた。昼飯ぐらい奢りなさいよと前もって言われていたので構わないが、「あ、すいませんーん。ここの一番高いランチセット、お願いね」と遠慮せず、その態度は返って好ましい。

俺は食事を頼まず、コーヒー二杯目を注文するにとどめた。

彼女がここなら、と指定してきたのは若い女性に人気のあるカフェだった。昼時には安価で美味しいランチセットを提供するらしく、いつも人で溢れているのは知っていた。いかにも女性好みの店の造りをしたこの店は、俺にとって、いや、子供を除く男性すべてはかなり居心地が悪い。恐らく単純に俺への嫌がらせに違いない。顔が利くのか、予約をしたうえテーブルも指定してあった。

くそっ、これも嫌がらせのうちか。

通りから丸見えの、ガラス張りの位置。指定された時間に行けば彼女はまだおらず、十分少々一人でじっと座る俺は好奇の目に晒される羽目になった。大多数は女性で、残りはカップルの女性が上げる声と共に嫉妬の混じる男の視線だ。

若い頃ならまだしも――女の視線は今はまだ煩わしい。

「端的に言えば、タイミングだ」

「タイミング？」

「それに――君はとても都合がいい」

「ふうん？　こういうのを頼むほどに、ね」

コンコンとテーブルに置かれたA4サイズの茶封筒を指で示す。無言でそれを取り上げ、中に入った何枚かの用紙を確認する。ほぼ予想通りだったので再び封筒に戻す。俺が見ている間、携帯電話が鳴った彼女は「ちょっと失礼」と席をはずしていた。見るとはなしに表に視線を動かし、こうなったキツカケを思い返していた。

俺が最初に彼女を見つけたのは、一枚の書類だった。

――『滝浪ユリ子』二十一歳。某大学卒業予定。資格は普通自動車免許。趣味は読書と絵画。

別段これと言って特徴のない、新卒の入社面接予定者だった。しかし、俺はたったそれだけで歯車が回り始めたのを感じた。

ここの出身だったら免許があるのも頷ける。それは彼女の現住所。俺が幼い頃を過ごした思い出の地だ。

本来ならば特に特徴もない新卒者など書類審査後に『残念ですが』と断りを入れるのだが、今回ばかりは引けなかった。当時係長であった俺だが、すでに課長業務も兼任するほど任されていた業務の一つなので、別段怪しまれる事もなく一時審査は通過した。

そして面接当日。

一言で言えば『野暮ったい』、そんな小さな彼女だった。今時の店では到底売っているとは思えない太枠黒縁眼鏡、染めた事など一度もないだろうその髪は大学生なのに幼く見える二つ縛り、化粧はここ二、三日で慌てて勉強しました、という有様だった。普段の俺ならば絶対に採用しない。そう、普段の俺ならば。

ずっと待っていた『彼女』だったから。

それにしても不恰好にも程がある。これでよく高校時代、大学時代と過ごしてきたなといっそ感心する。しかし、よく見るとどうだろう。小さな背は小動物のようにみえて、庇護欲をくすぐる。元のつくりはいいので、見た目の野暮ったさなどどうにでも変えられるだろう。厚い化粧などしないその肌は透明感があり、ツルツルしていて触り心地が良さそうだ。

ぽてっとした唇と大きな瞳、襟足から覗く首の細さと共にうなじの白さが際立つ。リクルートスーツの上からでも分かるスタイルの良さ、引き締まった足首。どれをとっても俺好みに育っていた。

逆に、野暮ったいからこそ悪い虫が付かない。これでマトモな格好をしていたら、それこそ誘蛾灯に集まるが如く五月蠅い小物が手を出していただろう。

面接内容は正直凡庸ではあるが、不合格という程でもなかったの

でそこは権限を駆使して内定が決まり、配属先も俺の部署に回るよう手を回す。

———そう、ここまでは完璧だった。

条件提示

普段から彼女の視線を感じていた。特に部下の清水と話している時に、より強く意識する。

「袴田課長？」

「ああ、すまん。それで例の件だが」

「時間のなさは俺達よりも課長でしょう？　――大丈夫ですか」

「問題ない。そうだな……追って連絡する」

清水に頼んでいた案件は、半年前なら全く想像すらしなかった。しかし――。

「滝浪^{たきなみ}さん、あの会社に送る封筒はどこにあったかな？」

「あ、ハイ。こちらにあります！」

書類が山のように積まれた間から、ぴよこんと頭を出して元気良く返事したのは『彼女』だ。滝浪ユリ子。入社してさほど時間は経っていないが、一五二センチという小柄な所が先輩女子達のツボだったらしく、随分可愛がられていた。

――それは俺のだ、と何度口から出そうになったか。

同期の飲み会、女子会、合コンへとよく参加するようだ。そんな愛らしい姿で繁華街を歩くなど危険すぎる。すでに包囲網となる布陣は配置済みだが、どうにかして彼女を俺の手の届く範囲に置いておきたい。会社では九歳年の離れた課長という役付だ。軽く手を出せるものではない。じつくりと策を練り、徐々に近づくしかないのか。勿論彼女には心の準備というものがいるだろうが、俺は――俺にはある期限が迫っていた。それまでには……。裏腹な思考が入り乱れて焦燥が胸を焦がす。

しかし転機が訪れた。そう、全く予想だにしない方向から。

彼女から渡された封筒の中身を改めるとそこには。

「なんだこれは？」

「え？ ひ、ひゃああああっ?!」

大きく目を見開いた彼女は、顔を真っ赤にして小さな口はパクパクと鯉の様に開いていた。

書類と思っていた中身は漫画の原稿で、その中身はおよそ一生目にする事が無いと思っていた男同士の絡みがあるものだった。

――ありえない。

彼女はすべて俺好みで育っていたのに、想定外は中身だった。流石の俺もこの趣味までは把握していない。いや……履歴書を思い出す。『趣味は読書と絵画』……そうか、それか。

一瞬どこか自分が遠い所に魂を飛ばした気がしたが、いやまてよ、と思い直す。

趣味は矯正可能。そしてこの好機は、最大限利用すべきだ、と。

「……滝浪さん？ 会議室まで来てくれるかな」

「……はい」

目元を潤ませて、悄然と肩を落として俺の後をついてくる彼女を見た時は、中身はどうであれこの腕に掻き抱きたい衝動を抑えるのに苦労した。

手段としては強引という自覚はもちろんある。

しかし多少力技でも利用しない事には、いつまでもスタートを切れないでいる己を良く知っているからこそその所業である。

更に言えば、期日が迫っていた。煩わしいばかりのそれに被せて、あいつらに意趣返しをしてやろうと思ったのだ。

そして原稿を取り上げた俺は三つの条件を提示した。

一、容姿の改善

二、家に住み込み家事をすること

三、……は、最後の日に

期間は一ヶ月。その間に俺は俺の出来る全てをこなさなければならぬが、ただ拱こまねいているだけの日々を思えば容易い事だ。三つめの条件を最後にしたのは、彼女が逃げだせる余地を作ったから。一ヶ月、いつでも自分の意思でこの奇妙な関係に終止符が打てるように。もしその様に切り出されたら、反論一つ言わずに原稿を返し、再び日常生活に戻る。その覚悟の上だった。

「——っもう、嫌になるわ。しつこいのよ」

彼女の戻ってきた声で現実に取り戻される。苦虫を噛み潰したよ

うな表情でも絵になる彼女は、十人中十人美人だと答える容姿の持ち主だ。例えば中身が腐女子だろうが、欠片も感じさせないのは大したものだ。

ユリから没収したあの封筒には、彼女の住所氏名が書かれていた。そこまで分かれば調べる事など容易い。望月優実二十九歳、総合病院の受付事務で――世間は狭いと思うが、自分の部下の望月美穂と従姉妹関係にあった。

剣呑な色を視線に乗せて俺の真意を測ろうとする彼女は、ぐっとテーブルに身を乗り出す。

「ねえ、リリーたん……ユリ子ちゃんは……。あなたで本当に大丈夫なの？ 私、本当にあの子の事妹のように思っているの。だからどうしてあなたがそこまであの子にこだわるのか、全然見えてこないのが私は怖い。ユリ子ちゃんはあなたの好きにしていいい子じゃないのよ？」

「何を言っている。あいつは最初から俺のものだ」

「はあっ?!」

彼女が目を吊り上げて反論しかけたそのタイミングで料理が運ばれてきた。意図せず声を上げたのを、周囲に対し決まりが悪いのか、半分浮かした腰を静かに下ろした。

そして声の調子を落とし、しかし攻撃的な口調は変わらずにその舌へ乗せる。

「ちょっと、それはどういう意味？」

「俺が教える義務は無い」

「えーえー、そうですか。じゃあユリちゃんに聞いて構わないのね？」

俺の言葉に含む意味を正確に聞き取れる彼女は、こちらに引き込んで正解だ。いい駒になる。俺はゆつくりとコーヒーカップを持ち上げ、立ち上る香気を味わいながら「構わん」と一言投げた。

ユリが言うのなら俺は構わない。それほどまでに俺はユリという存在に対して、俺の心全てを預けていいとさえ思っている。

ただし――。

覚えているだろうか。

俺を救い上げたあの珠玉の記憶。それはいつまで経っても色褪せない。

覚えているだろうか。ユリは。

俺ばかりが大事に抱える思い出。少なくとも今のところユリは思いついたそぶり一つ見られない。だが、忘れていたとしても手に入るのは覆しようも無い決定事項なのだが。あの日あの時交わした言葉は、たとえユリがこの包囲網を抜けたとしても、俺の心の中には一生居続けるだろう。

俺が思考を巡らせている間に食べ終えた彼女は、カタツと皿の上にナイフとフォークを置き、アイスコーヒーを一口飲んだ。

「気に食わないといえは嘘になるけど、ユリちゃんの為だったら協力はするわ。でも、例の報酬はキッチリお願いするわ」

「分かっている。手配済みだ」

「あら。ふふっ、楽しみ」

単に書類の受け渡しと情報の統合の為であり、このような居心地悪い空間で昼飯を食う気にもなれず、コーヒー一杯だけ飲み、用件が済んだので店を出た。

お互いこの用件だけ済ませれば用は無い。何の名残も無く店の前で別れ、俺は繁華街から少し離れたラーメン屋で一杯食べた。そこそこ客の入りもよく味も悪くは無い――が、ユリがよく利用するあの店の味は忘れられない程に美味い。ユリと二人で食べた付加価値を取り払っても、だ。

ユリは、俺に色々な驚きをもたらした。

昔もそうだが、今も毎日新鮮な想いを抱かせる。このまま、ずっと続けて行けたら……。

条件提示（後書き）

望月美穂——11桁の記憶

http://ncode.syosetu.com/n4863r/

状況変化

「ただいま」

今まで何の味気も無かった我が家は、ユリがいるというだけで温かみをもたらした。一度も帰宅時に声など上げた事のない俺が同居を始めてから自然と口にするのは、あの笑顔で「お帰りなさい」と言われるのを望んでいるからだ。

——ああ、帰ってきたんだ。俺の帰る場所は、ここだ。

心からの安堵を浮かべることが出来る空間は、幼い頃からつい最近まで全く無いに等しかった。そう、一時期あの田舎で過ごした以外は。

「……」

暫く玄関で待つが、おかしい。普段であれば即座にリビングから迎えに来るのに反応が無い。

仕事の日は残業もあり時間がまちまちで、夕食の支度が間に合うようにと「帰る」メールを入れる。するとユリは帰宅時間を見計らって玄関で俺を待ち構えている。残念な事に殆どが奇想天外な方法で、だが。

「お帰りなさい」——全開の笑顔で。

「お帰りなさい」——白いエプロンを着けて。

「お帰りなさいませご主人さま」——エプロン着けて三つ指突いて。

徐々にレベルが上がっているのは、俺の気のせいではないだろう。一体何の拷問か。

俺好みに仕上げた外見。少しの動きでもフワツと揺れる髪、小さな彼女を可愛らしく彩る服。決してメイド服など……確かにそれはそれで非常に似合うが、仕事から帰ったばかりの俺には理性という名の箍を緩ませてしまう兵器に過ぎない。毎回これでは俺の身が持たないので、帰るなり毎回すぐさま風呂に入り頭を冷やすのが恒例となった。

風呂から出れば、出来立ての料理がテーブルを彩る。その献立は、俺が『家庭の味』として心の底から望んでいた数々だ。田舎の祖母が作ってくれた、心の籠った料理を思い起こさせる。

ユリは料理を作った事が無いと言っていたが、親の作る姿は良く見ていたようで特別大きな失敗はなくこなしていた。いや、一回だけあったな。ヨーグルトに塩を入れていた。味はとても語れるものではなく、鼻から吹かなかった自分を思い切り褒めたい。恐らく一生のうちで食べる不味い物の上位に食い込むことは間違いないだろう。

そして夜も遅い日があるというのに、俺と同じく食卓につき食事を始める。

『いえ、私が一人で食べるのが嫌なだけデスから。実家ではいつもみんな揃って『イタダキマス』だから、なんとなく私もそういうクセがついたというか……気にしないで下サイ』と、何でもないように眩しい笑顔を向けてユリは言った。

駄目だ、可愛すぎる。

己に課した一ヶ月の期限を、我を忘れて破りたくなる。あの小柄な肢体をこの腕に掻き抱いたらどんなに心地いいだろうか。全てを剥き出し全てを刻みつけてしまいたい。それほどに俺は……ユリに心を奪われていた。

「……いないのか？」

どこか出かけるとは聞いていないが、といぶかしみながらリビングのドアを開き、すぐ傍の照明スイッチを入れるとそこには。

「——っ！」

いた。ユリが、いた。

いつぞや見たように、ソファの背もたれの上にうつ伏せになって、両手両足をだらりと垂らしていた。喉元まで出かかった声を辛うじて抑え、そろそろと近づく。

「おい」

声をかけるとピクツと反応して、「……あい」と返事をしながら緩慢な動きで座席へと落ちた。

「あー……。お帰りなさい、デス」

いつも変だとは思っているが、今はとりわけおかしい。怪訝に思いソファ正面に移動しユリをよく見る。特に体調が悪いようには見えないが、いつもテンションが高いとか高くないだとかそんな言葉では表現できないほど感情豊かなユリが、ここまで大人しいと心配になる。

「どうした。調子が悪いのか」

探るように顔を覗き込むと、途端バネ仕掛けのように飛び上がってドアの外へ逃げた。

「ひいーっ！ 何でもありませんからーっ！ っ！ ええっ、ほんとに何でも！ ご飯すみませんなんか適当に食べてくださいえ！」

階段を駆け上がる音とともに叫ばれたそれは、確かに何事かあったに違いない意味が含まれている。

そしてその意味とは……。

————ユリの目が、まるで泣いたかの様に赤かった理由に繋がっているのか？

状況変化（後書き）

9月1日 18時 妄想部

http://mypage.syosetu.com/1444526/

これ、ゼツタイ、心の汗だよおおおう！

気付いたら家に帰っていて。

気付いたらソファの背もたれの上でうつ伏せになっていまして。

あー……何やってんでしょーね、私ってば。

ぼんやりと同じ場面が何度も何度も目に浮かぶ。カチョーとリーダーが繁華街にあるカフェで、テーブルを挟み向かい合って談笑している姿。

ものっすごいお似合いデスヨあの二人。

美男美女納まる所に納まったっつーか。あーそうなの。なにそっちお二人さん何かしらを育んじやってんの。なに、私キツカケで出会ったってことかいな。そんでもって、私、蚊帳の外なんですかい。あー、そーですかそうですか。

なんだ。ワタシ……。

「おい」

ぎょうおおおおおおううっー！！

盛大な悲鳴を上げてしまう所デシタが、ぎりっぎりで飲み込み、しかし体の反応は抑えきれずまるで漫画のようにびくううつと跳ねて、いやでも返事返事と思って「……あい」と自分の声でないようなか細い声で答える。

ちよいと、カチョーいつの間に戻ってたのさ！

ちっとも気付かずにいたけれど、そういえば辺りは薄暗く、帰ってから相当時間が経ったのが窺い知れる。のろのろと座面に移動してああそういうばと思ひ出す。

「あー……。お帰りなさい、デス」

お迎えの挨拶をしていませんデシタ。帰ってきたのを気付かぬ私でしたが、挨拶くらいは……。しかし全く力が出ない。どうしたんでしょうね。別に風邪を引いたわけじゃないのに。カラダに力が入らないっつーか、気持ちに力が入らないっつーか。

「どうした。調子が悪いのか」

カチョーの声が近くで聞こえたと思ったら、いつの間にか移動したカチョーが私を覗き込もうとしていた所だった。

「ひいーっ！ 何でもありませんからーっ！っ！ へへっ、ほんとに何でも！ ご飯すみませんなんか適当に食べてください！」

ムリムリムリ！ いま顔なんて合わせられませんってええ！！飛び起きてダッシュで二階の部屋へ駆け出し、ドアを開けて勢いよく締めた。息切れしたまま床へ大の字にごろっと寝転がる。

なにやってんだわたし。

家政婦代わりじゃなかったの？ ご飯の支度すらしないなんて条件に……。条件……。そうだよ、この同居生活って元々カチョーに原稿取り上げられたからじゃないのさ。

そもそも。そもそも言ってしまうえば例え原稿取り上げられたからといって、こんな条件飲むことはないのだよ。外見オサレにしても

らったり、服を買ってくれたり、美味しいものを食べに連れて行ってもらったり……どちらかといったら良い思いしかしていない気もシマスが。

バツイチだろうが関係なしにモテモテ大人気☆なカチョーの家に、残念の代名詞である私が一つ屋根の下に住むってありえませんか、ね。むっちゃ馴染んでいた自分がコワイ。

だってとても居心地が良くて、自分の家かのように過ごせて……。

いやいや、おかしいでしょ。待てまてマテ。

本当におかしい。普段奥底に引っ込んでいる常識人な自分がようやく「現実ヲ直視セヨ」と指令を下してきた。

そうだよ。

そうなんだよ……。

私が、カチョーと、一緒に、いるのは。

期間限定の、家政婦。それだけだ。

ふわふわなのかドロドロなのかわからない気持ちの着地点がようやく見つかった気がした。そうだよ、超シンプルじゃないか。一ヶ月……いや、あと半月もしたらフツーの上司と部下としてまた日常に戻るだけだ。

それだけ、それだけ。

それだけの事なのに何でこんなにも胸が苦しいのか。

寝転がったまま天井を見ていた私の目の脇から、温い感蝕のものがどんだん下に落ちていく。何だこれ気持ち悪いなー、と思って手で触ると。

「……なみだ、デスカ」

え、なんで私泣いてんの。意味分かんないんですけど。泣く意味分かんないんですけど。ひょっとして雨漏りしてそれ顔に当たってんじゃないのちよつとカチヨーここ欠陥住宅ー！

……って考えたけどなんか超むなしい。んな訳ないのはいくら私でも分かってる。

さっきから堂々巡りで、結局答えが出ているのは期間限定家政婦っちゅーだけで、このなんだかモヤモヤした気持ちの置き所はよく分からないままだ。もうメンドクサイほつとこう！ 後回し後回し。とにかく後半月家政婦頑張って、んでもって原稿返してもらって、それで―――家に帰ればいいんだ。家イコールこの家が一番最初に浮かぶのは……仕方ないデスヨね？ ここの所ずっとこの家で過ごしていたんだから。

私の家は、山のある田舎。ここは、カチヨーの家。

私は、カチヨーの家の家事をして、あと半月もしたらお役御免になる。

うし。

そこさえブレなければ終わる。カチヨーのアレな話をリーダーから聞いて、ちよつと同情してしまいキスもリハビリになればと許していましたが、ちよつと踏み越えすぎた気もシマス。超イマサラだとは思いますが、もう分をわきまえる行動をするっすよ！

……今晚のところはとてもじゃないけど平静でいられますえん。

明日！ 明日から、またキッチンと家事をやりますからっ。

そう心の中で盛大に謝ってから布団を敷き、でも何もかもする気になれずにそのまま寝てしまいマシタ。

一言物申すのデス!

……まあね。

こうなることは分かっちゃいましたがね。

私は毎度のことながら自分の身なりを確かめた。うむむ、またしても……。化粧は落とされ、髪もサラサラして、肌もさっぱりして、コンタクトも外され。そ・し・て（ここ一番重要）……パジャマをキチンと着替えて。

ありえねえええええ!!

布団から上半身を起こしていた私は、頭を抱えてウンウン唸った。もうさ、ずっとずっと現実から色々逸らしていましたが、私もですね、そればかりじゃーだめだろう

って曇りなき眼で正面から当たるとのデスヨ! 参ったか!!

——って、誰にだよおお。

ふう、一人ボケ一人ツツコミはくたびれる。朝っぱらからやることじゃないね。

大体今日は仕事だしっ。

カチヨーとはどうも顔を合わせ辛い。あんな場面をみてしまったし、それを見ちゃった事も言いづらいし、夜も不振な態度を取ってしまった。おかしい言動をしないと、何事もなかったように挨拶すら交わせないよう。

えいやっと起きて布団を畳み、身支度を整えてそろりそろりと足音を忍ばせて階下へ階段を下りる。

カチヨーが起きてくる前に朝ご飯の支度を整えて、そろそろかな

って時にまた自室へ引っ込もう作戦だ。

うむ、これならば私の家政婦としての役割はキッチンとこなせるし、顔も合わせずに済むというなんともナイスなアイデアってなもんデスヨ！

リビングに入るドアをそっと開けて、台所へ……。

「でえええええええっっっ！！」

早朝というのも忘れて大声で叫び、反射で口を手をやりこれ以上の近所迷惑をかけないよう押さえた。
いやだってなにどうして……。

「おはよう。早いな」

カチヨーがソファに座り、新聞を読みながらコーヒーを飲んでいた。

なんてこったい！ 早朝がんばる小人さん計画が台無しじゃないか！ 顔合わせ辛いつーのに何でいるのさ！

「かちよお……随分早起きデスネ」

「まあな。仕事も立て込んでいるし、それ以上気になることがあつてな」

「そうですか。ではご飯の支度をしま……」

「ユリ、なにがあつた？」

「え」

「どうも昨日の夜からおかしい。どうした」

え、ちょ、ねえなに。

バサッと新聞紙をリビングテーブルに置くと、立ち上がってカチヨーは私の腕をつかみ、クルリと向き合うように捻った。

「熱でもあるのか？」

ひよいとおでこにカチヨーの手が当てられ、その手のあまりの大きさに、硬さに、温かさに――！！まるでオデコに心臓が瞬間移動したようにドクドクと鼓動が激しくなり、触れたその場所に対して全身の熱がオデコに集中してどわああああっ！ダメダメダメダメーッ！

「ちょ、カチヨー！ おさわり禁止デス！」

ぴよーいと一歩後へジャンプして距離を取る！ あぶねええ！
っておおい！ 手、手、離してええ！！

「どうして」

「……どうしてもこうしてもクソもミソもねえデスよっ！」

「下品だな。――何故そんなに怒っている？ 熱は無いようだが、顔が赤い」

「ほっというて下サイ！」

「ユリ」

掴まれたままだった手首をぐいと引かれ、一歩あけた距離が再び詰まる。見上げた位置にあるカチョーの顔が迫ってきて、吐息が感じられる辺りでハッと気付いた。

こ、こりは……！

「だめ、デス！」

咄嗟に、カチョーの口へ私のもう一方の手で押さえた。うお、間一髪！

「き、き、き……ゴホン。接吻も、駄目デス。ほら、カチョーはさ、私なんかでリハビリじゃなくっても……」

——ほかに、いるでしょう？ キスできる相手が。

辛うじて飲み込んだ語尾は、自分でも何言ってたんだ私！ って思うほど、感情に支配されていた。

え、でもさ、これって、まるで……。

「ととととにかく、接触禁止デス！ あと二週間でゲンコー貰って出て行くだけの家事労働者なんデスよね私って！ 変な誤解されない為にも適切な距離をお持ち下せ……っぎゃおおう！」

カチョーの口を押さえていた掌に、温かくてぬるっとした感触がしてパツと手を離す。

「何を……っ！ っ！」

「息がしづらい」

「あ……ごもつともで。スンマセン……って！ 舐めないで下サ
イッ！」

「そろそろ朝食の支度をしてくれ。腹が減った」

う、そういえば。

家事労働だと自分に言い聞かせた手前、キッチンとやらねばいけませぬ。それはそれ、これはこれとしてとにかく支度を！ ……ん？

「カチヨー、手を離して下サイ」

するとカチヨーはこれ見よがしに私の手首を握ったまま眼前に持ち上げ、ちゅうつと腕の内側に吸い付いてから離れた。

「~~~~~っ！」

「……待ってる」

伏目がちに視線を落とし、それだけ呟いたカチヨーはアツサリと手を離し、ソファアに腰をどさりと落として再び新聞を開いた。

待ってる？ 何を？ ごはんを？

よく分からない呟きが頭の中をぐるぐる回りながら、カチヨーの出勤に間に合うよう食事の支度を始めた。

わ、わたしとしたことがああっ!!

なんだかんだ、話を逸らされた気がいたしますよ。

確かに時間がなかったけれども、一言で済むと思うんですよね？

——お触り禁止デス。

——分かった。

——キスも禁止デス。

——分かった。

ほら！ 超シンプルでそー！ これで問題なく最終日までたどり着けるってもんデスよっ？！ なのになんでカチヨーはああもずるく逃げるんでしょうか。

結局、朝メタモるのもお触り禁止もなにかも解決せず。

大きく大きく溜息を吐きながら取引先に送る書類を封筒に折り込んで封をする。

ま、カチヨーは同居を始めても、会社ではそれ以前と全く変わることはない上司としての態度だったので、逆に私としてはありがたいのデスがね。

カチヨーがリーダーとアチチの仲だとしても、それならそれで好きにやってくだされればいいし、私の動悸息切れ体の火照りっていう症状が起こらなくて済むのなら、それに越したことはない。穏やかにひっそりと同人誌の世界へまた潜るのデス。以前の生活へね！

……おっと、もう空じゃんか。

喉が乾いて、マグボトルを持ち上げると軽かった。そういやさっ

き飲み干したんだっけ。

空のマグボトルを手に持ち、給湯室へ入る。ワンフロアのただっ広い社内は、部署ごとに机を纏め島の間になってるのデス。一番端の島の奥に、その給湯室——室っていつても、暖簾で仕切っただけの簡単なもの。この会社では、それぞれが好きな時に利用可能で、各個人で自分の分だけ作るよう決められている。お茶配りの習慣がないってのはオフィスラブ系の漫画を読んできた身としてはちと寂しいデス。王道、やってみたいじゃないデスカ！

『「部長は濃いめの緑茶で、課長はブラックコーヒー、係長はミルク入りコーヒーで……」新入社員の私は、先輩から教えられたリスト通りに三時のお茶をいれた。まずは部長から配り、役職順に配り終えたら今度は勤続年数順に……」

覚えなければならぬ業務、新人女子が担うお茶だし、掃除などで頭がパンク状態だった私は、ぼおっと思っていたと思う。課長専用のマグカップを手に取った途端、滑って落として割れてしまった。

「熱っ！ す、すみませ……」「君！」足に跳ねたコーヒーで火傷したらしく、それでも落としてしまったコーヒーとマグカップの処理をしようとしやがみ込んだ私に、課長がなんの前触れもなく私を抱き上げた。「きゃああっ！ あっ、あっ、あっ！」「黙って。医務室にいくよ」有無を言わさぬ態度で、颯爽と歩き出す。私の重さをいとも軽く抱えるその力は、頼れる男性のものだった。密かに憧れていた課長に密着してしまい、私は足の痛みどころではなくなっ
て……』

いすっ。

「ぎゃっ」

「沸騰してるだろうがヤカンも頭も。阿呆！」

「イタタタタ……ちょ、カチョー！」

「茶を淹れるのか。俺にもよこせ」

カチョーは持っていたマグカップを私の頭に落としたあと（しかも角デス！）、それを流し台の上に置いた。

「ついでだろう？」

「う、ま、まあいいデスけど」

「お前の実家の作る茶は、美味いからな」

「あああ、ありがとうございます」

褒められれば悪い気はしない。グラグラに煮立ったお湯を急須とマグカップとステンレスマグに入れて温め、急須の湯は流しに捨て、茶葉を入れる。そしてゆらゆらとマグカップから優しくのぼる湯気の形を見て、マグカップとステンレスマグのお湯を急須へそそぎ入れた。

「手際いいな」

「あ、はい。家では食後の度、休憩の度、何でもかんでも事あるごとにいつも飲みますんでね」

逆にこれが当たり前だと思っていたけれど違うのかな？ 県外に出たことのない私は分からないけれど。

「うん、美味しい。ユリが淹れたから余計に。ありがとう」

淹れたお茶を一口飲み、ふわりと笑いながらマグカップを落とし、私の頭のとっぺん辺りに手をやり、くしゃくしゃと撫で回し給湯室を出ていったカチョー。

う、わ……。

なにそれ反則デスヨ！ バッキャロー！ それどんだけ攻撃力あるのか分かってマスか？！

……。

あれ。

私なんでまたこりや動悸が激しいのデスかね？ ピンクの小粒飲むべきか。いやいやいや、ありや便秘薬だっつの！ なんか動悸息切れに効く何かしらの薬飲むべき？ これ病気じゃないの??

膝に力が入らなくなった私は、ズルズルと背中を壁に預けて座り込む。なんだっつのよこの症状！

「きゃ、ユリ子ちゃんどうしたの？ 具合悪いの？」

ふわっという香りが近づいたと思ったら美穂先輩デシタ。一個上のキレーなお姉さま！ 給湯室近くの島にいて、何かと気が利く癒し系女子なのでっす！

「ややや、何でもないデス！ ちょいとばかり腰のストレッチをやってまして！ そうそう！ はんずかすいゝからこっそりと！」

座り仕事ってのは、結構腰にくる。そんなに不自然じゃない言い訳をして立ち上がった。

美穂先輩は「大丈夫？」といって支えてくれながら、心配をしてくださる。なんていい子やアンタ！ 嫁にしたいわ！

「封筒あとポストに入れるだけでしょ？ 私外に出る用事があるから、後で私に渡してね。袴田課長にも言っておくから」

「そんな、悪いデスよ」

「いいの、ついでよ、ついで」

ふふっと花の咲いたように笑う美穂先輩はほんつとにかわいいなああ！ 抱きついてクンクン匂い嗅ぎたいくらいに！

「それにしても袴田課長、少し雰囲気変わったと思わない？」

「へ？ そーデスカ？」

私から見たカチョーは、会社では全く変わりなくオフの姿も基本変わっていない。ただちょっとやたらに触ってくるなーとか、気付いたら視線が合う事が多いなーとか、あと、あと……やけに優しい気がするなーとか……あわわわわっ！！

色々思い出してギャーっとなる私をヨソに、美穂先輩は顎に手をやり首を傾けた。サラサラっと髪が肩に零れて、ああそれだけで眼福でゴザル。

「なんとなくさ、いつもピリピリしてたんだけど、ここの所穏やかになったなって。私が新入社員で入った時は丁度離婚されたばかり

りだったらしくて、すっごく怖かったわ！　といっても、怖いのは
雰囲気だけで話せば丁寧に対応してくれるんだけどね。で、いつの
頃から徐々に陰がとれてきて、今なんてもうオーラが違うわ！　何か
いいことでもあったのかしらね？」

そうかそうか。前の奥様と別れて、暫く経って私を介してリーダ
ーと会って、だから穏やかになリなすったのだねカチョーは。よか
った、よかった。いい事じゃないか。

美穂先輩はマグカップにティーパックを入れ、お湯を注いで「じ
ゃあお先に」と机に戻った。出て行くのを見送りながら、心のどこ
かが凍っているのに気付き。そしてまだなんかモヤモヤしてるよう
なしてないような変な気持ちがあつて、こりゃまたなんだろうと考
えたらさっきの妄想を思い出した。

———あつ、あれ？

私、ノーマルな妄想してたあああああつ！！

混乱、のちに、凍る。

その日は退社の時間になるまで「えー」「どして」「なんで」の
譫言が繰り返された。

まさか、この、私が！

まさか、この、私がああつ！

『BL妄想をしなかっただなんて』

ありえんよこりゃ。一大事デスヨ？？

BL好き歴約八年。中学一年の時に友人から借りた漫画（しかも
同人誌）に衝撃を受け、それ以来どっぷり腐女子してきたのですが
……。そりゃーNLもノーマルラブ読みます。それなりに好きでもあります。で
も「へー」と眺めるだけでそれについての妄想はしたことがあり
ませんデシタ。

ほぼ一日中ボンヤリとしていたけれど、本日私のやることったら
在庫管理における個数把握の為のナンバリングスタンプでシールを
作ること。ザ☆下っ端雑用係ですからねっ。

勝手に番号が一つづつ動いてくれる便利道具で、シールにガチャガ
チャとスタンプを押すだけ。ひたすら枚数重ねるので、特に周りか
ら不審がられることなく終業時間を迎えた。うむ、単純作業で助か
った。

手だけは動かし、脳内ではアレコレ妄想を試みるものの悉く惨敗。
どうやっても男×男ではなくて、男×女のカップリングになり、ど

うやっても何故か『課長』というキーワードが出てきてしまうのだよ。

あああ何故だー！ 健全な(?) BL妄想がしたいですうー！

さて、と。がっちゃんことタイムカードを押して本日の業務終了なのデス。やけにここレトロだなーって思ったら、どうやら社長の趣味らしい。社長はあちらこちらに自分から飛び回るらしくて滅多に会社にいない。私も入社したその日にお目にかかれなかった位謎な人デス。そんな謎なヒトってムラムラ……じゃなくて、ワクワクしますよね！ 私はアリだと思いマス。ええ、アリです。

今日は寄り道があるのだ。ちなみにスーパーは寄り道に含まない。だってそれ日常ですもん。

本日は帰りに例の眼科へ寄るのデス。カチョーに連れられていったあのドS女医のいる、あ・そ・こ。コンタクトレンズは一日使い捨てのタイプで、合わなければまた違うのをという話でまずは一箱購入をしたのだ。左右の度数が一緒だったから、間違わなくて済むのデス！

一箱三十枚入り。左右で使えば十五日。オマケで三日分貰えたけれど心もとないので、行ける日に行つとこうと思ったのだ。

一度検査したし、日数もそう経っていないからメンバーズカード見せれば即購入できたはず。できれば……あの口の悪い女医と顔を合わせずにサラーツと購入して去りたいのデス。こええええもん！ エレベーターで一階に付き、気合一発！ 頬にバチーンと入れたら思いのほか痛くてちよつと涙が出た。

「……何やってるんだ」

「ぎゃ、カチョー！」

声が頭の上から降って来た！

オフィスビルのエントランスの端っこにいた私は、思わずホールドアップ！ なんでもありましえーん！

カチヨーは確か取引業者へ商談に行っていたはず。今戻ってきたのですねお疲れサマンサ。ってか、何故だこんな人気のない所でここまで大接近しても気付かないなどはな、私！ くっそうカチヨーめ、お主やるなっ？！

「見せてみる」

「へ？」

なんのこっちゃと尋ねる前に、カチヨーは私の頬を両手で包み、そして左へ右へと目視する。

「……すこし赤くなっているな。痛みは？」

ちよ……わ、わあああっ！ ほっぺた！ わあああああっ！！

「ダメダメだめデスイやああああっ！！」

ガシッと頬に触れていたカチヨーの両手を掴み、放って、一目散に逃げ出した。

ありえんて！ むっちゃありえんて！

おっきい手が私のほっぺたに触ったってだけで、心臓のリズムがおかしくなる。ばっくんばっくん激しく鼓動をして、こら寿命縮めるな！ 一生の内の鼓動数は決まってるんだからー！ と、それをなんとなく信じちゃっている私は押さえるのに必死。

会社から相当な距離を駆け抜け、私はようやく足を止める。相変わらず心臓はバクバク音を立てていたけれどこれはまあ走ったせいだと無理矢理決め付けた。

ハアハアと乱れた息は何かしらイケナイ妄想を掻き立てられる……よね。こりゃちよつとBL妄想いけるんでないかい？　と思っただけれど、酸素足りずにそれどころではない。とにかく呼吸を整えようと、繁華街の中心部にある南北に長く伸びた公園のベンチへ座った。

どうしちゃったのでしょーか、私。

カチョーと住むようになってから、思いつきり変デス。いえ元々変なのは自覚済みですけどもね。ここんところの自分ときたら、カチョーに対して気持ちが一喜一憂振り回されっぱなしですよ。まあ初日からアレコレ肉体的にも連れまわされてましたけれども。

私に対して妙に鋭かったり（主に妄想している時）、トラウマ克服に協力すると私が言えば、それから妙に優しくキスしてきたり（まあこりゃ私の自業自得な部分もあり）、元々一ヵ月後に大事な用があるから家事をしてくれて言った割に、部屋の中はがらんと家で家事以前の話だったり（しかも私の好きなように揃えろと家具家電購入任せれマシタ）……私のもっさい外見をステキ女子にメタモるなんて。

どんだけ私、居心地いいのさ。

やることさえやれば、あとは好きに過ごせたこの二週間というもの。おそろしく気持ちいが安らげる空間でもあったのデス。まるでここが私の……と誤解してしまうかのような。

誤解？　なにを誤解するのデスカね？　んー……？

それについてはモヤモヤっとしていて、原因が分からず首を捻る。でもさ、考えても分かんないっつーことはだよ？　これ以上それ

について考えた所で答えが出ないんだよ！　と結論に至る。しょうないよ。

とにかく目の前のやることを終えようと、ベンチから腰を上げてコンタクトレンズ専門店へと向かった。願わくば、見つかりませんようにと願いながら――。

「あら。袴田君の……？」

ギャー！　言ってる傍から見つかった――ああ！
なんつータイミングよ！

内心の叫びを口から出す前になんとかぐいっと飲み込んで、俯き加減に「はあ……その節は」と小声で挨拶を返した。

うむうむ、穏便に！　それとなく！　スルーでお願いしまーっす！

そんな私の心の内に気づかず、女医はコツコツとピンヒールの音を響かせながら近寄ってくる。ちょちょちょ、その白衣にピンヒールつか！　どんだけマニア嗜好なんだよ！　と、対する私もマニア向けをよくご存じな趣味嗜好を持ち出して勝手に恐れ慄いた。

超S、つまり「どえす」ですね、わかりますわかります！　あわわわ。

ピンヒールですでに敗北した私はもう涙目になりながら、女医の促すまま待合室の片隅にある長椅子に腰掛けた。

この時間は受付も終わり、診る患者も最後の一人が診察室を出て。まだ店内奥でレンズの付け方を指導される人は二、三人いたようだけれど、こちらからは全く見ることはできない。

ああ……なんでこんなことに……。

「あのお、何か私にご用でも？」

用がなければ呼び止めるはずがない。モテ！ オーラ！！ ビンビン！！！ の女医が、最近マシになったとはいえ地味子な私に声をかけたところで、私は『BL本お勧めラインナップ』位しか返せない。そしてそんな腐の成分なんて一生縁がないだろう人に語ったとしても、絶対零度を凌ぐ冷たい空気が流れるだろう。間違いないっす！

そんな私の心配をよそに、女医は明るい声で私の来訪を喜んでいった。

「コンタクトレンズ、違和感無いようで良かったわ。袴田君が連れてきたときはどんだけイモっぽい子かと思ったんだけど、磨けばマシになるものね」

ちよ、失礼ザマスよ！ あってるけどもね残念ながら。しかしイモっぽいとは死語使いだな女医め。年齢がしれるというものデスよ！

「は……あ、カチヨーのお陰デス、はい」

実際カチヨーがあれこれ連れ回してメタモルったお陰で一皮剥けたので、それなりに感謝はしているのだ。

家族にも会社の人にも褒められたし、最近は自分を鏡で見て驚かなくなった。最初の頃なんて姿見や洗面所通りかかっただけで「ぎゃっ」と驚いたものだ。

キョドる私へ、何故かどえすオーラはどこにも見えない女医は目

を細め、「でも良かったわ」と柔らかく笑った。

「袴田君、待ってたもの——なにを？」

「だから私とすぐ別れたのよ？」——だれと？

……え？ 別れた、とな？ それって……？？

キョトンとする私に、女医は意外そうな顔をして口を開いた。

「もう話聞いているでしょ？ 私と袴田君が結婚していたこと」

ウジウジうつうつモンモンの一週間です……。

それからどう家に帰ったのか覚えていません。

それからどう日常を過ごしていたのか覚えていません。

「普通」だったと……思う。

朝起きて、ご飯用意して、洗濯干して、掃除して。

会社で仕事をして、ご飯用意して、寝る——それだけ。

心の中がこんなにもグチャグチャで、でも何にも反応できないほど固まって。

やらなければならない事だけをこなし、毎日が過ぎていった。

多分私、カレー作っただんだと思うんだ。大量に作って、毎日朝晩とそれだけテーブルに用意しておく。朝早く会社に行く課長に出会わないよう、先に家を出て二十四時間スーパで時間を潰し、そろそろ行った頃かなと見計らって家に戻り家事を済ます。

課長の仕事は今、立て込んでいるのは知っている。だから帰宅も遅く日を跨ぐ事もしばしばで、逆にそれが今の私には丁度良かったりもする。

私はカレーだけ用意して、帰宅を待つことなく布団に入り、寝たふりを決め込む。ちゃんと身支度してさえいれば、朝もいつの間にか服が入れ替わってるなどなかった。最初からそうしていれば良かったんだ。寝オチするとか、どれだけ気を抜いていたんだ、私。

自宅でも会社でも……課長が話す機会を窺っているのは気付いている。けれど私はそれに対して息を殺してやり過ごす。話したら、

すべてが終わってしまう気がした。

——心が凍る。

ふと気を緩めればそれが一度に覆いかぶさり、私の何もかもを否定し始めるんだ。

もう一人の自分が勘違いするなよ、と責める。

このままずっとこの家で暮らしたいなとか、ちらっとでも思っ
てんじゃないよ。単なる便利屋代わりに使われているだけなんだよ。
その証拠に、職場で課長は上司という立場を一ミリも変えたことが
ないよね？ それはつまりこの一ヶ月という家政婦代わりの罰が終
わったら元通りにしたいという現われじゃないのか。

課長は、本当は私に関わりなくなかったのではないか。たまたま
私がアレな原稿を渡してしまい、それをいいことに気軽に頼んだだ
けじゃないか。

——誰でも良かったんじゃないか。

だめだ、だめだ、だめだ。落ち着け、落ち着け。

無限ループに嵌る思考を無理矢理ぶったぎって、毛布を頭から被
る。

自分は一体どうしたんだろう。そもそもどこからおかしくなった
かと言えばまあ原稿取り上げられた所なんだけど……それ以外は割
合順調に過ごしてきたと思う。この家にいるとむやみやたらにカチ
ヨーはスキシップをしたり、妙に優しかったりで混乱する事
が多いものの、比較的楽しく過ごしていた。

だけど……リーダーと二人でカフェにいらるところを見てしまい、
心に亀裂が入ったのは自覚している。どちらも私と近い距離にいた
にも関わらず、一言もその様な関係になったと教えてもらえず蚊帳
の外だったのがまず悲しかった。

美男美女のカップル、いいじゃないか。お似合いじゃないか。

けれど課長の隣は私じゃないのがなによりも苦しい。その場所に座るのが私じゃないというのが、心を乱す。

けれどどうして苦しいのか、乱されるのか、当てはまる感情はさっぱり分からず余計に混乱を誘った。

止めの一撃は、女医が放った言葉だ。

——もう話聞いているでしょ？ 私と袴田君が結婚していたこと。

道理で親しそうなわけですよ。道理で何か含んだ物言いだったわけですよ。

バツイチとなった相手はアナタでしたか。ああそうですか。

結婚していた、と聞いて……亀裂の入った心が粉々に砕けた。

約束の期限まで過ぐすのは苦しい。課長の家だけに、気配が染み付きすぎて息が詰まる。

ここのソファのこの位置が課長の定位置で……とか、庭を見れば一緒に草取りしたな、とか。

あの時端っこに集めた草花は、まだ一週間と経っていないのに逞しく根を張った。青々とした葉が風に揺れるのを、ボンヤリと眺める。

家に帰る事も考えた。考えたけれども、約束は約束だ。三つの条件を満たしてから原稿を受け取って、この生活から解放されるんだ。そしたらきつと、この苦しさからも逃れられる……はず。

原稿、かあ……。

あれほど夢中だったBL漫画。読むのも書くのも妄想するのも大好きだったけれど、今は何一つ心を動かさない。

なにもかも億劫で、食欲も全くない。

課長が自宅に帰るまでは、私はリビングのソファの上でだらしな

く寝転がっている。律儀に必ず帰るコールならぬ帰るメールはしてくれるので、そのタイミングで二階の部屋に行けばいいから。

今日は金曜日。週末という事もあり来週に向けての抱える案件も多く、また帰宅は深夜になるだろう。

明日は出勤するのかな。もし休みだったら、身の置き所がない。またリーダーの所に……いやいやいや、それはない。実家住まいのリーダー宅には何度もお邪魔させてもらったりお泊りもしたことがある。けれど会うにはすこし時間がある。気持ちの整理が付いてから会って、「おめでとう」と言いたい。

じゃあインテリアコーディネーターの……と思ったけど、研修で県外に出ている。そもそも彼女の家は足の踏み場を探す、じゃなくて色々乗り越えなければならぬものが散乱している。

あー……どうしようかなあ……。

ごろりと寝返りを打ったら、バンッ！ と激しく打ち付けられた音がした。

「へっ?!」

何事かとガバッと起き上がると、もう一度バンッ！ と音がして、そちらの方向へ首をめぐるせるとそこには――。

「りりい！ コラ開けなさい!!」

ひっ！ リーダー!!

リーダーに憧れを持つ男性は絶対見てはいけない程、それはそれは恐ろしい形相のリーダーが、庭に面した吐き出し窓の外で、仁王立ちしていました……。

怖
ー
ー
ー
っ
!
!

どっちみちリーダーって怖いですよ。

あまりの恐怖に魂が半分抜けたけれど、ここを無視でもしようものなら……向こう三年は崇られそうです。せ、せめて玄関から！とお願いして、玄関に回って鍵を開けた——と思ったらもう開いた！ 早いよリーダー！ あまりの形相にドアから逃げ出し廊下の角へと隠れようとしたけれど、それよりも素早くリーダーが私の腕を掴んだ。

「もうっ！ 何やってるのよ！」

「……な、なにがですか？」

「何がって……分かってないの？」

靴を放り出すように脱いだリーダーは、私をぎゅうつと抱き締めた。

「今にも倒れそうな顔してるじゃないの！ ああ、頬もこけちゃって……バカねえ」

そういつて、私の頬を優しく撫でてくれたリーダー。

——こんなになるまで……あの男、許すまじ！

と、ボソツと出した呟きは一体誰に向けたもの？ 大体リーダー

は何で今ここに來たのでしょうか。私、ちょっと顔を合わせるの……心が厳しいようです。

「あの、御用ってのはなんですか？」

努めて冷静な声を出したつもりが、僅かに震えが混じったか細い音でした。

早く、帰って、お願い！

しかし私の希望は叶えられる事無く、「ねえ、座ってゆっくりお話させて？」と優しい声を掛けられれば、昔からお世話になっているリーダーに逆らえる訳もなく「……ハイ」と頷く事しかできなかった。

お湯を沸かし、いつものようにお茶を淹れる。お盆に載せてリビングに運ぶと、リーダーはキョロキョロと見回していた。

「ふうん、課長さんていい趣味してるのね」

「あー……、この部屋のインテリアは違いますよ」

リビングテーブルに湯飲みを置きながら、同じサークルメンバーのインテリアコーディネーターの資格を持つ彼女の話をした。『B A R A ☆たいむ』サークルに先に入っていて、その彼女が誘ってくれて私はリーダーと知り合えたんです。大体コイツにより私は腐女子の道を歩く事になったのですよ？ 件のBL本を貸してくれたのは中学以来ずっとツレの彼女です。全ての始まりは彼女なのだ。

「初めてこのお宅に來た時、カーテンとソファとリビングテーブルしか無かったですから……っ」と

ああ駄目だ。

これから彼女となってこの部屋に住むかもしれないのに、私がベラベラ喋って気分がいいわけない。慌てて口を噤む私を別段気にした風もなく、私が渡したお茶を一口飲んだ。

そして湯飲みを置くと、「ねえ……」と私の手を握る。

「りりいたん。一体どうしたの？ メールしても電話しても返事がないし、課長さんに聞いても『分からない』の一言よ。……何か悩み事あるんでしょう？ 私で良かったら聞かせて欲しいの」

「何でもありませんよ。本当に……」

「何でもない訳ないじゃない！ チャットにも出てこないし、あのキャラがどうこうっていう妄想の感想ブログも更新されてないし、同人本のお店にも姿見せてないでしょう？」

——私、すごいな。

確かにそれが全てだった今まで、どれもやっていない事など無かった。

二次元最高！ といって憚らない腐った青春。むしろ腐るのが青春だ！ 何故皆分らないかなあっ？！ と思っていたイタい子してたね。

「りりいたんに連絡取れないから、課長さんに聞いたわ」

課長、と言われた途端、バクンと心臓が大きく鳴った。そつと繋がれていない手を胸に当てて、どうかどうか静まって！ と願う。

「カレーを月曜日からずっと……しかもりりいたんが食べている

様子が無いって、すごく心配していたわよ？　それに今は仕事ごとにかく忙しくて、気になるのにどうしても時間が取れないって……参っているわ。だから私が代わりに様子を見るよう頼まれたんだけどね」

という話ができるほど、リーダーと課長は近い間柄なんだ。

私……邪魔者なんだよね。期間限定のクセにそんな態度とられちゃ、面倒くさくてそりゃ参るよね。

「ごめんなさい」

「え？　どうして謝るの？？」

「いえ、あの、私あとちょっとで……この家ちゃんと出ますからお気になさらずに」

「ちゃんと出る……って、何言ってるの？」

「ですから、リーダーは私に気兼ねすることないですよ」

「は？　気兼ね？　え？？」

大きな目をパチクリと瞬かせたリーダー。あれ？　通じないかな？

「だから、私は期限終わったら出て行くので、安心してお付き合いをしていただけ——」

「誰が？」

「え、リーダーが」

「誰と？」

「課長と……」

「……」

「あ、あれっ？」

「……っはあああ？　　どうしてそうなるわけ？」

思わず腰をうかせたリーダーは、はああと大きく息を吐き出して、再びソファにどさりと腰掛けた。

どうしてそうなるも何もないんですけどね、なんて思う私に、あのね……とやけに気が抜けたような声でリーダーは口を開いた。

「意味がわからないんだけど」

リーダー、一言、ドーン!!

それから私がそう思い至った経緯を、たっぷり時間をかけて根掘り葉掘りリーダーに問いただされた。

イケメン上司の観察記録の提出を言われたこと。

ノゾキやコスプレなどの指令で間接的に反応を窺っていたのでは
思っていたこと。

キスだって、トラウマ改善計画に則りとにかく私で慣らしておこ
うって考えたんじゃないかということ。

それから……カフエで二人いるところを見てしまったこと。

重く重く胸の中で押し掛かっていた気持ちを吐き出せて、幾分マ
シになった。

だから、もう遠慮する事ありませんよと付け加えると、リーダー
は……。

「……あんつの、バカッ!!」

バーンとソファを殴り（殴り?!）立ち上がって、「どうして
そうなるのよっ!」と吼えた。

ただでさえおっかないリーダーが怒りのオーラを纏わせたら、そ
れはもう最強の一言に尽きる。

「ひ、ひええっ」

「りりいたん? 最初にはっきり言っておくわ。私は、課長さん

とは全く一切まるつきり間違っても何にもないわよ!」

「ほあっ?!」

「ああもうホントこの子ったら……そんな事で気に病んでたのね。りりいたんが腐子じゃなくなったら普子になって私がつまらないじゃない!」

ん……? 後半なにか聞き捨てならないような……??

リーダーは私の頭を胸に抱えてぎゅうぎゅう抱き締めた。むおお、オムネ、オムネ! やーらかいいいいい!

「バカねえ。課長さんは鑑賞するだけよ? だって私には『俊介』君がいるもの。あんな腹黒好みじゃないわ。大体利害関係が一致して協力したただけのもの……っと。それはともかく、本当に何もないわ。安心してね?」

俊介とは、リーダーが今一番好物のBLキャラクター。実家住まいのリーダーの部屋は壁や天井に至るまでそのポスターがペタペタ貼られているカオスな異空間。家族誰も立ち入れないリーダーにとってパラダイスなお部屋なのです。

歴代彼氏誰も入ったことないらしいというミニ情報は正直どうでもいい。

更に、前彼に腐女子がバレて振られたなんて事も、もっとどうでもいい。

それよりどれより、リーダーのたわわなオムネに挟まれた私は窒息寸前酸素ギブミー!

そりゃーこれ天国に違いないよ。女子な私も、えっらく気持ちがいいのですからっ!

しかし限界を感じタップをすると「あら、ごめんねりいたん」とやっと解放された。

「でもそれだけじゃないんじゃない？　まだ他に気になることがあるでしょ」

「あい……。課長の元奥さんが分かりまして……」

眼科医の、あの病院の女医さんで、と言っただけでリーダーは誰か分かったようだ。大きい病院の受付業務をしているリーダーは、その辺りの情報に明るい。

再びソファに座りなおし、お茶を一口飲んで「あの人ね？」と、トントンこめかみを指で叩きながら記憶を辿っているようだ。

「うーん、結婚してた……とは知らなかったわ。あまり表立って知らせていなかったのかしら。でも過去の事でしょう？　問題ないじゃない」

「問題、ですか？」

「そうよ」

何のことだか全く分からずコテンと首を傾げたら、リーダーはそれを見て天を仰いだ。

「なんだ、自覚無いのね……。絶滅危惧種だわこの子」

はぁーっと何度目かの溜息を吐いて、私に向き直る。

「何で自分が落ち込んでいるのか分かる？　誰によって気持ち」

辛くなっているか分かる？」

誰に……誰って、そりゃ――。

「課長？ ……です。リーダーと一緒に見るの何でか苦しかったです。元奥さんと聞いて、納得もしたけど胃の中に石が入ったようにずどーんって重くなったんです。

課長が私に優しくする度になんていうかももう気持ちさが、急上昇急降下三回捻りの大回転ーっていうそんな気分になるんです。こんな、こんな……初めてでっ……」

今も何かきゅうつと胸の奥が痛んで、両手で胸を押さえた。切なくて苦しくてもどかしくて、何の感情か分からない塊がグルグルして、じわりと目尻に涙が溜まる。

「『こんな……初めてでっ……。ああ、いいわねこのセリフ。使わせてもらうわ」

リーダーがニヤニヤ人の悪い笑みをしながら携帯のメモ機能呼び出してポチポチ打ち込む。ちょ、リーダー、なにしてんのさ！

「あー、もう気が抜けたのよ。だって答えは一つしかないもの」

いいこと？ と、胸を押さえる私の手を取り、ぎゅっと握るリーダー。

「課長さんの事考えるの苦しいのよね？ どうしようもなく。でも、ちょっとした仕草やちょっとした優しさにドキドキしたり、ムズムズしたりするんじゃないの？」

「うー、あー……はい……シマス」

「それはね、ズバリ言う……」

「い、言うと？」

リーダーの目がキラリと光った（気がした）！

「それは、恋よ！」

……へっ？

大暴走は止められないー！ うわあああっ！！

こい、とな？

こいってなんだ。こいこいこい。

「恋愛！ ドキムネ！ りりいたん、分るでしょう？ 『俺はいつの間にか彼のこと、気付いたら目で追っていた……胸のドキドキが苦しい。はっ！ これって恋なのか？！』の、恋よ！」

一人でなんか盛り上がってますねーなんて半目になって見てたら、両肩掴まれて前後に激しく揺すられてガクガクした！

「りりいたんの事言ってるのよ私はーっ！」

「ほ、が、が、がつ、やつ、め、てっ……」

「あらやだ。りりいたん、大丈夫？」

大丈夫かって、やったのリーダーでしーよがー！

パツと手を離してくれたものの首と頭がユレユレでユラユラでふおおおおっ！

「げほげほがほ。……そ、そりで、私がつまり、そのう……恋をしている、と？」

リーダーの説明はアレだけど、なんとなく分かった。

恋……恋、ですと?! ワタシがつ!
がびーんと固まる私に、握りこぶしを作って更にリーダーは力説する。

「そう! 腐女子といえども三次元は別腹よ!」

そ、そこですかっ?! 問題点、そこなのですかっ!?
ぎよっとしながら口をパクパクしてしまう。ああ、声が出ないや驚きすぎて。

「いい? 大事な事だからちゃんと聞きなさいよ? 腐女子が腐女子でありながら、リアル世界を生きられる魔法の一言を!」

「ひっ、ひゃいっ!」

なにをいうんだリーダー!

リーダーの独壇場に半分引きながら脊髓反射で返事をして、ソファの上に正座に座りなおし大人しく聞く。

「いいこと? ———『それはそれ』、よ」

「は……」

「それはそれ。わかる?」

「大事だから二回いう、わかりますわかります。いや分かったのは大事だから二回言うって所であって、リアル世界で生きられるなとかってのがもうそこいらへんが……わああああっ」

「とにかく! りりいたんは課長さんの事が好きなのよ! 自覚

なさいっ!!」

で。

何故か私、会社に来ています。

辺りは真っ暗。そりやもう夜の十時とうに過ぎてますからね。しんと静まり返った会社にそろりと足音を忍ばせて入る。社員なので入るのは可能デス。

しかしこの時間まで残っている同僚はいないでしょう——課長以外。

よっころしよと手荷物を抱えなおしてエレベーターの開閉ボタンを押す。あああ……どういった態度をとればいいのでしょうか……。課長に対して、態度悪かったですよね、私。

いつもの階数のボタンを押して、上昇する。

ソワソワソワとなにかこう、ざわざわするんですねー。

ザラッとしたような、くすぐったいような、そんな気持ち。うかれポンチ（父親直伝死語）なワタシは、到着して左右に開くエレベーターのドアから、えいっとジャンプしてフロアに着地した。

リーダーは『問題ないじゃない』と言った。

確かに、そう。

リーダーとは何かしらの協力関係にあるだけで、前妻とはとっくに別れている。そしてそして、今現在付き合っている人はいないよ。うだとリーダーは教えてくれた。その後ボソッと「付き合ってる人も何も……」って呟き、それは何かと尋ねたら……にっこりと、そりやーもう綺麗な笑顔で「なんでもないわ」とおっしゃったわー

ー！ くっそ、ゼツタイ何か握ってますぜ！

悔しいがワタシでは全く歯が立たない。掌の上で踊らされようが全力で面白がってるリーダーには逆らえないのですよ。

でも、リーダーは基本私の事を可愛がってくれている。今現在可愛がってくれているという表現は微妙ですが、妹の様に思っていてくれるらしい。「うちの弟なんかよりよっぽど可愛いわ！」と常日頃言ってますからね。

ちなみに、弟モデルでBL妄想しないのかと聞いたらキレられました。汚さないで私の世界を、と。

……まあ私も葵兄いでは全く妄想できませんので。っていうかゼツタイいやぢゃ。

とてとて歩みを進め、わが社のドアからそつと中へ入る。

受付があり、その背後にはパーテーションで区切られた机の島がずらりと並ぶ。なんとなく音を出さないように、コソッとパーテーションの影から様子を窺うと、一番奥の窓際に課長がいた。

非常灯がほのかに光るだけのフロア。そんな中、卓上の煌々とした光がくつきりと課長の横顔を照らす。

真剣な眼差しでノートパソコンのディスプレイを眺め、カタカタと忙しない音がしんとした室内に小さく響く。

その様子をじっと見つめる私の胸は、ばっくんばっくんと大きな音を立てて血流が促進されていた。体温が急上昇して体中が火照って仕方が無いですよほんとー！ なにこれもうどうすんの！

私は目をぎゅうっと閉じて、その場にしゃがみこんだ。

キターーーー！　これか！　だからか！

——ちょ、やだ。

あまりに激しい動悸が聞こえやしないかハラハラしてしまう。も、本当に、私ってば……。

ぎっ、と金属音が聞こえ、バクンッとより一層心臓が打ちつけた。え？　いまの、何の音？

気になってこっそり覗くと、課長は椅子の背もたれを利用して背中を伸ばし、片手は目頭を押さえていた。週末の金曜日……ずっと残業続きで疲れますよねそりゃ。でも私は全く労わることなく自分の事ばかりで……。

「か、かちょう……？」

ゆっくり歩み寄り呼びかけると、目を閉じて天井を向いていた課長はガバッと体を起こした。そして信じられないものを見るような目で、私を凝視する。

「——ユリ？」

ギシリ、と音が鳴り体ごと私に向く課長。

何か言いかけ、しかし首を振りながらガシガシと雑に頭を掻く。

その姿を見た私は、どこか脳内でカチツと音を聞いた気がした。

う……ちよ……、み、乱れた髪っ……!!　その乱れた髪いつ!
!　あああああっ!

『「ああもうワカンネエかな!　俺は嫌なんだよそういうのが!」
大声で喚いた彼は、頭を掻き毟り地団太を踏んだ。

そんなことを言っても僕は仕事で取引先の男性と共に仕事をした
だけだ。やましい事など一つもない。そりゃ確かに僕の好みピツタ
リではあったが、そのケがない相手に手を出す程飢えていない。

「お前、嫉妬してんのか」

「はあっ?!　俺が?　んなわけねーじゃん!」

「クククッ。そういうところ、お前かわいい」

僕より頭一つ分背の高い彼。締めているネクタイを捕まえてぐい
っと引き、その勢いに乗せて僕は彼の唇を――――』

「っちよわあああああっ!!」

なに!　今の、なに!!

思わず叫んでしまったワタシ!　だって……だってええええ!

「ユリ、どうした!」

慌てるカチョーをよそに、私は両手いっぱい高く上げてバンザイ
をした。イエスイエス!　イエース!

「よ、よかった!　妄想できましたよカチョー!」

「……………は?」

「妄想できたんですよ！ カチョー！ あーよかった、NLしか
もう一生浮かばないのかとヒヤヒヤしてマシタ！ そうっ！ これ
はまるで……まるで……たたなくなつたムスコが、やつとたっ――」

ぐすつ。

「ふぎやつー！」

「阿呆！」

おもむろに私の両頬をカチョーはガシツと挟み、勢いよく頭突き
をかましてきた！

「いったー！ー！！ ほしっ！ 星が飛びましたよちよいと！」

そしてちよつとカチョー、手を離して下さいよっ！ その、その、
手に挟まれた頬の、じわりと伝わる温かな温もりが……が……ひい
やああ！

しかしカチョーは私の訴えなんか知るかといった具合に乱暴に私
み引き寄せ、唇を合わせた。

「もぎやつ……！！」

ガツチリと押さえる手は荒々しいのに、触れる箇所からは不思議
と臆病さを感じた。まるで何かの境界を探すように、皮一枚掠め、
熱が触れ、柔らかさを確かめる。軽く啄ばむように数度繰り返した
と思ったら、今度は……っ！ え、まって……！！

くすごいことく

「ちょ……っ、あっ……ふによお」

すっかり腰砕けた私は、カチョーに凭^{もた}れかかっていた。凭れかかるといふか、もうこれカチョーにぎゅうーって抱き締められちゃってるんですけどね！

カチョーは私の首筋に顔を埋めてじっと動かない。いや動かれても困るしでも離れてもらわねばもつと困る。

だいたい、だいたいですよ？

「かちよ……こ、これ、ゼツタイ十八歳未満閲覧禁止行為デスよ……」

「人聞き悪い事言うな。いっても十五未満禁止レベルだ」

「じゅ、充分じゃないデスカ！！ 何でまたこんな……っ！」

「俺の我慢が足りないだけだ」

「意味分かりませんよっ！」

「では分かるまで……」

「いやいやいいデスいいデス、もーいーデースー！」

キャパオーバー！ もうムリー！

ジタバタと身を振って逃げようとしても、意外に強いカチョーの腕はびくともしない。いえ、腕見たことありますけどね！ 半袖Tシャツから覗くあの筋々^{すじすじ}としてゐる締まったき・ん・に・く！

あれはもう私の脳裏に焼きつけてありますので、いつでも映像呼び出せます！

はっ！　そうか……。

私は唐突に理解した。そうかそうか。急にBL妄想復活したのは……恐らく対カチョーだったからじゃないのか、と。『課長、深夜に愛を』など今まで私が同人誌に投稿したカチョーと清水先輩のカップリングシリーズ。元はといえば『理想のS彼氏！』と面接の時に見てビビッと来たからなんですよね。ひよっとして私、カチョー萌えしてたからですかい？　だから、カチョーがあつてのBL創作意欲、だったのですよね？！

あーなんかスッキリした！

キターーーー！　　これか！　　だからか！（後書き）

「妄想部」

<http://mypage.syosetu.com/144526/>

今回は動物企画となっております。私は雀が主役のお話を書いていますよ♪

それと、来月以降のネタを募集しております。

妄想部、または私の方にお知らせいただけると……うれしいです！
です！！

好きな人の過去って、知りたいデスよね？　ね？

ひとしきり『腐子』に戻った原因を脳内で探っていた間に、カチヨーは何故か私を抱き締めたまま持ち上げ椅子に移動して座り、カタカタとキーボードを打ち始めていた。

ちよ、自由だなカチヨー！

「カチヨー！　抱っこしたままってなにさ！」

「仕事を終えてからまたな」

またなんて何だよまたなんて！

しかし不思議な構図ですな。真っ暗なオフィスフロアに一点だけ光る卓上ライトとディスプレイ。向かい合う男の膝上には抱きつくような姿のワタシ……。

まで。おかしいよ、おかしい。

何がおかしいって————最後の「ワタシ」の部分がぜったいおかしい！

「カチヨー、私降りる」

「駄目だ。今はユリを感じていたい」

「くわー！　どこの官能小説デスカ！」

足をずらそうにも腕を解こうにも、なんでこう器用に捕まえておけるんですかねカチョー！

「……む？」

「……刺激するな」

「ちょ……ごふっ！　だだだ駄目デスー！　降りる降りる降ろしてえええ！」

なんで平静なのさ！　もうなんでばかりな私はどうしたらいいのさ！

なにかしらが腰に当たるのをすぐさまピーンときた私は、今度こそ本気の脱出を試みた。このあばれんぼうめ！

いくら私がカチョーの事好きなんだけれども、あまりにもアレな展開は脳みそついていけましょんよ！

「カチョー！　あのあのあの、お弁当作ってきたんで……それを食べましょよ！」

「弁当？」

「うあ、ハイ」

もうね、さんっざんカレーでスマセンですよ！　だからせめてお弁当作って食べてもらおうかと思って。リーダーが帰ってから心を込めて作らせて頂やした！

——課長さん、きつと週末だから帰るの深夜よ。そこからまたカレーだなんて可哀想だわ。

やたらニヤニヤしてて気持ち悪いリーダーからの助言に従って作り、お届けに参上したのだ。胃袋掴むには故郷の料理が一番だけどねと言われたが、残念ながら私はカチョーの過去を良く知らない。フツ―に母親に作ってもらっていた味を思い出しながら弁当箱に詰めるだけだ。「お茶淹れて来ますからー！」と言ったらアツサリと膝上から下ろされ、まあ言った以上やらねばと給湯室へ向かった。

「懐かしい味だな」

カチョーはおにぎりを一口食べてこう言った。

具はおかか。鰹節に砂糖醤油で味を付けたもの。これ作ると友達は皆「甘っ!」ってびっくりされちゃうけど、私の所ではフツ―でっす! あとは天ぷらも甘辛く煮たり、甘い卵焼きだったり。基本甘いデス。

どーして懐かしいって言ったのか……わからぬ。

「ユリ、お前も食べる」

そういつて、カチョーは私に三個あった大きなおにぎりの内の一つ寄越してきた。正直な所あれこれ誤解だと分かった途端お腹は空いていたのでありがたく頂戴する。いいいえ、ほんとというカチョーに弁当渡したらすぐにお暇ごきようするつもりだったのですがね。

カチョーの机の横にキャスター付きの椅子を持ってきて、並んで食べる。

「あい。モグモグ……あ、かちよー……モグモグ……かちよーんちも……ごつくん……こんな味だったんデスカ? ごくごく」

「喋るか食べるかどっちかにしろ」

「いやほら、カチョーって今まで何して生きてきたのかと思いましてね」

「お前何気に失礼な奴だな」

「そんな今更じゃないデスカ。もぐもぐ。私のは履歴書みてご存知でしょーからカチョーの知りたいなー、と」

食べやすいようにと、ピックに刺したタコさんウインナーとか諸々、あっという間にカチョーのお腹に納まっていく。私が作ったものが綺麗に食べられていくのを見るって、ある種の快感を感じますね。脳みそで言えば後頭部の右五時の方向がこそばゆいような。私の料理の味を懐かしいというカチョー。この会社に来るまでの事って知りたいなとふと思ったのでデス。ほら、好きな人の事知りたいとか、そんな純なヲトメゴコロですよー！ キヤ！

おかずもいくつか私の為に残し、食べ終えたカチョーは専用の湯飲みを手に器用に片眉を上げて見せた。

「俺の事？」

「ハイ！ 見た目は良しでも中身は俺様どえす。これはもう分かりきっているから横に置いとくとして、出身とか、経歴とか……イデデデデ」

一言多い、とグーでこめかみグリグリされました……。あうう。

「興味を持ったのはよしとしよう。しかしお前……ほんとに……」

なんだか大仰に溜息を吐かれてしまいましたよ?! なんだ?

ほんとにバカかアホかトンチキとでもいうのか。

ぎし、と椅子ごと私に向き直って、イヤミなくらい長い足を組みなすった。くそ、ちびっこへの挑戦状だな?!

「少しは俺の居場所があると思ったんだがな……まあそこはユリだからと諦めるしかないか」

肩をすくめて何か達観したようなカチョーは、腕を組んで背もたれに体を預けた。つまり『T H E ☆偉そう』ポーズ。似合うから恨めしい。

「そうだな……どこまで話すか。愉快的話ではないぞ?」

といいながら、私をちょいちょいと手招きする。はいよはいよと近づこうとして気付いた! やべ、これ二の舞ジャマイカ!

いくらカチョーの事『スキー!』だとしても、一足飛び過ぎて無理だと思ふんスよ。こうさ、段階を踏んで……いやまて。いやいやまてよ。すでに同居してんじゃないん私ってばあわわわ!

そんな事実には愕然としている私にじれたのか、カチョーは椅子をすぐ横にくっつけて私の肩を組んで引き寄せた。ちょおいっ!! なぜえええっ!

しかも目線はディスプレイで右手はキーボード打ってるし! 仕事の続きですかそうですか……って、ほんとと器用だなおい!

「俺が生まれたのは――」

構わず話し始めるカチョー。いや構ってるのは私ですがね！

「書類上は東京だな。それからは転勤族だった両親によって全国各地回って……正直幼い頃の記憶は薄い。中学二年の頃両親が離婚で揉めて一人っ子だった俺は父方の祖母に引き取られた。祖父はその前年に亡くしていたから、祖母と俺がお互い支えあう為という口実の元、親権を押し付けあっていた両親は丁度いいとばかりに追いやったというのが真相だろうな」

感情の読めない声で訥々と話すカチョー。まるで他人の人生のように語られている。

肩を組まれているから見上げても顎あたりまでしか分からないから、表情を窺う事もできない。

ご両親……。初めて知るカチョーのプライベート。中学二年生だなんてめっちゃ思春期真っ只中！ 中二の自分なんてBL漫画に出会ってキャッホー！ と腐女子街道まっしぐらデシタね。どう考えても子供。それなのに両親二人とも親権を押し付けあうだなんて……身動き一つしないカチョーに、思わず頬をすり寄せた。要らない子なんかじゃない、と気持ち伝わって欲しいと思いつつながら。

そうしたら……カチョーの体の熱やら心臓の音やらが布越しにウツカリ感じられてしまい、そしてそして生活を共にしているからだけど、同じシャンプーと同じボディソープと同じ洗濯の香りが更にそれに足されてカチョーの男の香りまでが鼻腔をくすぐりなんかあれ私どうしたのってくらいいうわああああっ！

「――聞いてないな？」

「嗅いでます！ あっ違った、聞いてマスヨ聞いてマスヨはいはいー！ えーと、それから？」

「お前ってやつは……まあいい。それで十八の年に祖母を亡くし、大学進学もあって家を処分し、一人暮らしを始めて……二十五歳の頃だったか？　音信不通だった両親の近況が入ってきた」

私の肩に掛けられていたカチョーの手が、私の後頭部を壊れ物を扱うかのように優しく幾度も撫でる。さっきまでカチョーの過去が知りたいなんて言ってた自分を殴り飛ばしたい。そんな軽い話、一つもないじゃないかカチョー。

つらくないわけがない。子供を要らないモノかの様に祖母に押し付けその後音信不通だなんてそれでも親か！　十四歳は大人への入り口に足をかけた年齢で充分理解できてしまう。見ず知らずのご両親に腹が立って仕方がない。今更な近況とはなんなのさ。

言葉の続きを待つ、私を撫でていた手がピタリと止まった。

「警察からだった。交通事故で……二人とも。身元確認と引き取りの電話だな。とつくに別れているものだと思っていたが仕事で色々不便な点もあったらしく、便宜上夫婦のままだったようだ。やつとケリがついて離婚届にサインをする為に父親の車に乗って……前方不注意でトラックに正面衝突したらしい。俺が思うに口論にでもなって運転が疎かになったんだろう」

クス、と僅かに口角が上がったのが見えた。なんとも冷たい笑い……胃の中がヒヤツとする。

「結局夫婦として死んだんだ。これまで何やってきたんだろうな……」

嘲^{あざわら}るように吐き出される言葉は肉親に対して出す声色じゃなかった

た。

カチョー！ 萌えポイント多すぎデスっ！！

「それで俺は多額の保険金と土地の売却益や株式などの資産を受け継いだ。だが、見た事も聞いたこともない親戚どもが湧いてきてな……金目当てなのは明らかで、使い切ってやろうと株式の良く知らない銘柄に全財産突っ込んだら飛躍的に業績が上がったりで結局倍以上になってしまったが」

上手くいかないものだ、と自嘲気味に笑うカチョー。

いやいや。いやいやいや。上手くいかないとかじゃなくて、えーっと、意外に雑な面があるのねカチョー！？ って、そうじゃないそうじゃない。雑にしちゃあ……ちよっとねえなにこの気持ち。ツッコミいれて笑う所??

「丁度資産家の一人娘から打診があつて、煩い血縁関係から逃れる為結婚して離婚した。俺の過去は以上」

ちよ……、まってまってそこ端折るの！？ ていうかそれあの女医デスよね！？ そこ割と重要じゃね??

「ほかに何か？」

「何かつて、ええええええ……」

カチョーの右手は滑るようにキーボードを叩く。価格、流通、プロモーションなどの戦略をまとめて来月ある会議に間に合わせる為

らしい。そんなに急ぎとも思えないんだけど、やっておかなければならない理由があるようだ。

「ていうかですよ?? 大体の話で良かったのにどうしてソコまで私に……?」

普通の友人関係にだって話しづらい内容だよな? めっちゃ暗い過去……。私、超気軽に略歴分かればいいなー位に軽く考えてたから、まさかこんな詳しく語られるなんぞ思ってもみなかった。それがあって今がある。それは勿論そうなんだけど。

「ユリ、お前には知る権利がある」

「なんでデスカ」

カチョー質問には答えず、肩を組んでいた左手で私の頭をぐしゃぐしゃと撫で、ぎゅっと抱き寄せられた。ああお……か、かほりっ! す、すめるっっ!!

「は、離して下サイよっ!」

じゃないと、この色香に酔ってしまっわー! どうにかなっちゃううう!

流石たぜカチョー、やるな!? 『課長、深夜に愛を』がリアルでイけるぜええっ!

「だだだからこんな根性悪に……じゃなくてゴホンゴホン! よくまあ(ある程度)マトモに育ちましたね」

少年少女の漫画なんかで生まれや育ちが不幸な人は、大概不良に

なったりやさぐれたりな青春時代を過ごしているものだ。いくら祖母と暮らしていたとはいえ、なにかしら道を外れていても不思議はないのだけど……。

「ああ」と、カチヨーは抱き寄せる手がすこし強くなった。そして私の頭に頬を寄せてきた――って、ちよつとスキンシップ?! ちよ、ちよ、べつたりじゃね? なんだ私ペットかなにか?!

「俺を俺と認めてくれる祖母との暮らしは快適だった。田舎でなにも無いが、自然が豊かで温かい人ばかりいたからな。今でも俺の故郷だと思っている」

俺の故郷……。幼少時全国あちこち移り住んだカチヨーにとって、祖母の存在、土地への郷愁は特別なものらしい。

まあ私は生まれも育ちも全く変わっていないので、故郷というのがよく分らないんですけど。

「じゃあ何でそこに家建てなかったんですか?」

あんな駅近くの一等地……確かに便利だけでもそこまで故郷懐かしむのならば、またそこに住めば良かったのに。

カチヨーは、ふ、と視線を落として「だがな……」と言い、苦笑った。

表情は笑みの形を刻んでいるのに、後悔とも取れるこぼれ落ちた声に、私は何故か胸が締め付けられた。

「祖母がいない」

……あ。

そうか。カチヨーにとって、全ての救いの主であった祖母が居な

いから。戻るつもりが無かったのは、亡くなってすぐに家を処分したことでも知れるのに……。

カチヨーは、祖母、両親、親戚、配偶者、そして故郷……全て無くなってしまった。じゃあ「いま」のカチヨーは？ カチヨーは「ぼっち」なの？

ぽつんと暗闇に佇む姿が目には浮かんできました。こちらに背を向け感情の読めない背中中は、すうっと誰にも知られずに消えていってしまうような……。

違う。「私」がいる。私がいるよ！

思わずすがりつくように腕をカチヨーの背に回して強く抱きしめた。だめだめだめ！ だめったらダメ！

「ユリ？」

「大丈夫デス！」

私がそばに。一人じゃない、一人になんてさせない。

しかしこの言葉は喉の奥で留まった。言ってしまうには色々飛び越えすぎじゃないかと自重したから。

代わりに、ありったけの想いを込めてカチヨーを抱きしめた。スーツのジャケットは脱いであるので、シャツから伝わる熱がより一層私の熱を上げる。辺りが静かなこともあって、トクトクと小さく心音が聞こえる。やや速く感じられるのは気のせいかな？

つい、つい、その音を聞いていたくてそのまま……。――。

――寝・て・マ・シ・タっ！ わああああっ！――！

カタカタとキーボードを叩く音が、目の前に。

あれ、同じシチュアありましたよね？ え、私またやつちやった？
？ え、まさかまさか！

今度はちゃんと状況を見極めようと、息を殺して視線だけ巡らせる。

どうやら、抱きついたまま寝てた、らしい、ね？

ままままあ……確かにずっと寝不足でもあったし、勝手にしていた誤解も解けてホッとしたのもあるっつか。ご飯も食べたから胃袋も落ち着いて、カチョーの温かさに包まれたらそりゃ寝るよっつか。

誰か、これで寝ないなんて言う人が居たら逆にとっちめてやりたいデス。あの心臓のリズム、肌に伝わるカチョーの熱、たまらなく心地良かったんだよ。ふっと力が抜けて安心して身を任せたというか……。

椅子を二つ並べた状態で座り、カチョーに抱きついていたはずの私は、何故かカチョーの足を跨るようにして正面から抱っこされていた。

何故抱っこ。

体全てをカチョーに預け、のんきにグウグウ寝てた私って実はとてもすごいのではないのでしょうか……。

ああ、でも。このスメル。たまらないですね……大好きな人のかほり。その人のかほりってだけで、いい匂い率三割り増しデス！

(当社比)

思わずクンクンスンと肺にいっぱい吸い込んでいたら、耳をぎゅうううっと引っ張られた。

「あだだだだだだだ！」

「こら変態」

「ちょ！ 変態とはこれいかに！？」

「終わったぞ」

パソコンの電源を落とし、私の背中に手を当て落ちないようにしてくれながら、ぐぐつと背伸びをした。

フロアの掛時計をみればすでに日付を越えている。

あわわわ、私スゴく寝てた。たっぷり寝てた。——ぐっすり過ぎやしないかい、私！？

「かちよ、かちよー……ごめんなさい。あの、あの……」

「かまわない。むしろ……いや」

むしろ？ その後カチョーはなににか思いついたようにニヤリと笑った。

「家に帰ったら少し体をほぐしてもらおうかな。同じ姿勢で疲れた」

「はいっ！ お安いご用でさあ！」

「明日……じゃないな。今日明日の土日はこれで丸々休める。さあ帰るか」

「お疲れさまでした！」

体を少し離して、やっと終えたお仕事を労うよう顔を見てニコリ笑うと、カチョーは「参ったな」と後頭部をガリガリ掻いた。

「手を出してしまうかもしれん」

「いいデスよ？」

ぎょっとした顔で私を見返すカチョー。なに？　なんだ？

「え？　あの、手だけじゃなくて足もちゃんとマッサージしますよ！　こう見えても、家族の中で一番上手だと褒められる程の腕前で
すからっ」

「……そうか」

あれっ?!　なんであからさまにガッカリしてるの???

ガンガンでイエッス☆

会社から自宅まで徒歩二十分とはいえ、所々暗い場所がある。深夜だから人気もなく、お酒飲んでたら、ヒヤッホー！ オツケー！ 走るぜいい！ といった具合に気が大きくなるけれど、ほら私ってば乙女でしょ？ やーん、こわいー☆ っていう可愛い部分もあるワケで。

ちよっぴりカチョーとの距離が近くなった気がするから、押せ押せでいこうと思ひマス！

会社から通りに出た所で、カチョーの袖口をツンと摘んだ。「なんだ」と引っ張られたカチョーは振り返って私を見下ろす。

「あの。手、握ってもいいデスカ？」

今まで手は握った事がある。だけど、手の大きさや感蝕や温かさを知る事ができたのはカチョーから与えられたものであって、自分から求めるようお願いするのは初めて。一步を踏み出すのデス！ キヒヒ。

私が差し出した手を、カチョーは数秒じっと見つめた。――ダメ、だった？

あ、ゴメンナサイやっぱいいですと引っ込めようとしたら、一瞬早く大きな手が私の手を捕まえ、握られた。しかもしかも、指と指を絡めるように……によほ！ これ、恋人繋ぎつつーやつじゃないデスカ！？

「密着イエッス！」

「……何がだ？ ほら、いくぞ」

「うわわ、はいーっ！」

声はそっけないのに握るその手は優しくて。

私の乙女なハートがきゅんしました。デヘヘ。

たとえあとちよっとの期間の同居といえど、このポジションはオイシイ。これはいっちょ頑張ってカチョーのハートに爪痕を残さねばなりませんね！

しかしもし『ラブ』ったのならば。

……カチョーが私とイチャイチャ……イチャイチャ……うを、想像できマセン……。

いやいや、一度はノーマル妄想イケたんだからさ！ んーと、んーと……。

『（どう考えてもカチョーが危ない方向に走っている妄想）』

「ムリーーーーーっ！！ もごっ」

「声落とせ阿呆！」

深夜のオフィス街とはいえ、ちよっと横道にそれれば閑静な住宅街が広がる。さすが地方都市。

カチョーが繋いでいない方の手で私の口を塞いでくれたので、通報レベルは避けられた。ふう、危ない。

「ただいま！」

鬱々の一週間空気を吹き飛ばすように、玄関の扉を閉めてから挨拶の声を家の中に入れた。ほら深夜だし！

そして靴を脱ぎ上がり框へ足を伸ばそうとして気づいた。わあっ！
まだ手繋いだままー！

「かちよ？ お風呂はもう沸いてますから先にどうぞ」

「――ああ」

握る掌に視線を落としたカチヨーは僅かに力をこめた後、手が離れた。温かかった手の平がすうっと冷たくなる。その温もりが名残惜しくもつと欲しくなるけど……これからもつとのお楽しみタイムがつ！

「じゃ、私ちょっと片付けしてきまっす！」

弁当箱や朝食の準備をするため台所へ。

まるっと空になった容器は気持ちがいい。タコさんウインナーとか、甘い卵焼きとか。私も多少食べたけれど、喜んで食べてもらえて、しかも平らげてくれるというのは冥利に尽きるというもののデス。

――そう、悠久の昔から言うではありませんかっ！！

『男は胃袋で掴め』

イエッス！ 頑張りまあっす！

カチョーの胃袋管理は今まさにワ・タ・シ☆ この同居生活で人並みに料理が出来るようになった私としては、いよいよ踏ん張りどころがやってきマシタ。

あと残り……何日だ？

弁当箱を洗う手を止め、カウンターに置いてあった卓上カレンダーを覗き込む。

日付が変わったため、本日は土曜日。一ヶ月は三十一日ある。つまり残りまるっと九日間、か……。

指折り数え、最終日が月曜日というのを確認した。

再び蛇口を開いて洗い物を再開する。

思うに、最終日のある週末になにかしらの都合が入っているから……この家で。

カチョーは平日寝て起きるだけだったし、元々家具家電ほぼ無かったに等しい生活。散らかっていると思っていたのにこれじゃ散らかりようが無いじゃん！ な日常を送っていたので前日までに片付ける必要が無いわけだ。

客……って言うてましたが、誰でしょうね。

生活臭がある家を見せなければならぬような相手、ってことなのか。ご両親は鬼籍、田舎の祖父母もいないとあってはサッパリ見当もつかない。

これで実は『再婚相手がいるから』なんていわれちゃ泣けますね……。

うをつ、や、バイ、ヤバイ、ちょ……！

「ユリ、お前も入ってこい」

「——い、い、いえっさ！」

俯く私に湯上りのカチョーから声がかかった。不審に思われないようダッシュで洗面所に駆け込む。

「……はう」

引き戸を閉め、それに背を預けながらズルズルと座り込んだ。

『カチョーが実は誰かのもの』

それをチラリと考えたら、涙腺崩壊しかけた。心臓がぎゅうううと雑巾絞りされて、体中の関節が碎けるように感じた。よしここはテンション上げる為の一つ。

「わー、まじばねえ！ さげばよ………グフツ！」

………大・失・敗。

無理矢理知ってる単語並べたけど、よく考えればギャルなんて私と対極じゃないか。痒い、痒過ぎる、血管の内側が痒い位に痒い。

『Orz』↑まさにこのポーズでガックリと項垂れた。

微妙な気分になったので、さっきまでの変な落ち込みはうつすら消えて結果オーライ？

妄想してはキリがない。今ある現実でひとまず頑張ってみようと思うのデス！ ドキドキマッサージで更に私の価値を上げるのデスヨ！

シュパッと服を脱いで籠に放り込んだ。

け、健全なマッサージなんだからねっ！（ツンデレ風）

「あつれー？ カチョーどこデスカー？」

お風呂から出てリビングに入ったけれど、カチョーがいない。おや？ 台所、玄関、トイレ、いないなあ。

んっ？

二階から何か聞こえた気がして階段を上ると、カチョーの部屋から「ここだ」と声がかかった。

「えっ、ああ、お疲れですか。もう寝ますよねスミマセンおやすみなさい」

朝も早く夜も遅くてカチョーは眠いに違いない。マッサージはまた今度という事で……と引き返そうとしたら「入ってこい」と。

むおっ……！

ワタシ、掃除とか色々やっていますが、カチョーの部屋だけは入っていませんの。ほ、ほらっ。プライベートな空間と申しますか、なんというか、ね？ お掃除してて本棚の下からアララこんなお嬢様がお好みで？ とか、いやそれもお嬢様じゃなくて実はマツチヨな青年がお好みだった！ とか発見しちゃうかもしれませんし、ウツカリゴミ箱から丸められたティッシュの山とか発見しちゃったら大変デスヨ！ 私はそれなりに理解のある女子なのでどっしり構えますがね！ っていうかネタにしますがね！！ うひょー、ド・キ・ド・……。

ガチャッ。

ごすつ。

「んぎゃっ!!」

「遅い」

妄想が暴走しかけた私のおでこにクリティカルヒットかましたカ
チョー部屋のドア。音は大きいものの意外にダメージは少なく、タ
ンコブは免れた。しかし痛いものは痛い。

「ほら、入れ」

ドアから体をずらし、私を奥へと招き入れるカチョー。

——男の人の部屋って、初めて入るんですけどっ！ いやマテ、
そもそもこの家全部カチョーのモノですけどっ！

いかにもプライベートな空間にドキドキムネムネしながら「オジ
ヤマシマース」と体を縮こませ中に入ると、おおよそ十六畳はあり
そうな広い空間。ほうほう、私の部屋続きの広いベランダにウォー
クインクローゼットがある、と。こげ茶を基調とした机、本棚……
難しそうな本が沢山ありマスネ。私の本棚と大違いデス。すで見
られちゃいましたが、そうでなかったら今すぐ四次元に放り込みた
いほどに恥ずかスィー。

そして——ベッド。まさかのダブルサイズ！
はっ！

前妻である女医とこのベッドでイチヤコラしたんじゃっ！ スプ
リングの音響かせて、あーんなことやこーんなこととして、更に

「——おい。全部聞こえてる」

「ぎゃっ！　ダダ漏れっ！！」

「阿呆が。これは先月買ったものだ」

「先月？　にしても何故ダブルサイズ??？」

ぼっち寝でダブルなんて広すぎじゃね？　寂しさ倍増じゃね？

「いやでも分かりますワカリマス。私寝相酷いんでベッドでは寝られないんですよー。よかった、こっちでも敷布団で寝られて！」

「寝相も酷いのか」

も？

それを聞こうとしたけど、カチョーはベッドに腰掛け「じゃあ頼む」とゴロリとうつ伏せになった。

「たのっ？」

「マッサージ」

そうでしたソウデシタ。そもそも私がやるよっていうからお部屋訪問なのでした。

ってー！

ベッドの上で全身を御所望だとおおおお！？

寝そべるカチョーは……なんというか超無防備。襲えと？　襲え

とうう??　ふわああああっ！

いやまて落ち着けワタシ！　日頃のお疲れ様の気持ちを込めてやましさ一切隠してとにかく丁寧な体を解すそれが！——マッサ

ージというものだろう！（バーン）

「じゃじゃじゃじゃあ、失礼シマス」

動揺を自覚しつつも、ギシッと音を立ててベッドの上に乗る。

目の前には黒の半袖Tシャツとジャージー素材のズボン。ゆったり目だけどうつ伏せのカチヨーの体に丁度良く張り付いて、体つきがよおおおおおおおわかるってもんデスヨウ！

もう私どうしたらっっっ！ 鼻血大丈夫かなっ！

アワアワしている心の中を「深呼吸、深呼吸」と宥めようと思っただのに、今度はその吸い込む息から新たなる悶えが発生。

カチヨーのかほり、かほりいいー！ うわあ、生々しいっ！

ヤバイデスヨ。完璧に私変態！ マテ私マテ妄想！

ハアハアと変態臭い呼吸をし、『平常心ヲモテ』と呪文のように繰り返しながらいつも家族にやっているようにそっと体制を整えた。

「ーっ」

「なんデスカ？」

「乗るな！」

「えー、いいじゃありませんかっ。私いつもこうデスよ？ やり易いんで黙ってて下サイ」

只今の私。馬乗り。

えー、横着するわけじゃなく、本当にいつものマッサージするんだったらコレなのです。まずは足側を向いて右足より、リンパの流

れに沿ってもぎゅもぎゅもぎゅ。反対の左足も同様に。くると今度は頭側を向いて腰を揉み始めると、カチョーから「お前変なところで大胆だな」とやや呆れた声が聞こえた。

「えー、慎み深い淑女のつもりですがなにか？」

「……本気で言っているのが恐ろしい」

それきり黙って私のマッサージを受ける。背骨の周りを丁寧に揉み、肩甲骨の回りも解し、肩から腕を、そして首筋を……。

これで一通り終わった、かな。

そろりとカチョーの上から降りる。しかしカチョーの反応が無いのでコソッと顔を覗きこむと、ありや。

——寝てる。

うむ、気持ちよかったですねきつと！　じーちゃんやおとーさんにもよく寝落ちされるんで、まあオツカレだったのもあるからなーと軽く毛布を掛けて部屋に戻ろうと——さてよ？

キッヒッヒ。

今が、チャーン☆

ほんのちよつとのイタズラ心がえらい目にい！

ふ、と僅かに体が揺れ、意識が浮上した。

「おやあ、私いつの間に寝てた？ 夜中の三時過ぎまでは記憶があるけど……」。

しかしあまりに気持ちいいので、目を閉じたまま二度寝に突入――

マテ。

何でワタシこの部屋で寝ているの？

え？
なんでベッドに横になっているのー？？

混乱していたら、ぎしつとベッドのスプリングが音を立てた。その揺れの原因って——そう、一人しかないじゃないか。

体中の皮膚がピリピリと過敏に緊張する。一気に頭が冷えたわ！
ビックリなこれまさか噂の朝チュン！？　いえ、もう昼チュン
ですねすみません！　って謝ってどうするよ私ーいい。

ヤバイっすよこりや。マッサージ終わってからこの部屋に居続けた理由なんて言えませんかよちよつと！

ここはひとつ寝た振りをば……。

私は横向きに丸まっていたので背中側の様子は全く見えない。内側必死だけど外側は『まだねてますよー』を取り繕って、とにかく現状把握だよこりゃあわわ。

[illegible]

心臓の音が激しく胸の真ん中でリズムを刻んでいる。うをおお、
落ちて着けえええ!!

ベッドがきしみ、一人分の重みがなくなった。

床を歩く音。そして立ち止まる音。カサツと音がして……。

や・ば・い。

そそそそそりはっ!

「なんだこれは」

う、う、う、ううう……!!

「――無駄に美形、黙っていればいう事なし。声は乙ゲーに出てくる低音系。骨格がすばらしい。無精髭はかせないアイテム。手がでかい。無防備な寝顔がいい。整えられていない髪がツボ。テントは朝観察す――」

「うぎゃあああああっ!!」

ガバーツと飛び上がり、カチョーの手に持つメモ帳を奪い取った。
ちよ、こ、これ、これはあああっ!

「……ユリ、おはよう」

さ、さわやかな笑顔でーっ!

どうしよう、カチョーの目が全く笑ってマセン。ガクガクブルブル。

このメモは、マッサージの後グウグウ寝てしまったカチョーを見てつい魔が差したというか……リアル観察したわけですよ! だっ

てー！　こんな隙だらけなカチョー見られる機会なんてまずないし、チャンスは生かさねばなりませんのよおっ！

「おっ、おっ、おはようござりまするっ！」

「丁寧にマッサージしてくれてつい寝てしまった。悪いな」

「いえいえっ！　滅相もございま……」

「で？」

「で、とは……？」

「何してたこの部屋で」

「いっ……！」

「何してたこの部屋で」

ゆっくりとカチョーが私に近づき、大きな手の平が私の頬に添え……られなく、握りこぶしの形となって頭をぐりぐりぐりぐり……。

「っぴぎゃあー……っ！」

まあ結局ワタシが悪いんですけどもね。観察記録書いて、スケブに色んな角度のカチョーの顔をここぞと描いてみたり。

寝こみを襲うような真似事……何故かカチョーの布団に潜り込んで寝ていたし。

ビックリするほど熟睡できたんだよなあー、カチョーと壁に挟まれていたせいなのかベッドから落ちなかったし。と、カチョーの部屋でお説教を小一時間され、正座でブツブツ言いながらも反省していたら……。

「今夜から一緒に寝る」

何故に決定事項お!?

「俺も熟睡できたから」

あーそうですかそうですか、熟睡できて良かったですねー……………
…じゃないしっ!!

「カチョー!」

「なんだ」

「ワタシのカラダが目当てなんデスねっ!」

「それもあるが俺はもともと薬でも飲まない限り熟睡なんてした事がない。ユリと寝た今、自分でも驚くほど体力が回復している。つまり一緒に寝れば俺もユリもよく眠れる。……理由は以上だ」

待って! それもあるがってサラリと言ったよカチョー! 大事だから二回言うけども、それもあるがってサラリと言ったよカチョー!
!

それもあ……!! うええええ!?

パクパクと餌をねだる金魚のように口を動かしていたら、「ああ、

わかった」とカチョーがクローゼットを開ける。

「腹減ったんだろ。食べに行くぞ」

「ち、違っ！」

お腹が空いているのは事実デスが、そうじゃない！ 貞操の危機
いいっ！！

美味しく頂かれちゃうう！ ——美味しくないかもしれませんが
がねっ！ ていうか頂かれたくもあるけど心の準備と下着の準備と
お風呂の準備と……！！

アワアワと正座から立ち上がって、黒のＴシャツを脱ぐカチョー
から逃げるように自室へ行こう……っとおおっ！！

ずっと正座していたから痺れて足がもつれ、床へ倒れる直前にべ
ちやっと壁に顔が当たった。

お、おかしいデスね。ここに壁なんてあったかな。

ていうかやけに温かいデス。

ていうか壁紙の色随分と黄ばんできましたね？

手をつき顔を離すけど、その手が触れる感触が……。

「む、む、む……」

「ユリ、大丈夫か」

「む、ムネ肉……」

あろうことか上半身裸（キャツ）のカチョーに抱きついちゃって
まあまああ！ 風呂場でチラッと見たことはあるけれど、引き締
まった体はなんてお美しいのでしょーかつ！

思わずすりすりと頬ずりをば……すりすりすりすり……。

がしっ。

「ユリ、着替えてこい」

突然両肩を掴まれ、くると反転させられたかと思ったら、ぽーいと部屋から追い出された。ちょ、いきなりだな！ そんなに早くご飯食べに行きたいのかカチョーめ。

あーあ、もっと堪能したかったなあっ！

ほんのちょっとしたイタズラ心がえらい目にい！（後書き）

「妄想部」

http://mypage.syosetu.com/1445
26／

本日18時、回答編が投稿されます。

さて、私はどのお話を書いたでしょうか？（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0942s/>

捕獲大作戦

2011年11月1日14時07分発行